徳島大学埋蔵文化財調査報告書　第２巻

常　三　島　遺　跡　1

－工学部電気電子棟地点－

２００５

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

『徳島藩領国図屏風』徳島城下町部分

石組み船入状遺構 S36 (1)
上. 全景（北より）　下. 石組み部（北より）

石組み船入状遺構 S36 (2)
上. 石組み部（南より）　下. 同（東より）

序　　文

徳島大学のキャンパスは、大学事務局が所在する新蔵地区、総合科学部・工学部が所在する常三島地区、医学部・歯学部・薬学部・附属病院が所在する蔵本地区の三地区に分かれています。これらの三地区すべてが遺跡の上に立地していますので、1992年に埋蔵文化財調査室を設置して以来、遺跡の破壊を伴う建設工事に関しましては、工事に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

このうち常三島遺跡は、江戸時代の徳島城下町遺跡の一つであり、徳島藩中下級武士の屋敷地であったことが広く知られています。埋蔵文化財調査室は、主に工学部の敷地を中心として現在まで十数次にわたって、常三島遺跡の発掘調査を行ってまいりましたが、諸般の事情によって発掘調査報告書の刊行がこの間滞ったままでした。今般、工学部電気電子棟地点の発掘調査報告書を上梓できたことで、責務の一端をようやく果たして頂いたことになります。

本書で報告します電気電子棟の敷地は、平成14（2002）年に発掘調査を実施いたしました。当該地は、武家屋敷が立ち並ぶ前には、徳島藩の初期船置所となっていたとの記録が残っていまして、当時、工学部の南側は安宅島と呼ばれ、阿波水軍の基地が置かれた場所でありました。

発掘調査の結果、船置所が置かれていたことを示す可能性の高い素掘り船入状遺構が発見されました。さらに、船置所が現在の安宅へ移転し、屋敷地になった後も石組み船入状遺構を設置して、屋敷地から助任川へ出ていた可能性が高まってまいりました。

調査面積が狭いこともあり、それらの全貌を確定するには至っていませんが、今後、常三島遺跡の発掘調査報告書を順次刊行していく中で、江戸時代の徳島藩初期船置所の実態を徐々に解明して頂けるものと大いに期待しているところであります。

最後になりましたが、発掘調査・整理作業・報告書作成において多大なご尽力を賜った埋蔵文化財調査室の皆様、および御協力・御助言を頂きました学内・学外の関係機関・関係者の方々に厚く御礼申し上げます。本報告書が、徳島城下町遺跡の調査研究、全国的な江戸時代の考古学的調査研究、さらには文化財保護の一助となることを願っています。

平成17年3月31日

国立大学法人徳島大学

学長　**青　野　敏　博**

例　　言

1．本書は、2002（平成14）年に徳島大学埋蔵文化財調査室が実施した、徳島大学工学部実験研究棟改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．整理作業は、定森秀夫・堺圭子・平田順子・板東美幸が主に担当し、井本尚子・岸本多美子・安山かおり・山本愛子が補助した。出土遺物実測図のレイアウトは、徳島大学大学院生の石村友規が行った。

3．本書の執筆は、第１章･第２章を定森が行い、第３章を根津寿夫氏（徳島市立徳島城博物館)、第４章を金原正明氏（国立大学法人奈良教育大学)・金原正子氏（古環境研究所）に依頼して、原稿を頂いた。

4．本書の編集は、定森が行った。

5. 本書では、遺物実測図は原則として縮尺を１／３とし、遺構実測図は原則として１／40、１／200とした。図版の遺物写真は縮尺不同であり、図版の遺物番号は挿図の番号と一致する。

6．本書で使用した座標の値は、世界測地系に基づく国土座標系の値である。方位は座標北、レベルは海抜標高である。

7．発掘調査・整理作業では多くの方々に指導・教示を受けた。記して謝意を表します。
東潮・石尾仁志・石田啓祐・尾方めぐみ・勝浦康守・日下正剛・下田順一・菅原康夫・根津寿夫・平井松午・北條芳隆・北條ゆうこ・葭森健介

8．発掘作業には、石川芳樹・岩田ナツ子・小畠幸子・川田貞二・日下裕子・巣山太一・友竹崇明・中込正直・早渕里見・松本孝弘・三木治郎・吉川真紀・余保美代子と、徳島大学学生の金沢義暁・岸田典子・原田靖宏が作業員として参加した。

9．遺構・遺物の図面・写真は、徳島大学埋蔵文化財調査室で保管している。また、遺物も同埋蔵文化財調査室で保管しているので、研究・展示・社会教育などに広く利用されたい。

目　　次

第１章　はじめに …… 1
第１節　調査に至る経緯と調査体制 …… 1
第２節　調査方法と調査経過 …… 4
第３節　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 6

第２章　調査の成果 …… 10
第１節　調査の概要 …… 10
第２節　土層 …… 14
１．土層の概要 …… 14
２．包含層出土遺物 …… 14
第３節　江戸時代第３遺構面で検出された遺構と遺物 …… 20
１．素掘り船入状遺構Ｓ 41 …… 20
第４節　江戸時代第２遺構面で検出された遺構と遺物…… 24
１．石組み船入状遺構Ｓ 36 …… 24
２．土坑Ｓ 37 …… 28
３．土坑Ｓ 38 …… 30
４．土坑Ｓ 39 …… 30
５．土坑Ｓ 40 …… 30
第５節　江戸時代第１遺構面で検出された遺構と遺物…… 31
１．土坑Ｓ 16 …… 31
２．溝Ｓ 19 …… 41
３．土坑Ｓ 18 …… 44
４．土坑Ｓ 21 …… 44
５．土坑Ｓ 22 …… 44
６．土坑Ｓ 23 …… 44
７．土坑Ｓ 25 …… 46
８．土坑Ｓ 26 …… 46
９．土坑Ｓ 27 …… 46
10．土坑Ｓ 28 …… 47
11．土坑Ｓ 29 …… 47
12．土坑Ｓ 33 …… 47
13．土坑Ｓ 34 …… 47
14．土坑Ｓ 42 …… 48

第６節　江戸時代第１遺構面上半で検出された遺構と遺物 …… 48
１．井戸Ｓ 08 …… 48
２．曲物埋設遺構Ｓ 09 …… 49
３．土坑Ｓ 05 …… 49
４．溝Ｓ 07 …… 49
５．土坑Ｓ 10 …… 49
６．土坑Ｓ 11 …… 52
７．溝Ｓ 12 …… 52
８．土坑Ｓ 13 …… 52
９．土坑Ｓ 14 …… 52
10．土坑Ｓ 15 …… 52
11．土坑Ｓ 20 …… 53
12．土坑Ｓ 24 …… 53
第７節　明治時代水田面で検出された遺構と遺物 …… 53
１．水田Ｓ 01 …… 53
２．揚水施設Ｓ 04・暗渠Ｓ 17 …… 53
３．溝Ｓ 02 …… 55
４．土坑Ｓ 03 …… 56
５．土坑Ｓ 06 …… 57
第８節　考古学的まとめ …… 57

第３章　安宅の移転について …… 根津寿夫 …… 60
第１節　はじめに …… 60
第２節　安宅移転年に関する諸説 …… 60
第３節　安宅の移転年について …… 68
第４節　安宅移転の理由とその意義 …… 69
第５節　おわりに …… 70

第４章　常三島遺跡工学部電気電子棟地点における花粉分析
…… 金原正明・金原正子 …… 72
第１節　はじめに …… 72
第２節　試料について …… 72
第３節　方法 …… 72
第４節　結果 …… 73
第５節　考察とまとめ …… 76

挿 図 目 次

第１図　常三島遺跡位置図……1
第２図　調査地位置図……1
第３図　発掘調査区位置図……2
第４図　常三島遺跡発掘調査地点図……4
第５図　吉野川下流域地形図……6
第６図　『徳島藩領国図屏風』安宅島部分拡大……7
第７図　調査地点と絵図との重ね合せ図……8
第８図　遺構配置図(1)……11
第９図　遺構配置図(2)……12
第10図　遺構配置図(3)……13
第11図　調査区西壁断面図……15
第12図　調査区東壁断面図……16
第13図　調査区東西断面図……17
第14図　包含層出土遺物実測図(1)……18
第15図　包含層出土遺物実測図(2)……19
第16図　素掘り船入状遺構Ｓ 41 実測図……21
第17図　素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土遺物実測図(1) … 22
第18図　素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土遺物実測図(2) … 24
第19図　石組み船入状遺構Ｓ 36 実測図……25
第20図　石組み船入状遺構Ｓ 36 断面図……26
第21図　石組み船入状遺構Ｓ 36 出土遺物実測図(1) … 27
第22図　石組み船入状遺構Ｓ 36 出土遺物実測図(2) … 29
第23図　石組み船入状遺構Ｓ 36 出土遺物実測図(3) … 30
第24図　土坑Ｓ 37・Ｓ 38・Ｓ 39・Ｓ 40 実測図 … … 30
第25図　土坑Ｓ 16 実測図……31
第26図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(1)……33
第27図　土坑Ｓ 16 出土火鉢・焜炉類拓本……33
第28図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(2)……34
第29図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(3)……35
第30図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(4)……36
第31図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(5)……37
第32図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(6)……38
第33図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(7)……39
第34図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(8)……40
第35図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(9)……41
第36図　溝Ｓ 19 実測図……42
第37図　溝Ｓ 19 出土遺物実測図(1)……43
第38図　溝Ｓ 19 出土遺物実測図(2)……44
第39図　土坑Ｓ 18・Ｓ 21・Ｓ 22・Ｓ 23・Ｓ 25・Ｓ 26・Ｓ 27・Ｓ 28・Ｓ 29 実測図……45
第40図　土坑Ｓ 33・Ｓ 34・Ｓ 42 実測図……46
第41図　土坑Ｓ 18・Ｓ 27・Ｓ 28・Ｓ 42 出土遺物実測図……47
第42図　井戸Ｓ 08・曲物埋設遺構Ｓ 09 実測図……48
第43図　井戸Ｓ 08 出土遺物実測図……49
第44図　土坑Ｓ 05・Ｓ 20・Ｓ 24 実測図……50
第45図　溝Ｓ 07・Ｓ 12、土坑Ｓ 10・Ｓ 11・Ｓ 13・Ｓ 14・Ｓ 15 実測図……51
第46図　曲物埋設遺構Ｓ 09、土坑Ｓ 10 出土遺物実測図……52
第47図　水田Ｓ 01 実測図……54
第48図　揚水施設Ｓ 04・暗渠Ｓ 17 実測図……55
第49図　溝Ｓ 02、土坑Ｓ 03・Ｓ 06 実測図……56
第50図　水田Ｓ 01、土坑Ｓ 03 出土遺物実測図……57
第51図　『御山下画図』……63
第52図　『忠英様御代御山下画図』……64
第53図　常三島遺跡工学部電気電子棟地点における花粉ダイアグラム……75

表　目　次

第１表　常三島遺跡（徳島大学構内）発掘調査一覧表……3
第２表　素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土土師皿法量表……23
第３表　安宅移転年比較表……68
第４表　常三島遺跡工学部電気電子棟地点における花粉分析結果表……74

巻頭図版目次

巻頭図版第１　『徳島藩領国図屏風』徳島城下町部分
巻頭図版第２　石組み船入状遺構Ｓ 36 (1)
巻頭図版第３　石組み船入状遺構Ｓ 36 (2)

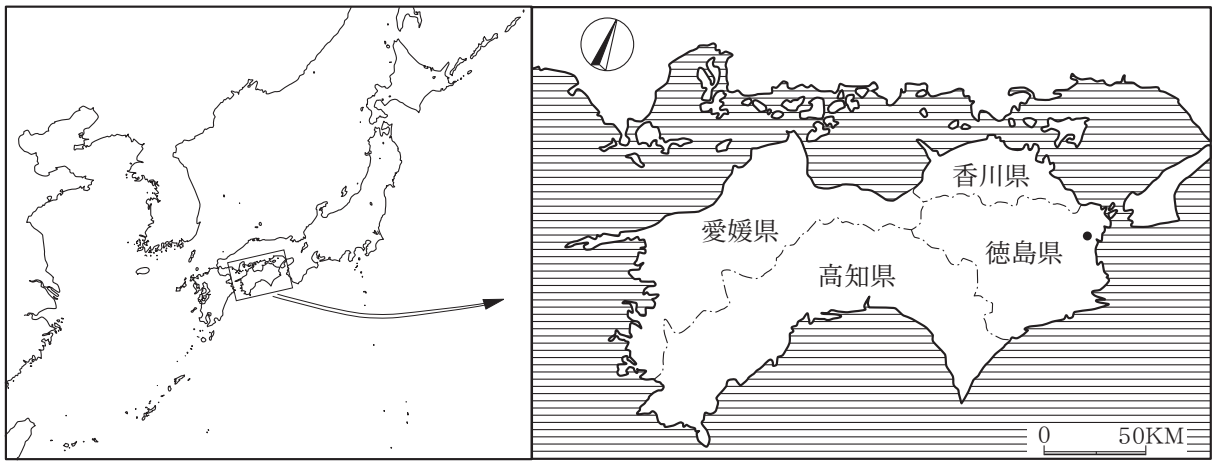
図 版 目 次

図版第１　常三島遺跡航空写真
図版第２　調査区西壁断面・調査区東壁断面(1)
図版第３　調査区東壁断面(2)・調査区東西断面
図版第４　江戸時代第３遺構面
素掘り船入状遺構Ｓ 41
図版第５　江戸時代第２遺構面(1)
石組み船入状遺構Ｓ 36
図版第６　江戸時代第２遺構面(2)
石組み船入状遺構Ｓ 36
図版第７　江戸時代第２遺構面(3)
石組み船入状遺構Ｓ 36、土坑Ｓ 37 ～Ｓ 40
図版第８　江戸時代第１遺構面(1)
土坑Ｓ 16
図版第９　江戸時代第１遺構面(2)
土坑Ｓ 16
図版第 10　江戸時代第１遺構面(3)
土坑Ｓ 16
図版第 11　江戸時代第１遺構面(4)
溝Ｓ 19
図版第 12　江戸時代第１遺構面(5)
土坑Ｓ 18・Ｓ 21・Ｓ 22・Ｓ 23・Ｓ 25・Ｓ 26
図版第 13　江戸時代第１遺構面(6)
土坑Ｓ 28・Ｓ 29・Ｓ 33・Ｓ 34
図版第 14　江戸時代第１遺構面上半(1)
井戸Ｓ 08
図版第 15　江戸時代第１遺構面上半(2)
井戸Ｓ 08、曲物埋設遺構Ｓ 09
図版第 16　江戸時代第１遺構面上半(3)
井戸Ｓ 08、曲物埋設遺構Ｓ 09、土坑Ｓ 05、
溝Ｓ 07、土坑Ｓ 10・Ｓ 11・Ｓ 15
図版第 17　江戸時代第１遺構面上半(4)
溝Ｓ 12、土坑Ｓ 13・Ｓ 14・Ｓ 20・Ｓ 24
図版第 18　明治時代水田面(1)
水田Ｓ 01
図版第 19　明治時代水田面(2)
揚水施設Ｓ 04・暗渠Ｓ 17
図版第 20　明治時代水田面(3)
揚水施設Ｓ 04・暗渠Ｓ 17
図版第 21　明治時代水田面(4)
暗渠Ｓ 17、土坑Ｓ 03・Ｓ 06、水田Ｓ 01 サンプル採集地点
図版第 22　包含層出土遺物
図版第 23　素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土遺物(1)
図版第 24　素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土遺物(2)
図版第 25　石組み船入状遺構Ｓ 36 出土遺物
図版第 26　土坑Ｓ 16 出土遺物(1)
図版第 27　土坑Ｓ 16 出土遺物(2)
図版第 28　土坑Ｓ 16 出土遺物(3)
図版第 29　土坑Ｓ 16 出土遺物(4)
図版第 30　土坑Ｓ 16 出土遺物(5)、溝Ｓ 19 出土遺物、土坑Ｓ 27 出土遺物
図版第 31　井戸Ｓ 08 出土遺物、曲物埋設遺構Ｓ 09 出土遺物、水田Ｓ 01 出土遺物、土坑Ｓ 03 出土遺物、碁石・火打石・加工円盤
図版第 32　工学部電気電子棟渡り廊下設置解説板
図版第 33　常三島遺跡工学部電気電子棟地点の花粉・寄生虫卵

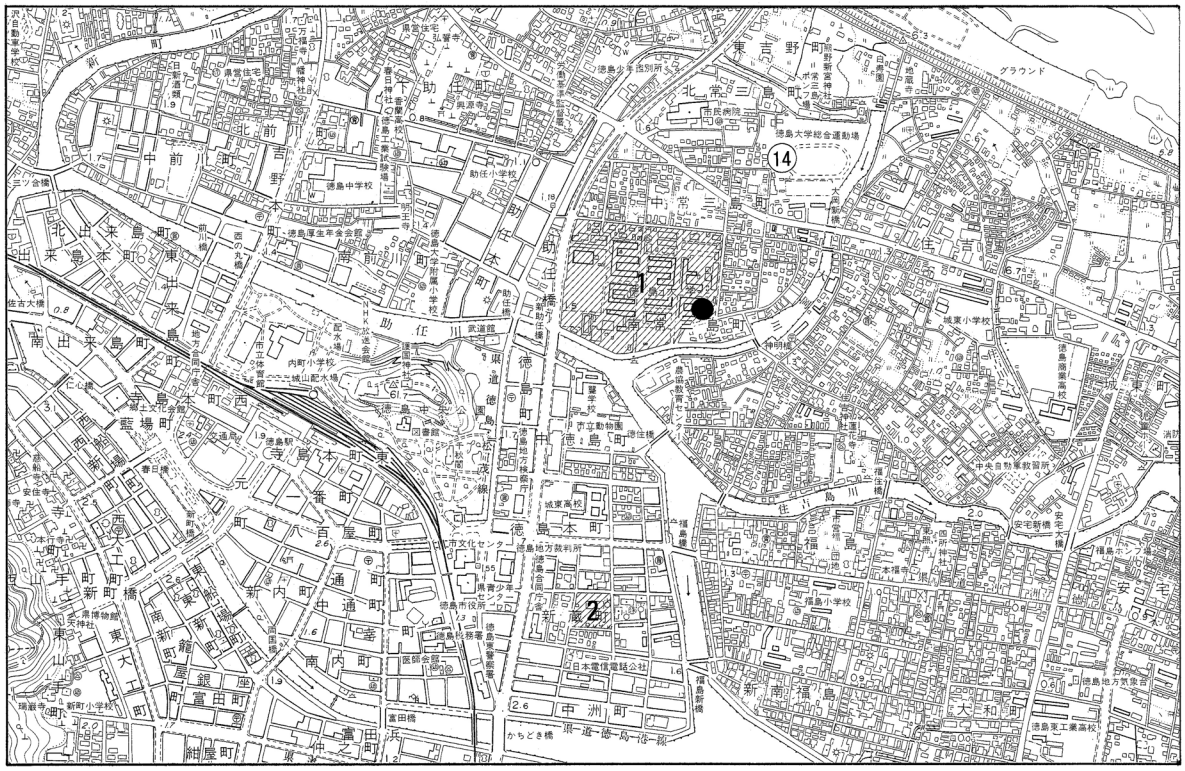
第１章　は　じ　め　に

第１節　調査に至る経緯と調査体制

徳島大学常三島キャンパスは、徳島市南常三島町１丁目・２丁目に所在する。江戸時代からこの一帯は“常三島”と呼ばれ、現在も北常三島町・中常三島町・南常三島町という町名としてその名称が残っている。この地域の遺跡を常三島遺跡（第１・２図、図版第１）と総称しているが、これは「埋蔵文化財包蔵地としての徳島城下町跡」の一部をなすものである。 埋蔵文化財調査室は、調査室が設置された



第１図　常三島遺跡位置図　●が常三島遺跡



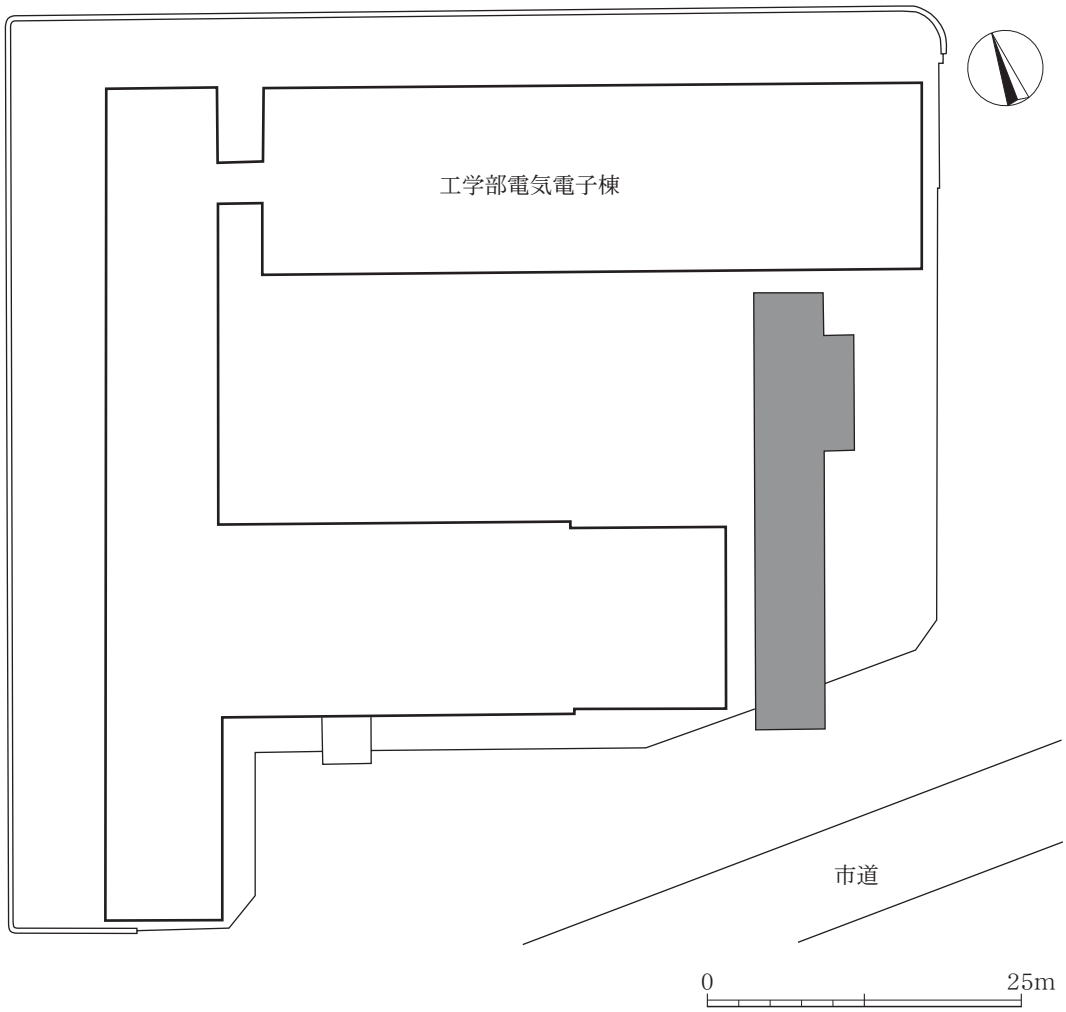
第２図　調査地位置図（縮尺：１／20,000）
1. 常三島遺跡（常三島キャンパス）　2. 新蔵遺跡（大学事務局）　⑭は第14次調査地点　●は電気電子棟地点

1992年より、主に工学部で行われる工事に先立って、常三島遺跡の埋蔵文化財発掘調査を継続して行ってきた。それらの調査成果から、本遺跡では江戸時代の様々な遺構が極めて良好に残っていることを確認してきたところである。

2002（平成14）年、徳島大学工学部電気系実験研究棟（電気電子棟）の改修工事を行うことが決定され、その改修工事に伴って南棟建物の一部増築、および南棟と北棟とを結ぶ渡り廊下の新設が計画された。今回のこの工事も、増築部と渡り廊下部分は掘削深度が深く、当該地の江戸時代の遺構が破壊されることが確実であったため、埋蔵文化財発掘調査を実施する必要性が出てきた（第３図）。

埋蔵文化財調査室では、この「徳島大学工学部実験研究棟改修その他工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査を、以下の調査体制でもって、2002年５月20日より８月５日まで実施した。以下の肩書き等は、発掘調査当時のものである。

調査主体　　徳島大学施設委員会
　　委員長　齋藤史郎　徳島大学学長
　　徳島大学埋蔵文化財調査室
　　室長　　定森秀夫　総合科学部助教授



第３図　発掘調査区位置図（縮尺：１／600）　黒塗りつぶし部が発掘調査予定区画

調査員　　定森秀夫（現場主任）
　　中村　豊　大学開放実践センター助手
調査補助員　堺　圭子・井本尚子・安山かおり　施設部技術補佐員

なお、最終的な発掘調査面積は253㎡であった。

徳島大学構内の常三島遺跡に対する発掘調査は、1992年から始まり、2003年までの12年間で計17次にわたる。調査期間の長短はあるものの、１年に最低1.4回の発掘調査を行っていたことになる（第１表、第４図）。

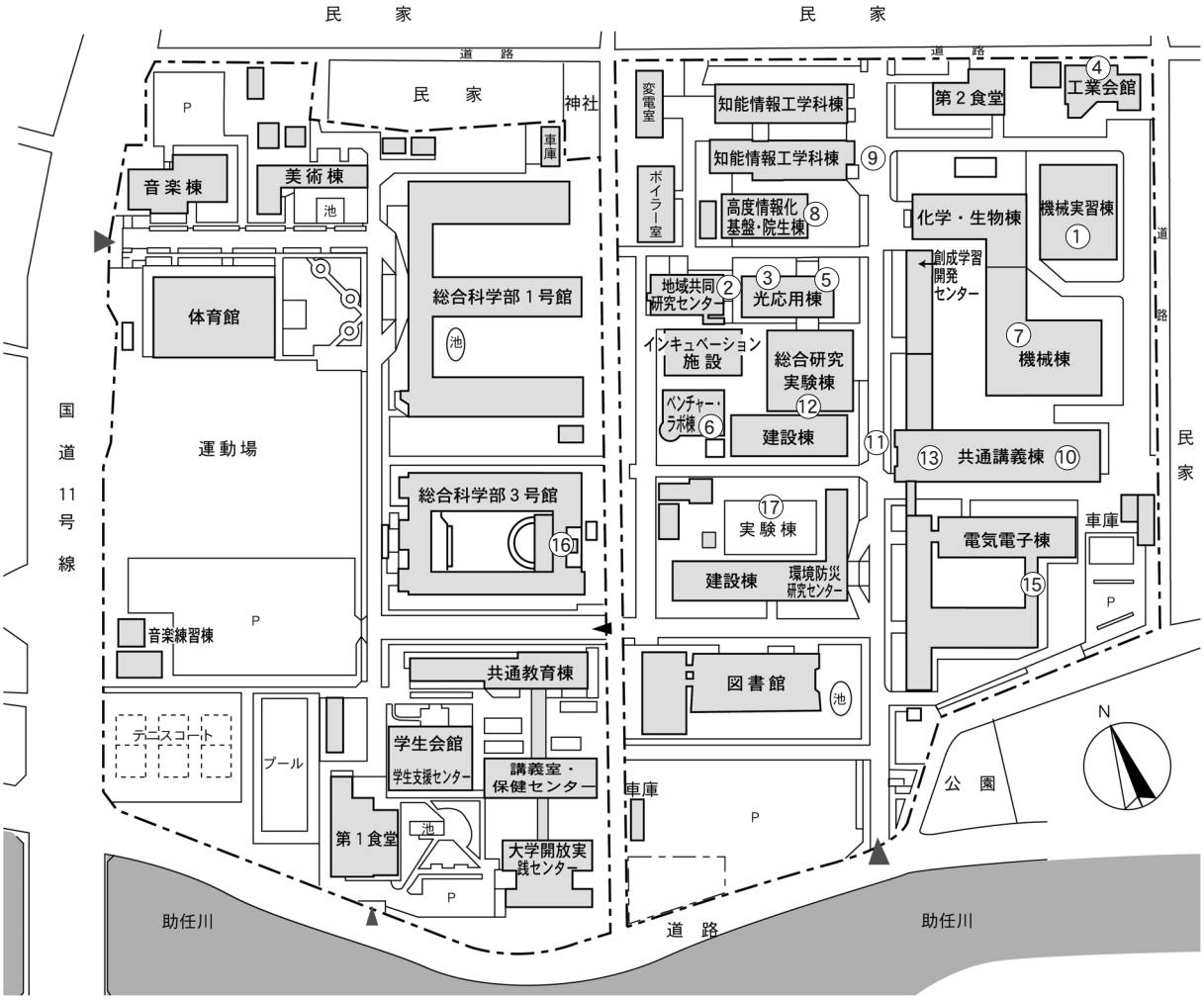
そのうち、第４次調査は工学部の工業会館地点の調査であるが、調査主体は徳島市教育委員会であった。この調査に関しては、すでに1997年に調査概報が刊行されている（第３節の参考文献参照）。

いっぽう、徳島大学埋蔵文化財調査室が主体となった調査は16次に上るが、諸般の事情により発掘調査報告書を刊行できない状況が続いていた。したがって、正式な常三島遺跡発掘調査報告書としては、本書が初めてとなる。

本来であれば、第１次調査から順次発掘調査報告書を刊行していくべきところであるが、2002年４月

第１表　常三島遺跡（徳島大学構内）発掘調査一覧表

調査名	調査実施年（年度）	調査地点	調査面積（㎡）	調査期間	調査主体	担当者（○は現場主任）
第１次調査	1992年（平成４年度）	工学部実習棟試掘	160	9月10日～9月20日（11日間）	徳島大学	東　潮 ○北條芳隆
第２次調査	1993年（平成５年度）	地域共同研究センター	373	10月1日～10月30日（１ヶ月）	徳島大学	東　潮 ○北條芳隆
第３次調査	1995年（平成７年度）	光応用工学科	783	8月22日～3月25日（７ヶ月）	徳島大学	東　潮 ○橋本達也
第４次調査	1995年（平成７年度）	工業会館	400	12月1日～1月31日（２ヶ月）	徳島市教委	勝浦康守
第５次調査	1996年（平成７年度）	光応用工学科－追加	165	4月17日～5月30日（１ヶ月半）	徳島大学	東　潮 ○橋本達也
第６次調査	1996年（平成７年度）	サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー	619	6月6日～8月10日（２ヶ月）	徳島大学	東　潮 ○橋本達也
第７次調査	1997年（平成８年度）	機械工学科	1,800	7月24日～11月8日（３ヶ月半）	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也 中村　豊
第８次調査	1997年（平成９年度）	総合情報処理センター	687	3月28日～6月10日（２ヶ月半）	徳島大学	北條芳隆
第９次調査	1998年（平成９年度）	共同溝	178	7月22日～9月4日（１ヶ月半）	徳島大学	北條芳隆 ○中村　豊
第10次調査	1999年（平成10年度）	共通講義棟Ⅰ	900	5月10日～6月7日（１ヶ月）	徳島大学	北條芳隆 ○中村　豊
第11次調査	1999年（平成10年度）	共同溝Ⅱ－４	200	6月28日～8月11日（１ヶ月半）	徳島大学	○北條芳隆 橋本達也
		共同溝Ⅱ－１ 共同溝Ⅱ－２	171 300	7月15日～5月26日（10ヶ月）	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也
第12次調査	2000年（平成11年度）	総合研究実験棟	1,000	7月24日～11月27日（４ヶ月）	徳島大学	北條芳隆
第13次調査	2001年（平成12年度）	総合教育研究棟（共通講義棟Ⅱ期）	1,110.6	3月15日～6月8日（３ヶ月）	徳島大学	北條芳隆 ○中村　豊
第14次調査	2002年（平成13年度）	総合グランド管理舎器具庫の配水管	100	2月21日～3月1日（２週間）	徳島大学	北條芳隆
第15次調査	2002年（平成14年度）	工学部電気電子棟	253	5月20日～8月5日（２ヶ月半）	徳島大学	○定森秀夫 中村　豊
第16次調査	2002年（平成14年度）	総合科学部３号館	532	7月29日～10月31日（３ヶ月）	徳島大学	○定森秀夫 中村　豊
第17次調査	2003年（平成15年度）	工学部建設（総合研究）棟	381	4月28日～7月17日（２ヶ月半）	徳島大学	○定森秀夫 中村　豊



第４図　常三島遺跡発掘調査地点図　囲み数字は第１表の次数に一致（第14次調査地点の位置は第２図の⑭）

より調査室長が北條芳隆から定森秀夫にかわったこともあり、定森が赴任後初めて調査を行った2002年度の工学部電気電子棟地点調査の発掘調査報告書から刊行していくことにした。

今後、常三島遺跡の発掘調査報告書を順次刊行していく予定であるが、膨大な数量の遺物がほとんど未整理の状態にあり、整理作業に相当の期間を要するものと思われる。そのため、正式報告書を刊行する前にも、常三島遺跡に関する重要な情報などは、埋蔵文化財調査室のホームページや刊行物、学内外の刊行物で積極的に公開していくつもりである。また、報告書刊行の遅延を理由に資料の活用に制限を加えるものではないので、報告書未刊のものでも、いつでも必要であれば利用してもらえるような状況にしておく予定である。

第２節　調査方法と調査経過

これまでの常三島遺跡における測量基準点は、第３次調査の際、工学部総合研究実験棟の東側の道路上に任意に設置した基準点であった。そして、第11次調査の時点でその基準点が壊されることになり、より北側に位置する工学部知能情報工学科棟の東側道路にその基準点を３点移設した。工学部総合研究実験棟東側の測量基準点に依拠した調査は、第３次調査・第５～７次調査・第11～13次調査である。

第14次調査以前のそれ以外の調査に関しては、周辺の建物や地形を図面に入れることで将来の復元を可能にする方法をとっている。

第15次調査から第17次調査までは、上述の測量基準点に依拠して、グリッドを設定し、遺物の取り上げや実測などを行っている。しかし、この基準点は、あくまでも任意点であり、汎用性に欠けるため、第16次調査の総合科学部３号館地点調査時に、世界測地系に基づく国土座標をその任意の点に与える作業を行った。したがって、工学部電気電子棟地点発掘調査に関しても国土座標への変換が可能となった。上述した任意の測量基準点に依拠した調査に関しても国土座標への変換が可能である。

徳島大学構内の常三島遺跡発掘調査に関しては、上述した測量基準点に依拠して、構内全体に５ｍグリッドのメッシュを設定している。南北方向は、基準点を基点に南へ向かってＡＢＣの順でＺに至ったらまたＡから始めるという方式で、基準点ラインより北側もその順に従っている。東西方向は、基準点を基点に東に向かって１、２、３の順にして20までを数え、また１から始める方式で、基準点より西側もその順に従っている。グリッドは、北西隅の杭を基準とし、その杭の東南側の５×５ｍの区画として設定している（第８図左）。このグリッドは、基本的に常三島キャンパスの建物と平行するように設定されている。

工学部電気電子棟地点のＢ15・Ｂ17の世界測地系に基づく国土座標は、以下の通りである。

	Ｘ座標	Ｙ座標
Ｂ15	119968.201ｍ	98099.568ｍ
Ｂ17	119967.291ｍ	98109.526ｍ

なお、常三島遺跡の全体のグリッド配置図に関しては、次に刊行する常三島遺跡発掘調査報告書で詳しく説明することにし、本書では略述するにとどめた。

次に調査の経過に関して、以下に簡述する。

人力掘削の発掘調査に入る前に、アスファルト撤去と重機掘削の立会いを４月30日から開始した。しかし、地下埋設物が多かったことや雨が多かったため、重機掘削が終了したのは５月14日で、以上の作業で約２週間を費やしてしまった。５月20日から作業員を投入したが、壁面崩壊を防ぐための土留め作業と撹乱掘削にさらに時間がかかり、実際に発掘調査に着手し始めたのは５月27日からであった。

明治時代の水田Ｓ01を検出した後、５月30日に水田Ｓ01の全景写真撮影を行い、６月３日から第１遺構面までの掘り下げを開始した。遺構の密度は調査区北半で濃密であり、調査区南半では遺構をほとんど検出することができなかった。６月19日には、調査区南半の第１遺構面完掘状況写真撮影を行った。その後も調査区南半は遺構がほとんどなかったので、一気に第３遺構面である砂上面まで掘り下げて、６月21日に第３遺構面完掘状況写真撮影を行った。調査区北半は遺構が多く、切り合い関係が複雑であったため、第１遺構面全体写真撮影は調査区南半より遅れて６月24日に行った。

調査区北半では、第１遺構面の廃棄土坑である土坑Ｓ16から陶磁器・土器・瓦などが多数出土し、その処理に時間がかかってしまった。土坑Ｓ16の下に存在していた第２遺構面の石組み船入状遺構Ｓ36の調査は７月５日から開始した。その後、調査区西壁沿いに断ち割りを入れたところ、石組み船入状遺構Ｓ36よりやや西側に位置し、層位的にそれより下になる素掘り船入状遺構Ｓ41があることが判明した。この素掘り船入状遺構Ｓ41の平面的な調査は７月24日から開始した。７月26日午前に、石組み船入状遺構Ｓ36と素掘り船入状遺構Ｓ41の写真撮影を行い、午後にそれら船入状遺構に関する記者

発表を行った。その後、若干掘り残した部分の調査や実測図作成などを行い、８月５日に発掘調査作業のすべてを終了した。

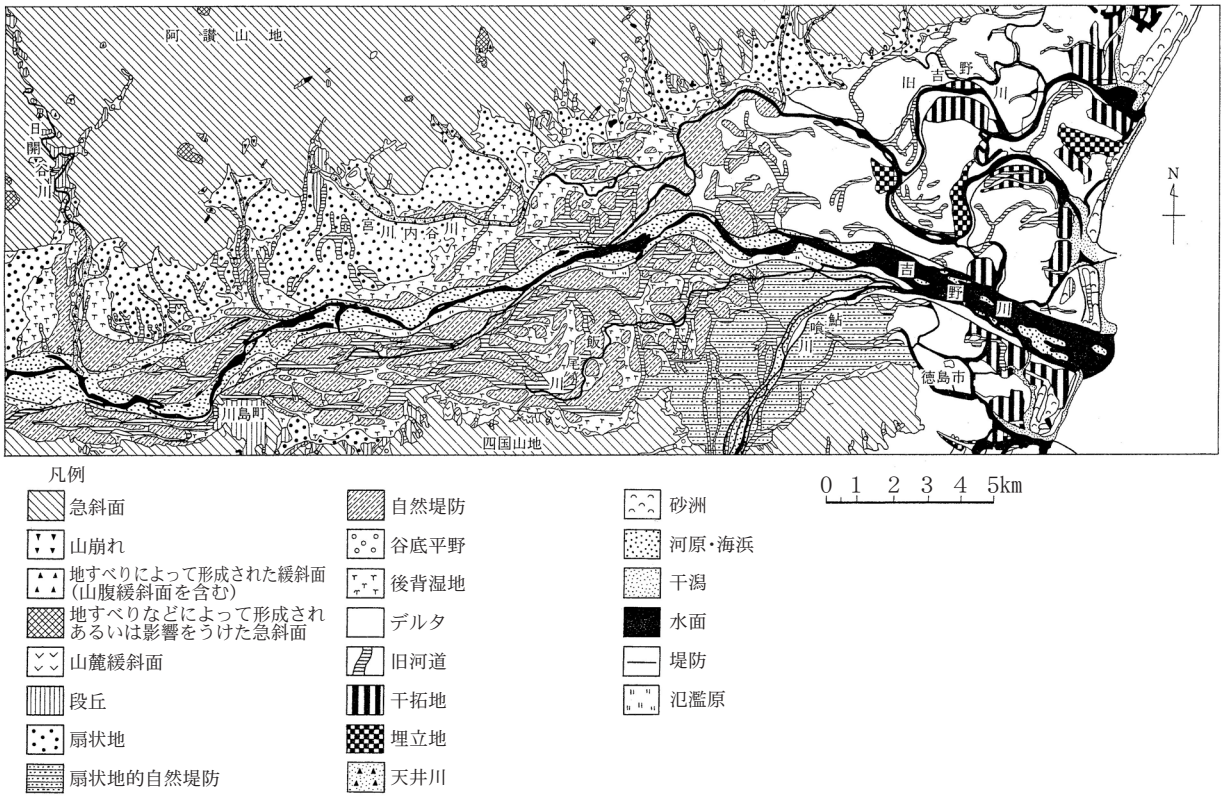
第３節　遺跡の地理的・歴史的環境

常三島遺跡が立地する吉野川河口域は、総延長194ｋｍの四国第一の川、吉野川によって造られた沖積平野をなす。吉野川は、「坂東太郎」の異称を持つ利根川、「筑紫次郎」の異称を持つ筑後川とともに、「四国三郎」の異称を持つ大河である。

吉野川は中央構造線に沿って流れ、その北岸には阿讃山地、南岸には四国山地が連なる。阿讃山地は主に和泉砂岩によって構成されているため、北岸では扇状地が形成され、いっぽう四国山地は結晶片岩によって構成されているため、南岸では侵蝕が少なく山塊が吉野川に迫るという、北岸と南岸とで地形的な特徴が異なる様相を見せる。

約6000年前の縄文海進では、現在の標高５ｍまでは海であったとされていて、その後の寒冷化で海水面が低下するとともに、吉野川が運ぶ土砂の堆積で徐々に三角州が形成され、陸地化していったものと考えられている（第５図）。

常三島遺跡周辺では、縄文時代の遺跡として、徳島城が築かれた城山（渭山）山麓に後期からの城山貝塚が存在する。弥生時代には眉山山麓に遺跡が形成されるが、主に眉山山麓でも西側であり、三谷遺跡・庄遺跡・名東遺跡などが知られ、発掘調査も進んでいる。しかし、常三島遺跡周辺に関しては弥生時代・古墳時代の遺跡は今のところ知られていない。



第５図　吉野川下流域地形図　大矢雅彦『河川地理学』（古今書院、1993年）、89頁の図7.6より

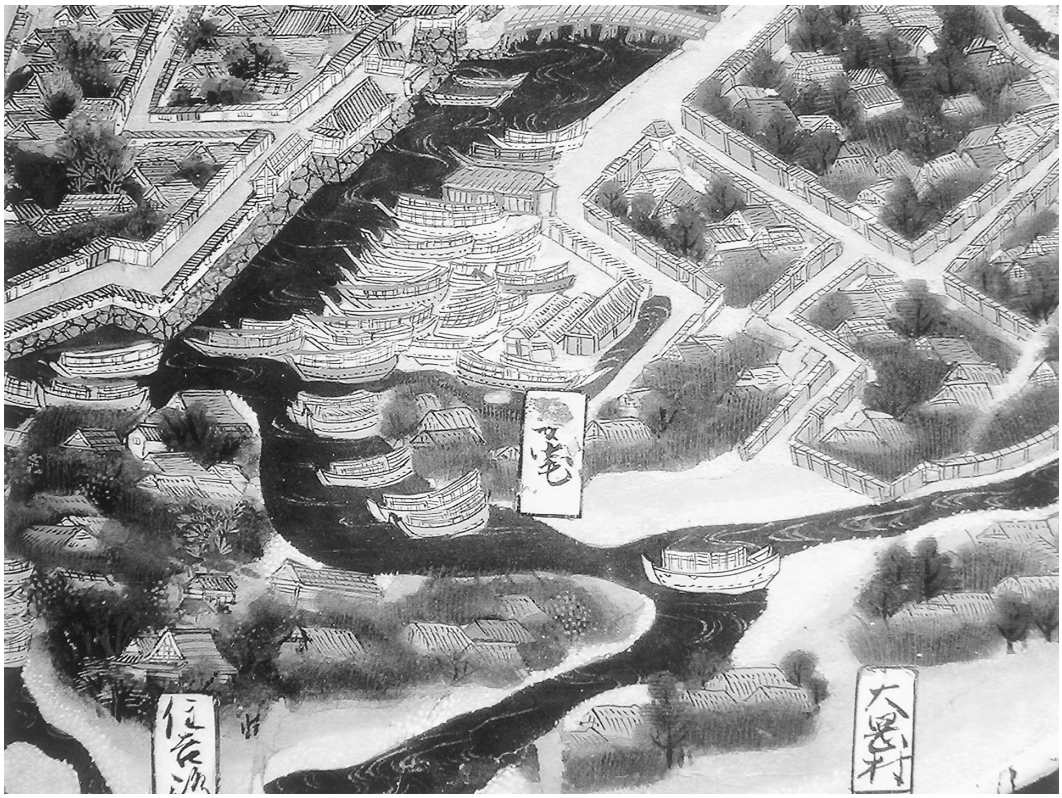
吉野川河口付近には阿波国の条里があり、奈良時代の８世紀中頃には東大寺領阿波国新島荘が置かれていた。この新島荘には３地区があり、そのうちの枚方地区が現在の北田宮・上助任町付近に比定されている。その後、10世紀頃まで新島荘が確実に存続していたことが文献記録に残されている。常三島一帯は、復元比定された地域より南東側にかなり離れているが、新島荘の枚方地区に含まれていた可能性もないではない。しかし、これまでの発掘調査による考古学的な状況証拠としては、その存在を示すものはいまのところ皆無である。

鎌倉時代に入ると、1203（建仁３）年、南助任保と津田島を寄進された大和春日神社が荘園化のため立券荘号を申請し、翌年に富田荘が正式に成立した記録が残されている。したがって、その頃には常三島一帯はさらに陸地化ないしは開拓が進められていたと推測されるが、新島荘の存在と同様に考古学的には実証されていない。

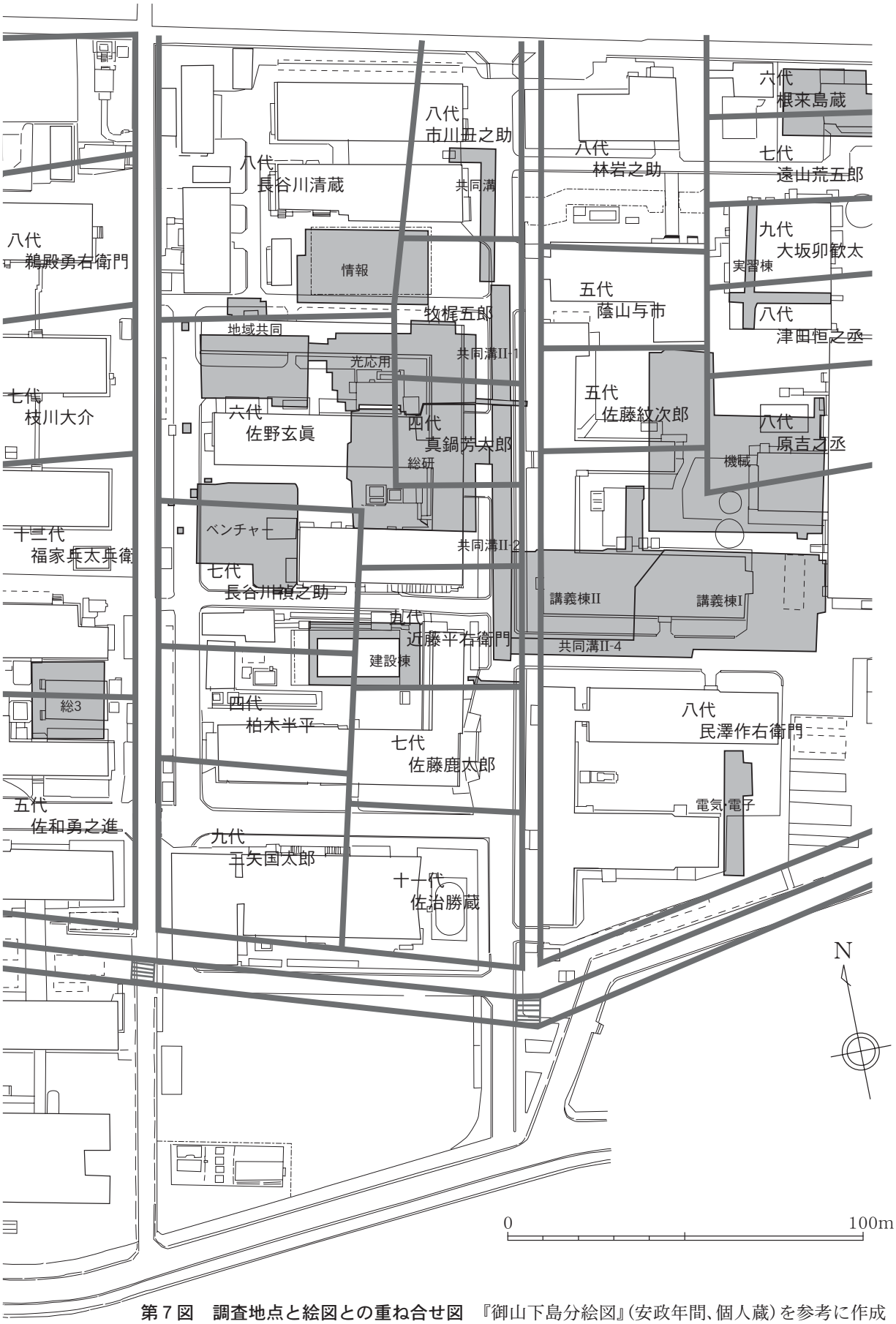
豊臣秀吉の四国平定によって、1585（天正13）年、蜂須賀家正が阿波国に入部し、現在の徳島城を中心として城下町建設にとりかかることになる。

今回の発掘調査地点は、『徳島藩領国図屏風』（巻頭図版第１）や『忠英様御代御山下画図』（推定寛永年間、国文学研究資料館史料館蔵、第52図）などに描かれている徳島藩の初期船置所がおかれていた安宅島に該当する（第６図）。この初期船置所は、助任川の堆積が厚くなり、船の航行に支障が出始めたため、現在の安宅の地へ移設されることになる。

そして、初期船置所が現在の安宅に移されて以後、おそらく埋立てなどの土木工事を行って、武家屋敷地として整備された。家老や上級武士は徳島城近くの新蔵などに屋敷地をもち、常三島は中下級武士の屋敷地であった。発掘調査地点は、民澤家の屋敷地としてそれ以後継続されていく。この民澤家の宅地は、常三島では最も大きな宅地であった（第７図）。



第６図　『徳島藩領国図屏風』安宅島部分拡大



第７図　調査地点と絵図との重ね合せ図　『御山下島分絵図』（安政年間、個人蔵）を参考に作成

なお、これまでに公刊された徳島城下町遺跡の調査報告書・概報を以下に挙げておきたい。本書は、それらの報告書を参考にしている。

勝浦康守「徳島城跡（確認調査）」（『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要６』所収、徳島市教育委員会、1996 年）。

勝浦康守「常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）」（『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要７』所収、徳島市教育委員会、1997 年）。

松永佳美『城ノ内遺跡徳島城跡お花畠地点発掘調査報告書（県武道館･弓道場に伴う発掘調査報告書）』（徳島県教育委員会、1988 年）。

日下正剛・植地岳彦『新蔵町１丁目遺跡　企業局総合管理センター（旧副知事公舎）地点―総合管理センター（仮称）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第 20 集、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター、1998 年）。

日下正剛・植地岳彦・北野信彦『新蔵町１丁目遺跡　企業局総合管理事務所地点Ⅱ―徳島県企業局総合管理事務所駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第 30 集、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター、2000 年）。

日下正剛・植地岳彦・北野信彦ほか『南前川町１丁目遺跡―鳴門教育大学（附小）校舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書―』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第 36 集、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター、2002 年）。

斎藤剛『徳島城下町遺跡出来島本町１丁目地点―徳島公共職業安定所及び徳島障害者職業センター庁舎新営地における埋蔵文化財発掘調査報告―』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第 47 集、徳島県教育委員会･財団法人徳島県埋蔵文化財センター･徳島労働局･日本障害者雇用促進協会、2003 年）。

勝浦康守『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』13（徳島市教育委員会、2003 年）。

第２章　調　査　の　成　果

第１節　調　査　の　概　要

調査区の北側に汚水管が東西に通っていて、それは調査中も使用されていた。調査区北端からその汚水管までの６ｍほどに関しては、撹乱を甚だしく受け、電気電子棟建物からの漏水が多かったので、当初より調査を断念した。それ以外の調査対象地は、多少の撹乱部分はあったものの、包含層・遺構が良好に残存していた。

遺構面は計５面（第８～10図）あるが、これは我々が作業進行上、任意に設定した遺構検出面であり、当時の生活面を示しているわけではない。明治時代の水田遺構面は海抜0.1ｍ、江戸時代の第１遺構面上半は海抜－0.1ｍ、同第１遺構面は海抜－0.15～－0.17ｍ、同第２遺構面は海抜－0.27～－0.3ｍ、同第３遺構面は海抜－0.4ｍ前後である。

主な遺構を形態別に見てみると、明治時代の水田・揚水施設・暗渠、江戸時代の井戸・土坑・溝・石組み遺構などがある。性格・機能が推定できる遺構の中で最も注目されるのは、重複して検出された石組み船入状遺構Ｓ36と素掘り船入状遺構Ｓ41とである。

遺構の分布密度を見ると、各種の遺構は調査区の北半に集中していたが、南半ではほとんど検出することができなかった。特に溝Ｓ19から南側には、江戸時代の遺構がほとんど存在していなかったことが注意された。

時期別に見れば、第１遺構面に遺構が多い傾向があり、第２遺構面、第３遺構面と面が下がっていくにつれて、遺構の密度は少なくなる。

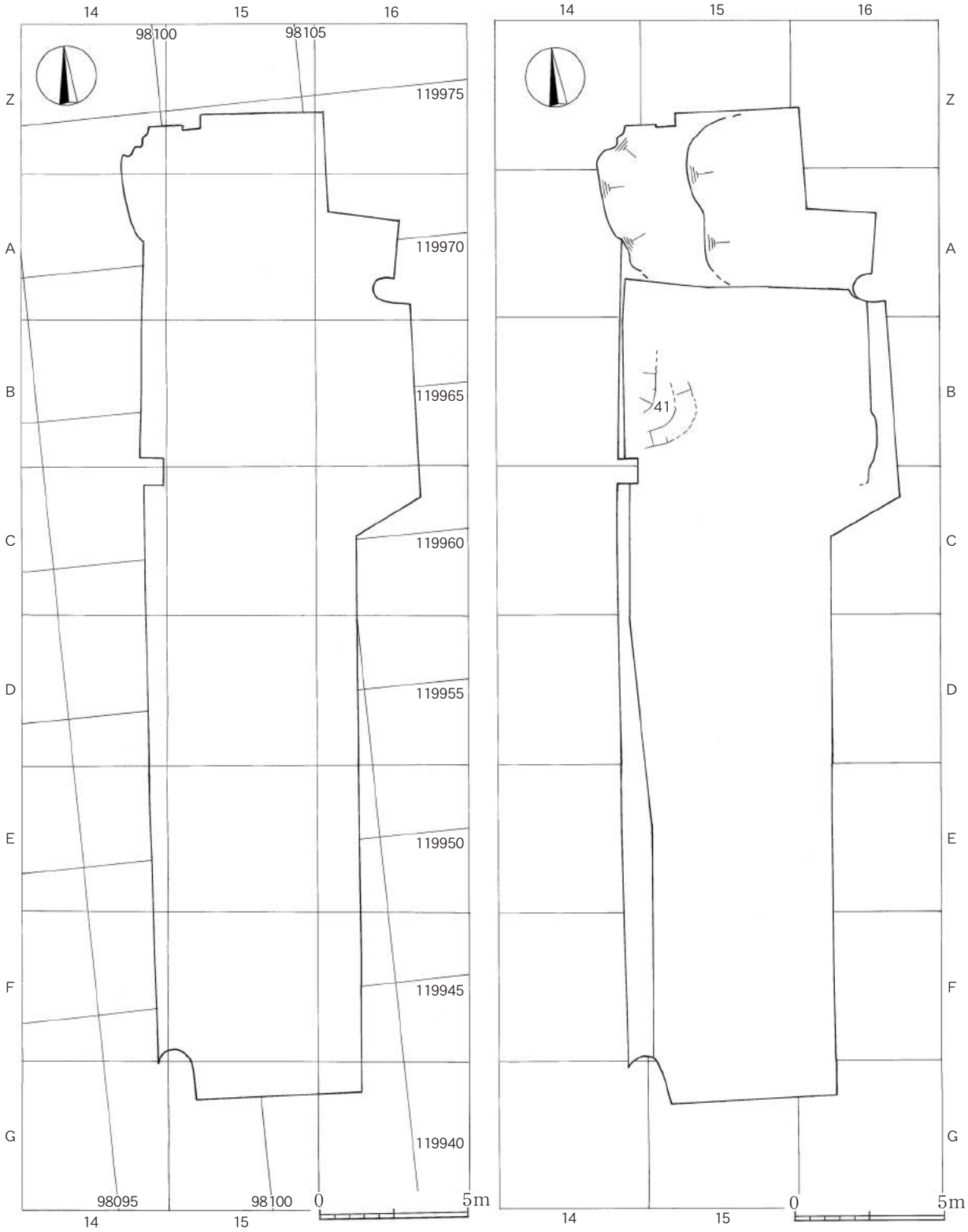
本章ではそれぞれの遺構面ごとに記述をしていくが、上の遺構面では確認できなかった遺構が、掘り下げた下の遺構面で確認される場合があり、同一遺構面での遺構すべてが同時期かやや前後する時期の遺構とは必ずしも言えない。例えば、江戸時代第１遺構面上半では、明治時代水田面の遺構の掘り残しが多々あったが、別途遺構名称を付けてしまっている。このように、同一の遺構であっても掘り足りない場合など、別の遺構番号を付けているが、いずれにせよ発掘現場での遺構番号を変更せずに報告することにした。

遺構番号は検出順であるため、上の遺構面で確認できなかったものの、掘り下げた段階で確認できたものも少なからずあり、必ずしも大きな番号が下の遺構面の遺構とは限らない。

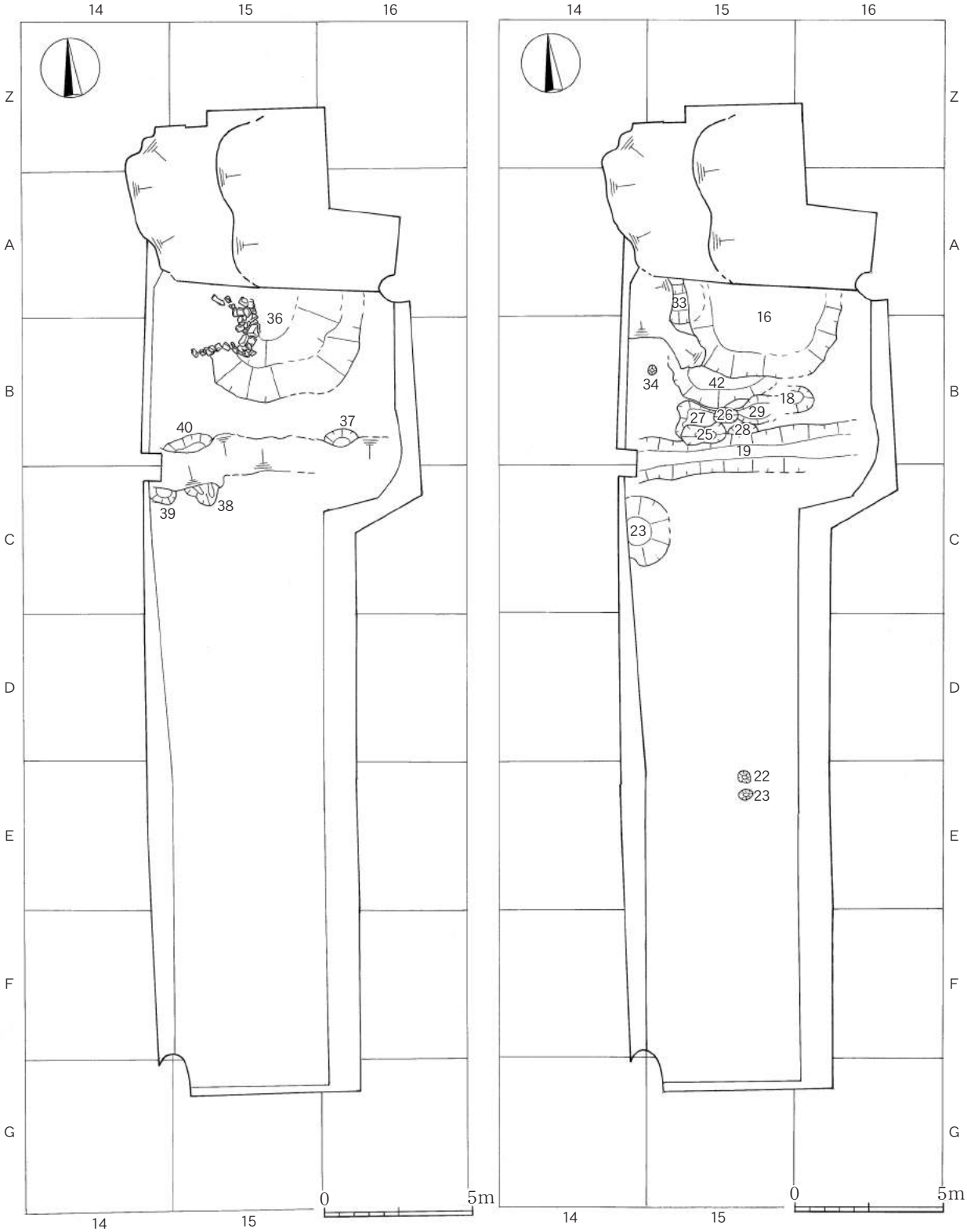
また、遺構らしきものを確認した段階で番号をふったが、その後の精査で遺構ではないと判断されたり、確認のために削ったりして消失したものもある。それに該当するのがＳ30・Ｓ32で、これらは欠番とした。Ｓ31は、当初、土坑と考えたが、整理の段階で暗渠Ｓ17の埋土上層とほぼ同じ土のため、暗渠Ｓ17の延長であり、南側が丸く広がっているのは、暗渠掘削時に肩が崩壊したためであろうと判断された。したがって、Ｓ31も欠番とした。

Ｓ35は、土坑Ｓ15の調査の際に同時に掘ってしまっていて、断面観察によって土坑Ｓ15とは別の遺構であることが判明し、番号を付した遺構である。欠番ではないが、断面図のみを呈示し、次節以降の解説では扱わないことにした。

なお、本報告書刊行前に、遺構・遺物の一部については、すでに以下の報告文を公表しているので、



第８図　遺構配置図(1)（縮尺：１／200）
左：グリッド配置図　右：江戸時代第３遺構面遺構配置図



第９図　遺構配置図(2)（縮尺：１／200）
左：江戸時代第２遺構面遺構配置図　右：江戸時代第１遺構面遺構配置図

第 10 図　遺構配置図(3)（縮尺：１／200）
左：江戸時代第１遺構面上半遺構配置図　右：明治時代水田面遺構配置図

そちらも合わせて参照していただきたい。

定森秀夫「常三島遺跡の船入状遺構」(『四国城下町通信』第10号所収、四国城下町研究会、2002年)。

定森秀夫「常三島遺跡（工学部電気棟地点）出土の土製火鉢･焜炉類」(第５回四国城下町研究会発表要旨・資料集『四国と周辺の土器Ⅱ―火鉢・焜炉類にみる流通と生活形態―』所収、四国城下町研究会、2003年)。

第２節　土　　層

１．土層の概要

発掘調査区の南北方向の土層図に関しては、西壁断面図（第11図、図版第２）と東壁断面図（第12図、図版第２・３）とを作成した。

調査区の西壁は、Ａ区の中心を横切る汚水管より北側が撹乱を受け、Ｄラインより約１ｍ南側では、電気電子棟の南棟基礎によって撹乱を受けていたので、主にＢ・Ｃ区の西壁断面を実測した。水田は、この西壁まで達していないので、西壁断面には水田層は出てこない。面的にもこの部分は遺構が多く、遺構の切り合いが断面にいくつか見られた。北側の素掘り船入状遺構Ｓ41の下で砂を確認し、それは海抜－1.4ｍ強であった。

調査区の東壁は、Ｄ～Ｆ区まで調査区東壁であるが、Ｂ・Ｃ区は東側へやや広がる形であったので、Ｄ～Ｆ区の東壁の延長で断面観察ができるようにして、その断面を実測した。東壁では、水田層が連続して存在し、主にＤ～Ｆ区の間では、水田層下の堆積も単純な堆積を示し、海抜－0.2～－0.3ｍで砂に達する。いっぽう、遺構が多く存在するＢ・Ｃ区では、堆積がやや複雑で、砂も西壁程度の深さまで達するものと思われた。

次に、東西方向の断面図（第13図、図版第３）に関しては、Ｂ区東西（水道管下）・Ｄライン・Ｅライン・Ｆラインに土層観察用の畦を残して、Ｅラインに関しては写真のみ撮影し、その他は実測図を作成した。

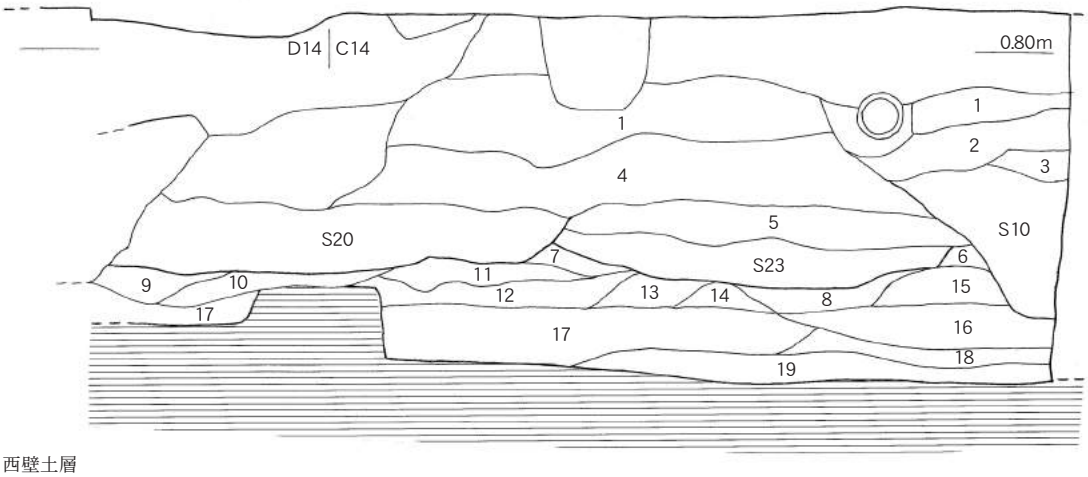
Ｄラインでは、水田層が存在し、東壁Ｄ～Ｆ区と同様な堆積が見られる。Ｆラインの断面でも水田層が存在し、複雑に分層はできたが、堆積は単純なものである。

なお、調査区南方で、山土を利用して整地した部分も確認している。

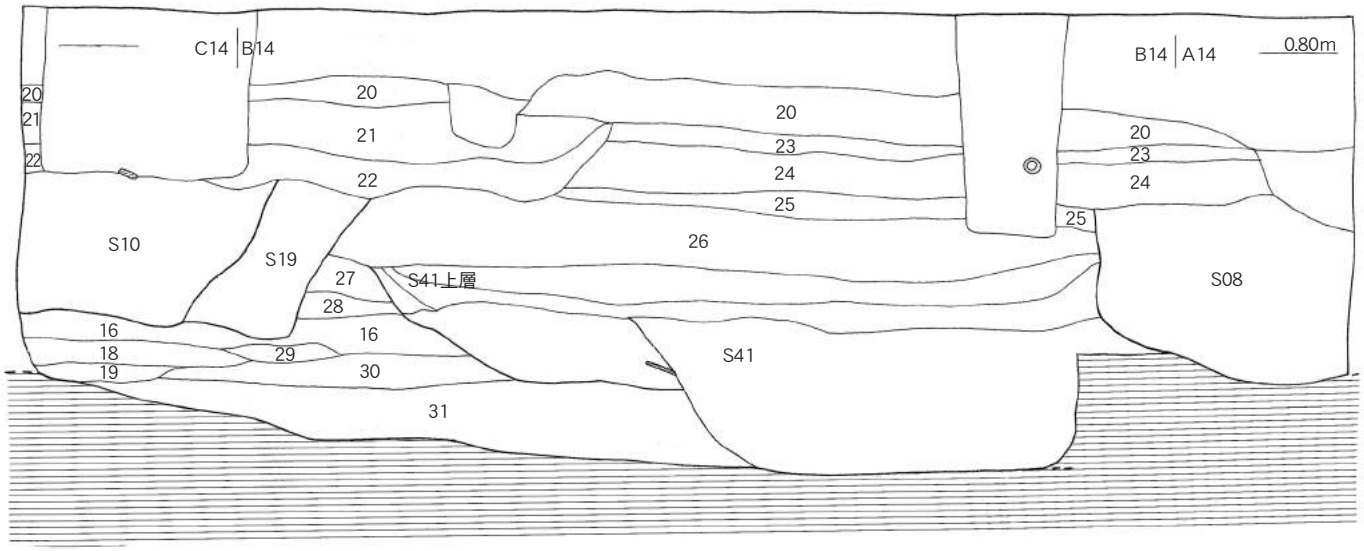
２．包含層出土遺物

遺構出土以外の遺物を、一括して包含層出土遺物として扱った（第14・15図、図版第22)。この中には、本来は遺構に伴うものも含まれるが、遺構出土遺物は遺構の存在を確認して以降のものに限定した。

〔陶器〕第14図 1は、瀬戸・美濃系の碗で、底部・高台・高台内は鉄釉、体部は乳白色を呈する灰釉の掛け分け。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。2は、大谷焼の鉢。高台内に鮮明な墨書がある。漢字ではなく、カタカナの「ツス」であろう。何らかの記号か。幕末前後のもの。3は、大谷焼で、鍋の底部。体部の底部近くに、小粘土塊を貼り付けていて、三足と思われる。底部に明瞭に墨書がみられるが、破片のためごく一部に残るのみで、読解不能である。19世紀代のものである。4は、大谷焼の通い徳利片。刻字の一部が見られ、これまでの出土例から「鮎喰」と思われたが、「魚」と読むには無理がある。「角」ないしは「角」偏の文字と解釈したほうが良かろう。その場合、地名ではなく屋号の可能性が高い。19世紀代のもの。



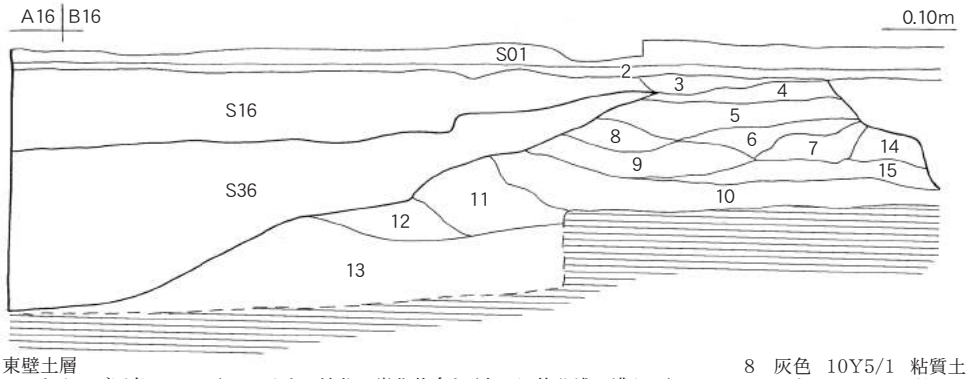
西壁土層
1　オリーブ褐色　2.5Y4/3　直径1～4cm程の礫多量に含む　シルト
2　灰オリーブ色　5Y5/3　直径2～6cm程の礫含む　シルトに灰オリーブ色　5Y6/2　キメの細かいシルト質粘土塊含む　瓦含む
3　オリーブ褐色　2.5Y4/4　やや粘性のあるシルト　瓦含む
4　黄褐色　2.5Y5/3　シルト質粘土(礫少量含む)　炭化物含む
5　黄褐色　2.5Y5/4　シルト質粘土(礫少量含む)　炭化物含む
6　灰オリーブ色　5Y5/2　微砂多量混シルト質粘土
7　黄褐色　2.5Y5/3、灰オリーブ色　5Y5/2　微砂少量混シルト質粘土　鉄分多量に含む
8　灰色　10Y6/1よりやや暗い　鉄分多く全体的にオリーブ褐色2.5Y4/4を呈する
9　灰オリーブ色　7.5Y6/2　微砂少量混粘土　鉄分多量に含む
10　灰オリーブ色　5Y5/3　微砂少量混粘土　鉄分多量に含む
11　オリーブ褐色　2.5Y4/4　細砂　粘土少量含む
12　灰色　7.5Y6/1　微砂極少量混粘土　鉄分多量に含む
13　灰オリーブ色　5Y5/2と灰オリーブ色　5Y5/3の中間色　粘土　鉄分多量に含む
　(基本的には12層と同じ土だが鉄分が多いため色調異なる)
14　基本的には12層と同じ灰色　10Y4/1　細砂含む
15　灰オリーブ色　7.5Y6/2　微砂極少量混粘土　鉄分多量に含む　基本的には12層と同じか？
16　灰色　10Y5/1、灰色　10Y4/1の中間色　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分含む
17　灰オリーブ色　7.5Y4/2　細砂
18　灰色　10Y5/1　よりやや暗い　微細砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分含む
19　灰色　10Y5/1　微細砂少量混シルト質粘土　鉄分含む



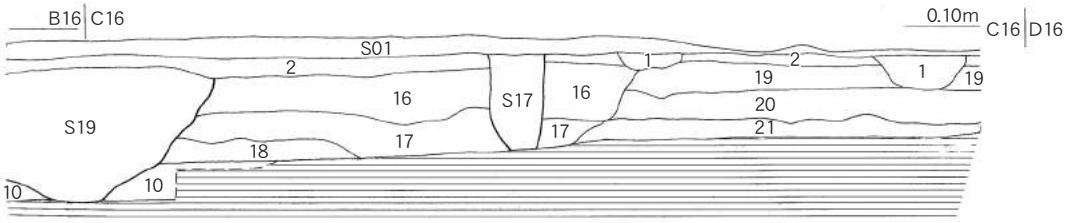
20　オリーブ褐色　2.5Y4/3　礫混シルト
21　にぶい黄褐色　10YR4/3　微砂(極細)礫混シルト質粘土
22　灰色　5Y6/1　シルト質粘土　炭化物含む
23　黄褐色　2.5Y5/3　シルトに灰オリーブ色　5Y6/2　キメの細かいシルト斑状に含む
24　にぶい黄色　2.5Y6/3　シルト質粘土　礫少量含む　炭化物含む
25　24層の土に灰黄色　2.5Y6/2　キメの細かいシルト質粘土斑状に含む
26　黄褐色　2.5Y5/3　シルト　炭化物含む
27　26層の土に灰色　7.5Y6/1　微砂混シルト質粘土　鉄分多量に含む
28　灰色　10Y6/1　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分含む
29　灰色　10Y4/1　細砂　鉄分含む
30　灰色　10Y5/1　シルト質粘土　鉄分含む
31　暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　微砂混粘土　鉄分含む

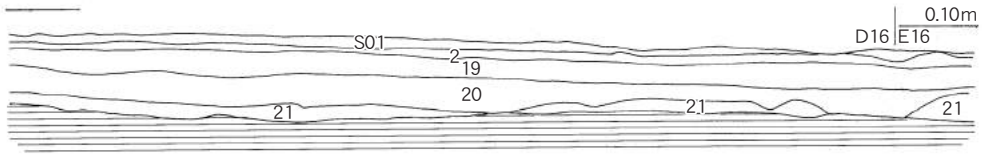
0　2m

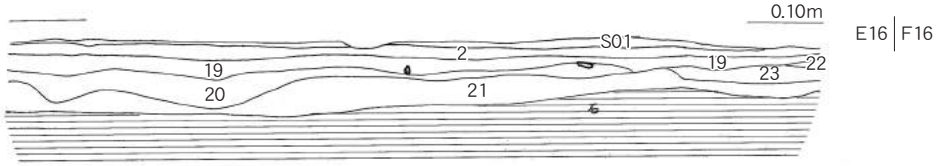
第 11 図　調査区西壁断面図（縮尺：１／40）

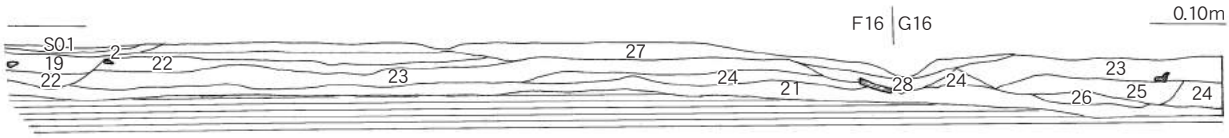


東壁土層
1　オリーブ灰色　10Y4/2　シルト　鉄分、炭化物含む(水田に伴う浅い溝か？)
2　灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト　鉄分多量に沈着(水田の床土にあたる層か？)
3　灰オリーブ色　7.5Y6/1　シルト質粘土　鉄分含む(S18埋土か？)
4　灰色　7.5Y6/1　シルト質粘質土(粗砂混じり)　鉄分含む
5　灰色　10Y6/1　シルト質粘土(砂混じり)　鉄分含む
6　灰色　10Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分含む
7　灰色　7.5Y6/1　砂質土(粘土混じり)　鉄分含む
8　灰色　10Y5/1　粘質土(砂混じり)　鉄分含む
9　灰色　7.5Y5/1　粘質土(粗砂混じり)　鉄分斑状に含む
10 灰色　7.5Y5/1　粘土　鉄分斑状に含む
11 オリーブ黒色　10Y3/2　粘土(砂混じり)
12 灰色　10Y4/1　粘質土(砂混じり)　炭化物少量含む
13 灰色　10Y4/1　粘性砂質土　有機物少量含む
14 灰白色　7.5Y7/1　シルト質粘土　鉄分含む
15 灰色　7.5Y5/1　シルト質粘土(粗砂混じり)　鉄分含む





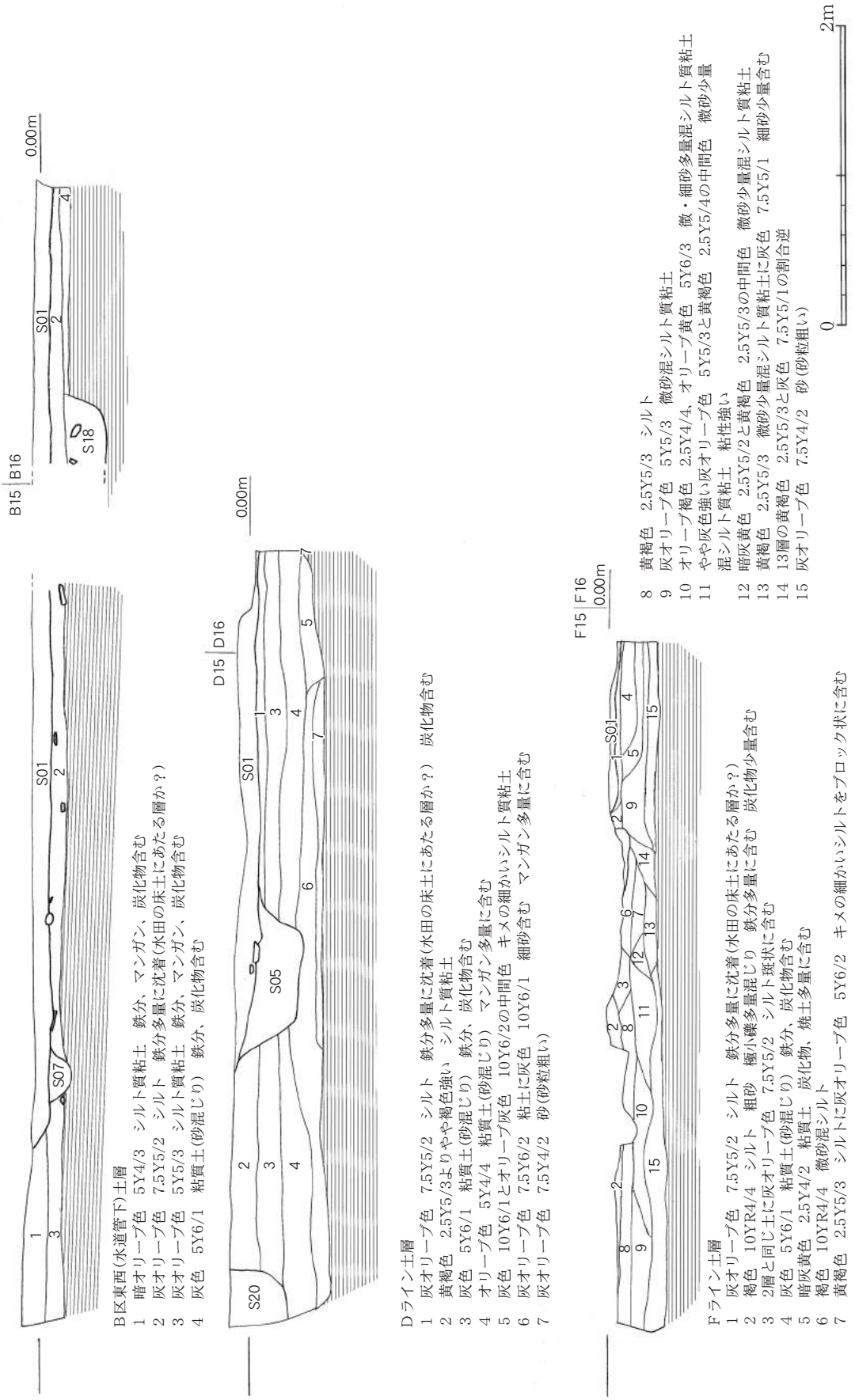




16　黄灰色　2.5Y6/1　シルト(砂混じり)　鉄分含む
17　黄灰色　2.5Y6/1　シルト(粗砂混じり)　鉄分含む
18　灰色　7.5Y6/1　シルト質粘土　鉄分含む
19　灰色　5Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分、炭化物含む
20　オリーブ色　5Y4/4　粘質土(砂混じり)　鉄分含む
21　灰オリーブ色　7.5Y4/2　砂(砂粒粗い)
22　暗灰黄色　2.5Y4/2　粘質土　炭化物、焼土多量に含む(炭化物の拡がり1/20平面図あり)
23　灰オリーブ色　5Y5/3　粘質土　鉄分、マンガン、炭化物含む　灰色　7.5Y6/1　粘質土をところどころブロック状に含む
24　灰オリーブ色　5Y5/2　粘性砂質土　鉄分含む
25　灰オリーブ色　5Y5/2　砂質土(砂粒粗い)　鉄分含む
26　オリーブ褐色　2.5Y4/3　粘性砂質土(砂粒粗い)　鉄分含む
27　褐色　10YR4/4　シルト(粗砂、極小礫多量混じり)
28　暗灰黄色　2.5Y5/2　シルト質粘土(粗砂、極小礫多量混じり)

0　1m

第 12 図　調査区東壁断面図（縮尺：１／40）

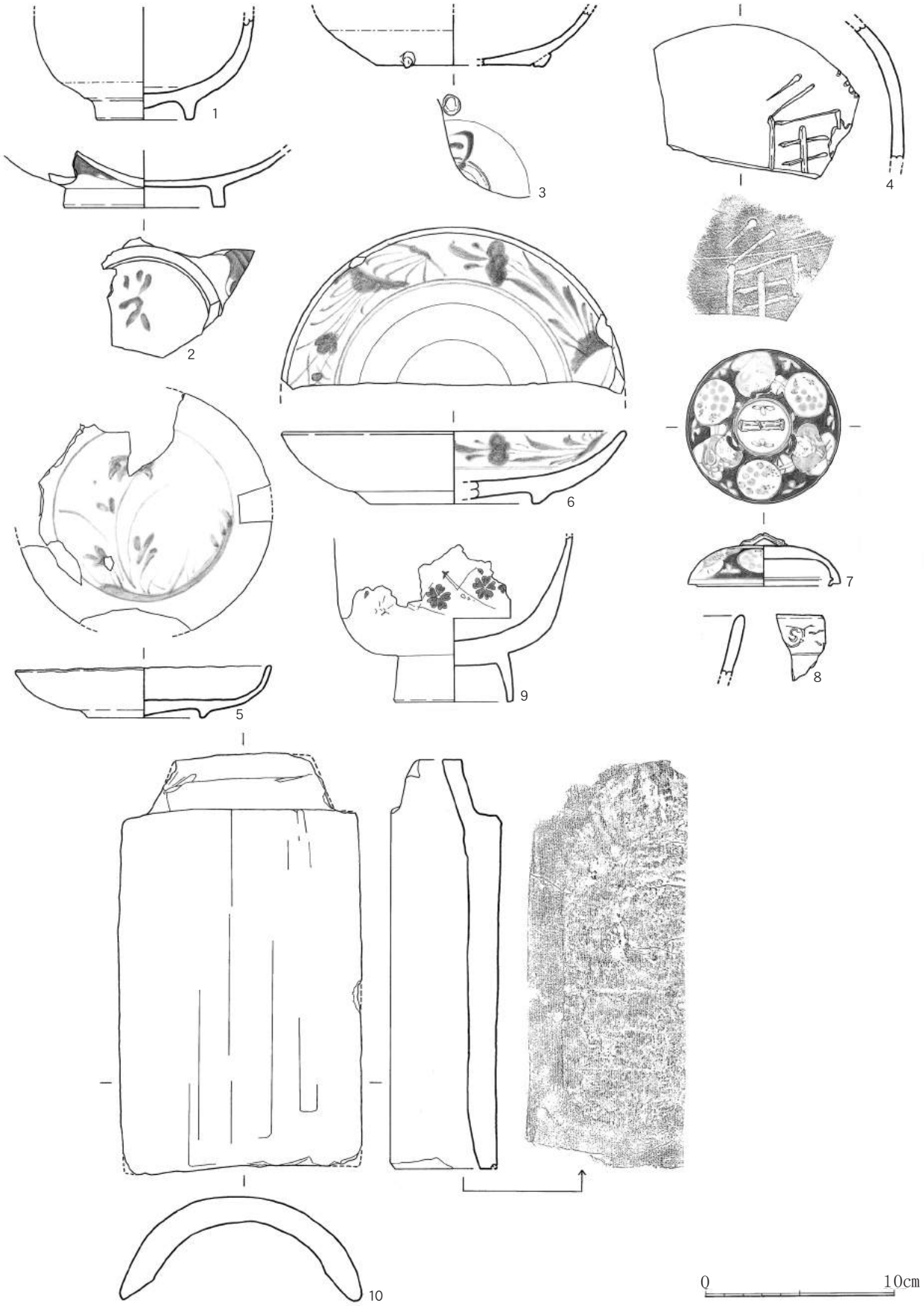


B区東西(水道管下)土層
1　暗オリーブ色　5Y4/3　シルト質粘土　鉄分、マンガン、炭化物含む
2　灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト　鉄分多量に沈着(水田の床土にあたる層か？)
3　灰オリーブ色　5Y5/3　シルト質粘土　鉄分、マンガン、炭化物含む
4　灰色　5Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分、炭化物含む

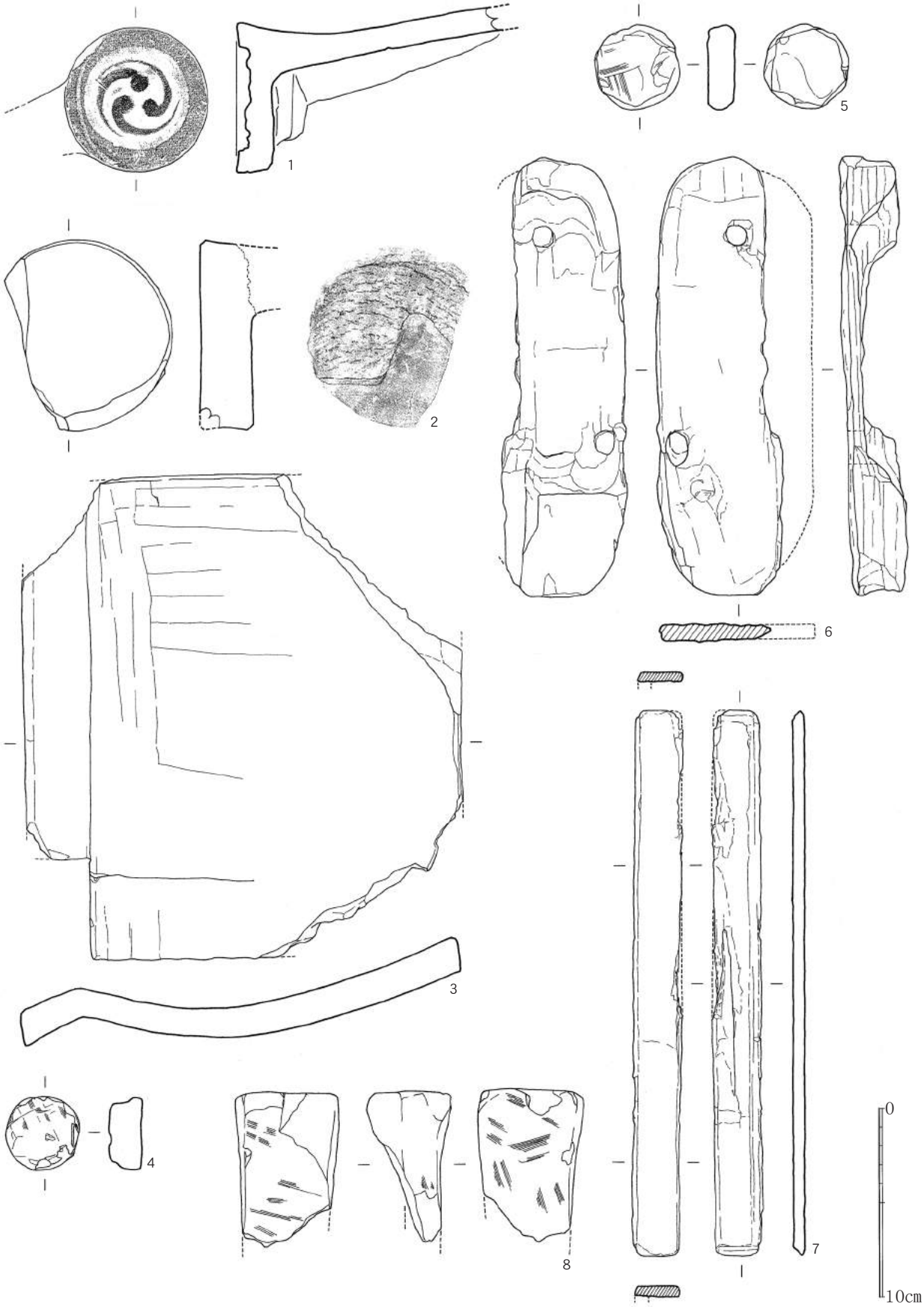
Dライン土層
1　灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト　鉄分多量に沈着(水田の床土にあたる層か？)　炭化物含む
2　黄褐色　2.5Y5/3よりやや褐色強い　シルト質粘土
3　灰色　5Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分、炭化物含む
4　オリーブ色　5Y4/4　粘質土(砂混じり)　マンガン多量に含む
5　灰色　10Y6/1とオリーブ灰色　10Y6/2の中間色　キメの細かいシルト質粘土
6　灰オリーブ色　7.5Y6/2　粘土に灰色　10Y6/1　細砂含む　マンガン多量に含む
7　灰オリーブ色　7.5Y4/2　砂(砂粒粗い)

Fライン土層
1　灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト　鉄分多量に沈着(水田の床土にあたる層か？)
2　褐色　10YR4/4　シルト　粗砂　極小礫多量混じり　鉄分多量に含む　炭化物少量含む
3　2層と同じ土に灰オリーブ色　7.5Y5/2　シルト斑状に含む
4　灰色　5Y6/1　粘質土(砂混じり)　鉄分、炭化物含む
5　暗灰黄色　2.5Y4/2　粘質土　炭化物、焼土多量に含む
6　褐色　10YR4/4　微砂混シルト
7　黄褐色　2.5Y5/3　シルトに灰オリーブ色　5Y6/2　キメの細かいシルトをブロック状に含む
8　黄褐色　2.5Y5/3　シルト
9　灰オリーブ色　5Y5/3　微砂混シルト質粘土
10　オリーブ褐色　2.5Y4/4、オリーブ黄色　5Y6/3　微・細砂多量混シルト質粘土
11　やや灰色強い灰オリーブ色　5Y5/3と黄褐色　2.5Y5/4の中間色　微砂少量混シルト質粘土　粘性強い
12　暗灰黄色　2.5Y5/2と黄褐色　2.5Y5/3の中間色　微砂少量混シルト質粘土
13　黄褐色　2.5Y5/3　微砂少量混シルト質粘土に灰色　7.5Y5/1　細砂少量含む
14　13層の黄褐色　2.5Y5/3と灰色　7.5Y5/1の割合逆
15　灰オリーブ色　7.5Y4/2　砂(砂粒粗い)

第 13 図　調査区東西断面図(縮尺：1／40)　上：Ｂ区東西(水道管下)断面図　中：Ｄライン断面図　下：Ｆライン断面図



第 14 図　包含層出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）



第 15 図　包含層出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）

〔磁器〕第 14 図 5 は、全形をうかがうことができる肥前系の皿で、口径 13.6 ㎝、器高 2.8 ㎝。見込みに草花文をあしらう。内面には網目状の筋が見られ、型打ちでつくられたことを物語っている。17 世紀中葉の初期伊万里である。

第 14 図 6 は、肥前系の皿であるが、発色などから見て波佐見系の可能性が高い。見込みは、蛇の目釉剥ぎとなっている。畳付は無釉。18 世紀後半のもの。**7** は、完形の色絵の蓋で、肥前系である。口縁部は無釉。最大径8.0㎝。18 世紀後半から 19 世紀のもの。**8** は、青磁碗の小破片である。外面口縁部に陰刻文が見られ、内外面に貫入が見られる。中国青磁の可能性もあるが、関西系の青磁の可能性が高い。

〔木製品〕第 14 図 9 は、漆器椀である。本遺跡から数点の漆器椀が出土しているが、残存状況が悪く、本例は実測可能な唯一のものであった。内面は朱漆、外面は黒漆で、外面に朱彩の松葉と桜が描かれている。**第 15 図 6** は、一木の刳り下駄である。**7** は、折敷の側板。黒漆が塗られるが、別の板が組み合わさる部分である図の上下と右側の幅６㎜には漆が見られない。

〔瓦〕第 14 図 10 は、丸瓦。内面には布目が残り、外面には長方向に板ナデの痕跡が見られる。

第 15 図 1 は、巴文の軒桟瓦。**2** は、無文の軒桟瓦ないしは軒丸瓦。**3** は、桟瓦。

〔特殊品〕第 15 図 4・5 は、瓦を再利用した加工円盤。

〔石製品〕第 15 図 8 は、砥石。本来の厚さは 4.5 ㎝ほどあったのであろうが、よく使われていて、現存の最も薄い部分は１㎝ほどになっている。

第３節　江戸時代第３遺構面で検出された遺構と遺物

１．素掘り船入状遺構Ｓ 41

１）遺構（第 16 図、図版第４）

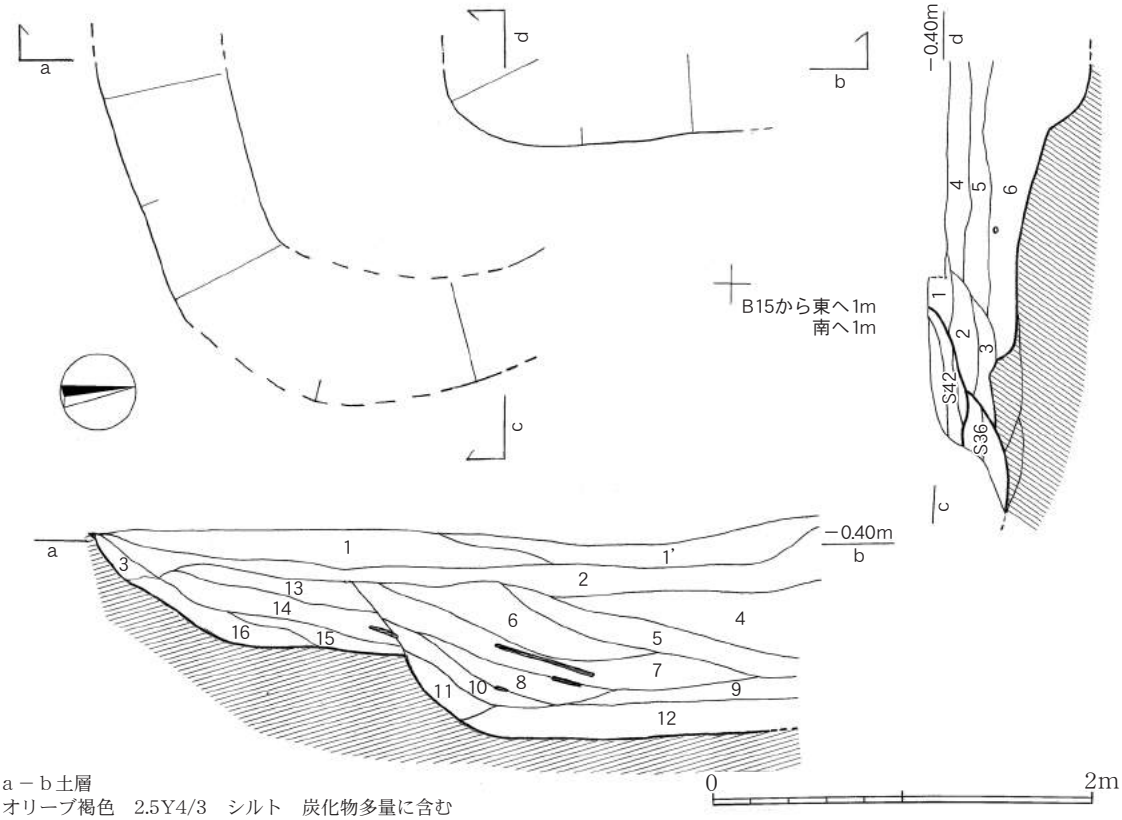
調査終了予定日が迫ってきたため、調査区西側壁面土層図を作成するのに該当部を断ち割りしたところ、その断面に北側へ向かって掘り込まれた遺構を確認した。その下層は有機質を含んだ黒褐色粘質土であり、石組み船入状遺構Ｓ 36 の下層に見られた粘質土と性格が似ていると判断し、石組み船入状遺構Ｓ 36 と同様に水が貯まっていたものと推定した。

この遺構を平面的に追究したところ、面的にも遺構であることを確認した。ただし、この遺構は平面的には東側部のごく一部を確認したのみで、遺構のほとんどは発掘調査区外であった。したがって、遺構の全体像は不明である。しかし、石組み船入状遺構Ｓ 36 との関係で言えば、層位的に確実にその下に位置していることを確認した。

以上のように、水が貯まっていたという状況、石組み船入状遺構Ｓ 36 とそれほど離れていない位置、石組み船入状遺構Ｓ 36 より層位的に下であることなどから、初期船置所に関連する遺構と判断した。

出土遺物は、深掘りした部分からほとんどのものが出土しているが、雨によって西壁が崩落し、ともかく遺物だけでも採集しておくために、崩落土内遺物もこの遺構のものとして取り上げている。特に、下層のものと判断されたものは「最下層」として採集している。このような状況なので、遺物の取り上げの際に上層の遺物も混入している可能性が非常に高い。

このうち、19 世紀の遺物は取り上げ方に不都合があったと思われる。上層（第 16 図、ａ－ｂ断面の１・1’・２・３）出土遺物は 17 世紀後半から 18 世紀初のものがある。下層は、土師皿を除くと、17 世紀中葉のものである。土師皿を 17 世紀後半代の早い時期にみれば、それほど陶磁器とズレはなくな



S41ａ－ｂ土層
1　オリーブ褐色　2.5Y4/3　シルト　炭化物多量に含む
1’１層と同じ　炭化物ほとんど含まない
2　灰オリーブ色　7.5Y5/2よりやや暗い　微砂少量混シルト質粘土　礫少量含む　炭化物多量に含む　鉄分含む
3　灰オリーブ色　5Y5/2よりややオリーブ色強い　微砂少量混シルト質粘土　鉄分含む
4　暗オリーブ灰色　2.5GY4/1　微砂多量混粘土　鉄分含む：整地層
5　オリーブ黒色　7.5Y3/1　微砂多量混粘土(粘性強い)　炭化物、有機物、遺物多量に含む：有機物層
6　灰色　7.5Y5/1、灰色7.5Y4/1　微砂混粘土　炭化物、鉄分含む：整地層
7　灰色　5Y4/1、オリーブ黒色　5Y3/1　微砂混粘土(粘性強い)　灰色　10Y5/1　きめの細かいシルト質粘土少量斑状に含む
炭化物、有機物、遺物多い　礫含む：有機物層
8　オリーブ黒色　7.5Y3/1　微砂多量混粘土(粘性強い)　炭化物、有機物、遺物多量に含む　礫含む：有機物層
9　灰色　5Y4/1　粘土(粘性強い)　有機物少量含む：有機物層
10　灰色　5Y4/1　微砂多量混粘土(粘性強い)に灰色　10Y5/1　微砂混粘土少量含む　炭化物、有機物、遺物多量に含む　礫含む：有機物層
11　10層の灰色　5Y4/1　微砂多量混粘土(粘性強い)と灰色　10Y5/1　微砂混粘土の土の割合逆　炭化物、有機物、遺物含む：有機物層
12　灰色　7.5Y4/1、灰オリーブ色　5Y4/2　微砂少量混粘土(粘性強い)　木片含む：有機物層
13　灰色　10Y4/1、灰色　10Y5/1の中間色　微砂混シルト質粘土　炭化物含む：整地層
14　灰色　7.5Y4/1　微砂混粘土　炭化物、有機物含む：有機物層
15　灰色　7.5Y5/1　微砂ごく少量混粘土に14層の土　少量含む
16　灰色　10Y5/1　微砂ごく少量混シルト質粘土

S41ｃ－ｄ土層
1　灰色　7.5Y5/1　シルト質粘土　鉄分沈着：整地層
2　灰色　10Y5/1　粘土に灰オリーブ色　7.5Y5/2　微砂含む：有機物層
3　灰色　10Y4/1　微砂多量混粘土：有機物層
4　オリーブ褐色　2.5Y4/3　シルト　鉄分多量に含む　炭化物含む：有機物層
5　灰色　7.5Y5/1　微砂混シルト質粘土　炭化物含む：有機物層
6　灰色　7.5Y4/1　微砂混粘土　炭化物含む：有機物層

第 16 図　素掘り船入状遺構Ｓ 41 実測図（縮尺：１／40）

る。また、土師皿も１点ではあるが、17 世紀前半に遡るものがある。したがって、下層は 17 世紀中頃のものがほとんどで、この遺構こそが江戸初期の船置所関連の船入状遺構ではないかと考えられた。しかし、上層の遺物は 17 世紀後半から 18 世紀初であり、また石組み船入状遺構とのレベルから考えると、上層は本遺構とは全く別個で、包含層ないしは別の遺構であったと思われる。

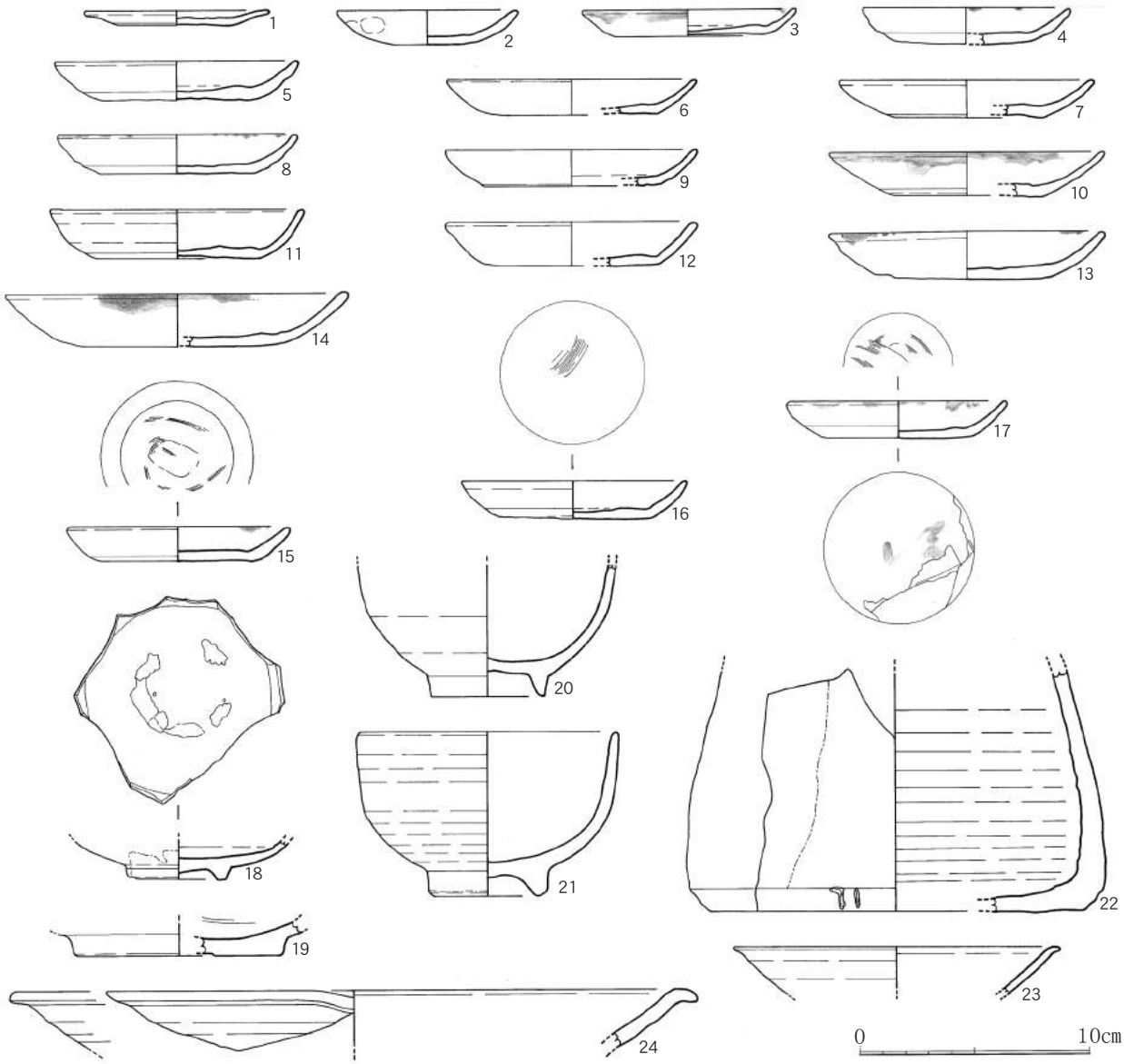
したがって、下層出土のものを基本にその他の遺物を参照すれば、本遺構は 17 世紀前半～中葉の時期に推定が可能と思われる。

２）**出土遺物**（第17・18図、図版第23・24）

〔土師器〕第17図１～17は、土師皿。第２表に、それぞれの口径と器高などをまとめておいたので、参照していただきたい。１は、上層出土で、器高が低く、18世紀前半に入る。他の土師皿はすべて17世紀代なので、これはＳ41本体とは切り離して見た方が良かろう。２は、崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。手捏ねである。17世紀前半のもの。それ以外は、底部糸切りで板目状圧痕が有るものと無いものとがあり、17世紀中頃から後半代。17の底部には、墨書が見られるが、解読不能である。

３・５・７は、下層出土。４・６・８・12・13・15・17は、崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。９・11・16は、上層出土。10・14は、層位不明。

〔陶器〕第17図18は、唐津の皿。崩落土内の上層に相当する部分から採集。見込みと畳付に砂目跡がある。17世紀前半。19は、肥前系の火入か香炉の底部。崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。17世紀後半以降のもの。20は、肥前系の碗。下層出土。畳付のみ無釉。17世紀中葉のもの。



第17図　素掘り船入状遺構Ｓ41出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）

第２表　素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土土師皿法量表

第 17 図	口径(㎜)	器高(㎜)	備　　考
1	80	6	底部：回転糸切り
2	79	15	手捏ね
3	92	16	底部：回転糸切り後板目状圧痕　　口縁端部に煤有り
4	90	16	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
5	104	17	底部：回転糸切り
6	109	16	底部：回転糸切り後板目状圧痕
7	110	16	底部：回転糸切り後不明
8	104	17	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
9	110	15	底部：回転糸切り後不明
10	118	20	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
11	108	21	底部：回転糸切り後板目状圧痕
12	110	19	底部：回転糸切り後板目状圧痕
13	119	21	底部：回転糸切り後板目状圧痕　　口縁端部に煤有り
14	148	22	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
15	97	15	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り
16	98	17	底部：回転糸切り後板目状圧痕
17	95	16	底部：回転糸切り　　口縁端部に煤有り　　墨書有り（文字不明）

第 17 図 21 は、肥前系の呉器手碗。崩落土内の最下層に相当する部分から採集。畳付のみ無釉。17 世紀後半。**22** は、備前の水指。底部近くに窯印がある。17 世紀前半のもの。**23** は、唐津の皿。下層出土。砂目皿か。17 世紀中葉のもの。**24** は、唐津の鉢。下層出土。23 と同じく 17 世紀中葉のもの。

〔磁器〕第 18 図 1 は、初期伊万里の皿。崩落土内の最下層から採集。口径 13.6 ㎝、器高 3.6 ㎝で、高台内施釉。畳付は無釉。見込みに椿文を描き、周囲に花文を配する。17 世紀中葉のもの。 **2** は、肥前系あるいは関西系の碗。崩落土内の最下層に相当する部分から採集。幅広の高台で、畳付は釉剥ぎ。19 世紀代のもので、採集時に混入したものと思われる。 **3** は、肥前系の染付碗。上層出土。17 世紀末のもの。**4** は、肥前系の白磁で、蓋物か壺の蓋であろう。崩落土内の最下層に相当する部分から採集。17 世紀末。**5** は、鎬を入れた初期伊万里の小杯。17 世紀中葉のもの。

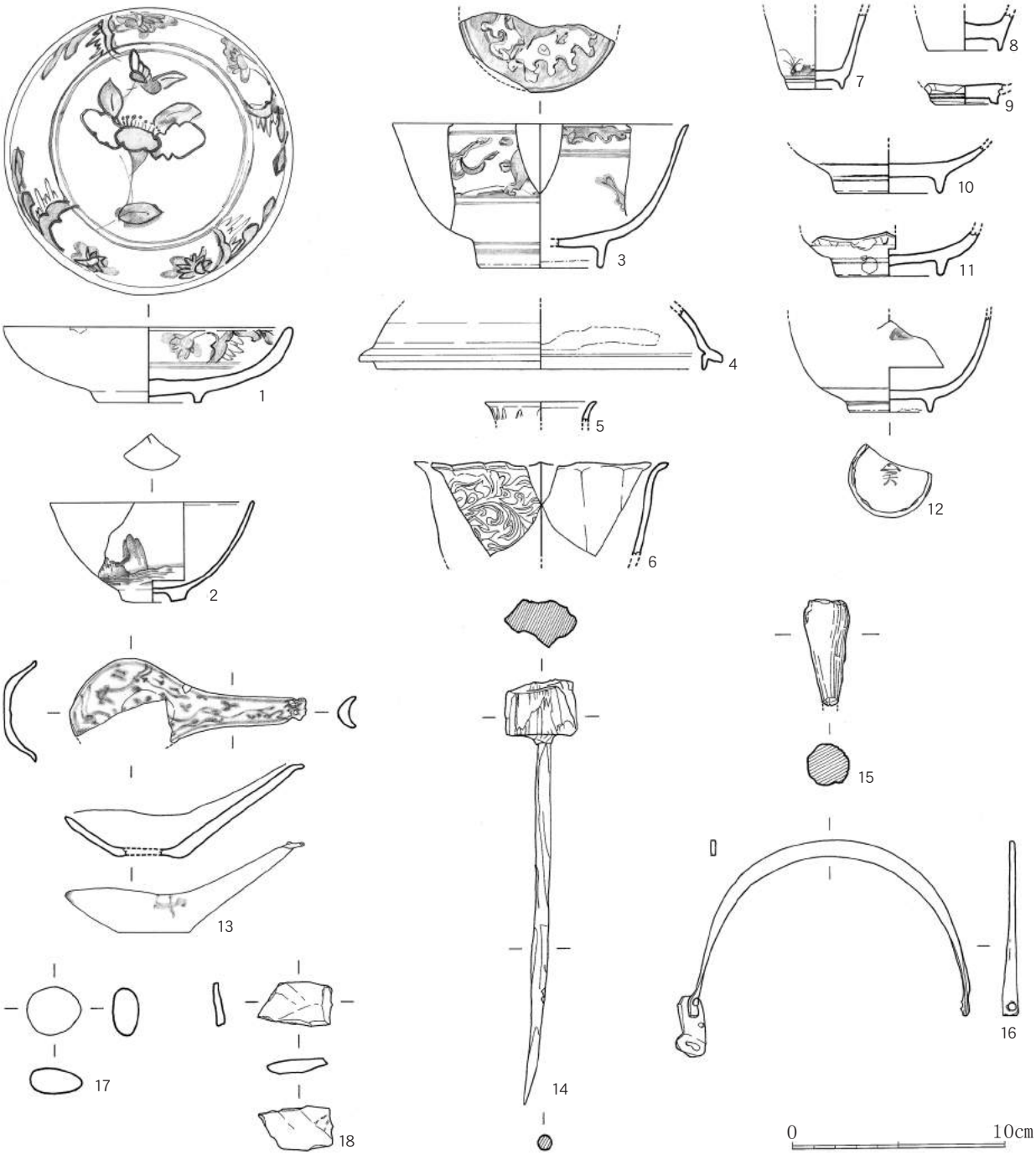
第 18 図 6 は、肥前系の白磁向付。型打ちで、唐草文を浮き上がらせる。19 世紀代で、混入品と考えたい。 **7** は、肥前系の小杯ないしは猪口。上層出土。外面に草花文。17 世紀末から 18 世紀初か。 **8** は、肥前系の白磁猪口ないしは小杯。上層出土。17 世紀後半のものか。 **9** は、関西系と思われる染付小杯ないしは猪口。高台が幅広で畳付から高台内は無釉。19 世紀代。これはＳ 41 上面からの出土であるので、前述したように上層出土の 19 世紀代の時期のものは、もともとはＳ 41 の上に載る包含層からの出土品と考えられる。**10** は、肥前系の染付碗。上層出土。17 世紀末から 18 世紀初のもの。

第 18 図 11 は、肥前系の染付碗。外面に網目文を施す。畳付に砂が付着する。17 世紀後半のもの。**12** は、肥前系の染付碗。崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。高台内には「八」記号の下に変形文字の銘款がある。畳付に砂が付着する。17 世紀末。**13** は、肥前系の染付蓮華。崩落土内の最下層に相当する部分からの採集。内面に花唐草文。19 世紀代のものと思われ、混入品であろう。

〔木製品〕第 18 図 14 は、釘様の形態をしているが、用途不明。崩落土内から採集。**15** は、栓。下層出土。

〔金属製品〕第 18 図 16 は、弦。

〔石製品〕第 18 図 17 は、黒石であるが、形がやや不整形なので、自然石あるいはおはじきか。下層出土。**18** は、石英製の火打石。下層出土。



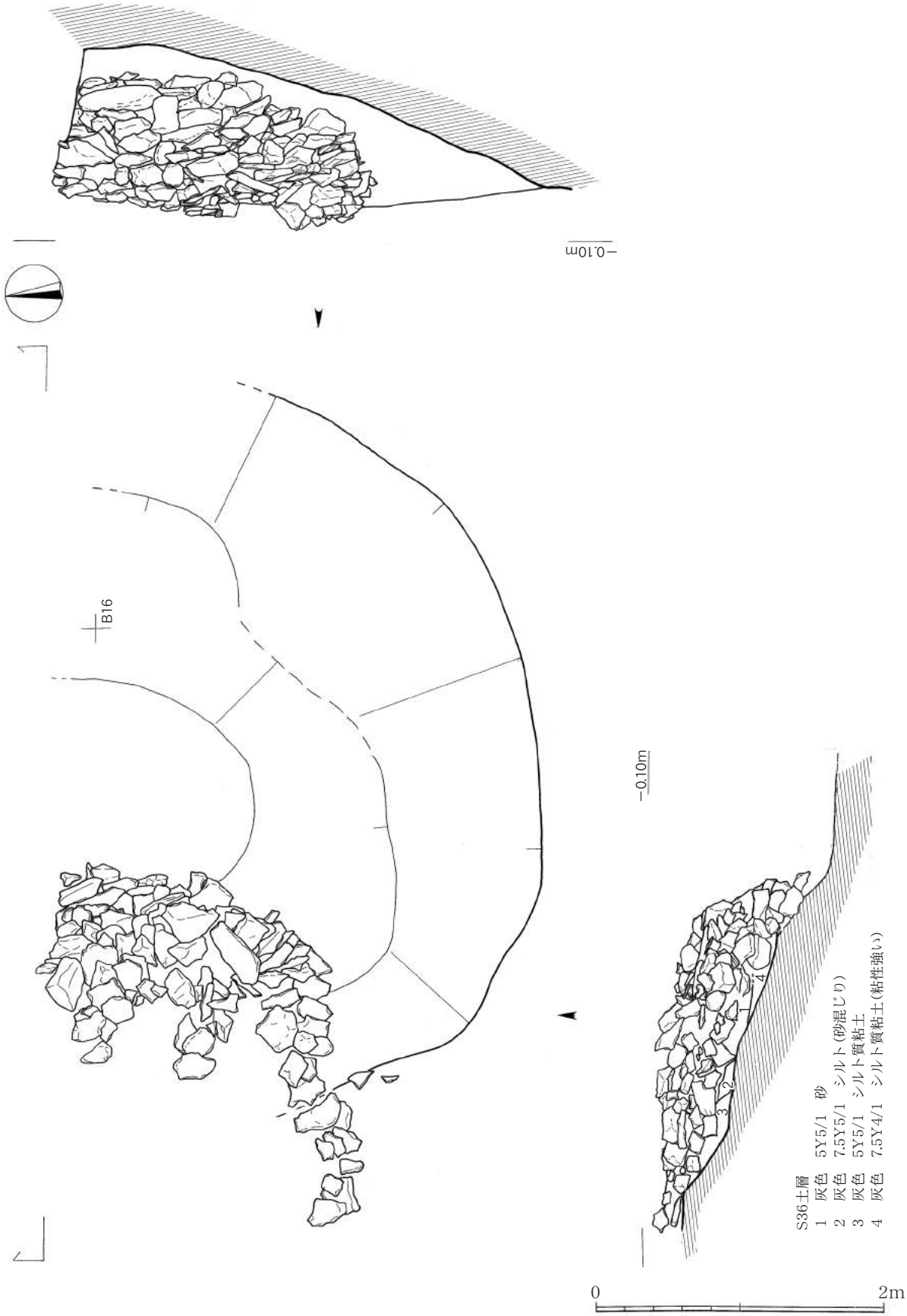
第 18 図　素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）

第４節　江戸時代第２遺構面で検出された遺構と遺物

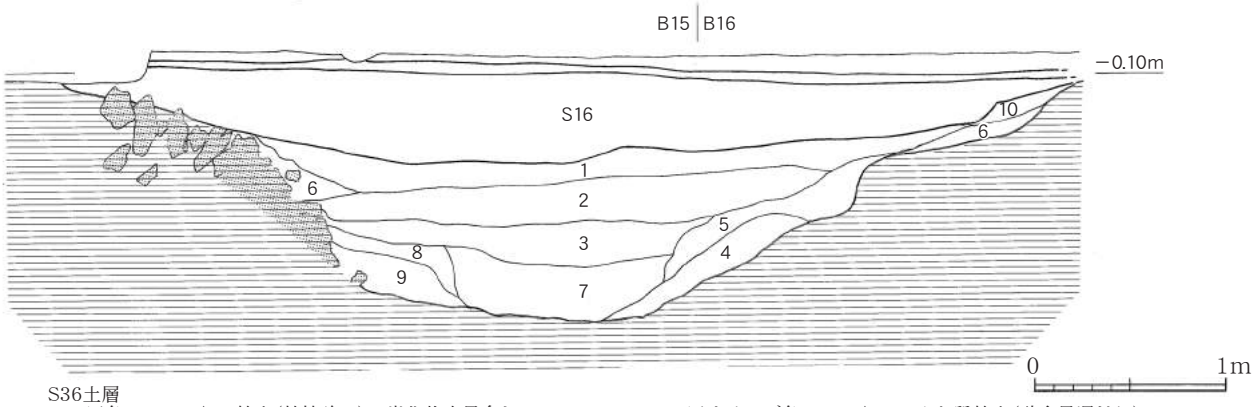
１．石組み船入状遺構Ｓ 36

１）遺構（第 19・20 図、図版第５・６・７－１）

水道管埋設時の掘り方内（撹乱部）に石が頭を見せていたが、当初は何であるのか全く推測できなかった。土坑Ｓ 16 を掘りあげた時点で、この石がある程度集中することを確認し、何らかの重要な遺構になるだろうと思われた。



第 19 図　石組み船入状遺構Ｓ 36 実測図（縮尺：１／40）



S36土層
1　灰色　7.5Y5/1　粘土(粘性強い)　炭化物少量含む
2　灰色　5Y5/1　粘土(粘性強い)
3　オリーブ黒色　5Y3/2　粘質土(砂混じり)　炭化物少量含む
4　オリーブ黒色　7.5Y3/1　砂(粘土混じり)
5　灰色　10Y4/1　砂(粘土混じり)　4層より粘土の割合増える
6　灰オリーブ色　5Y4/2　シルト質粘土(砂多量混じり)
7　オリーブ黒色　5Y3/1　粘土(砂混じり)
8　オリーブ黒色　7.5Y3/1　粘土(砂多量混じり)
9　黒色　7.5Y2/1　粘土(細砂混じり)
10　灰色　7.5Y5/1　シルト(砂混じり)　鉄分含む

第20図　石組み船入状遺構Ｓ36断面図（縮尺：１／40）

調査終了予定日が近くなり、残された時間が少なくなってきたので、上から石を追いかけて遺構を検出していくことにし、最終的に石組み遺構になることを確認した。この石組み遺構の東側には埋土が黒褐色粘質土の掘り込み部が位置する。これらを合わせてＳ36とし、このＳ36は西側に石組みを有する船入状遺構ではないかと推測できるようになった。

石組は西側から少しずつ深くなり、南東部で丸く弧を描いて北側へ延びていくが、汚水管以北は確認できなかった。調査終了後、北側地区を再度重機で掘削する際に立会い調査を行った。しかし、撹乱が甚だしく、汚水管以北に関しては、現状では石組み遺構の続きを確認することはできなかった。

石組み遺構の石材は緑泥片岩がほとんどであるが、砂岩質の川原石も若干使用されていた。石組み遺構は、東側からの見通しでは約1.1ｍの高さであった。石積みは、決して丁寧に積み上げられたと言うべきものではないが、おそらく多少の圧力で変形している可能性もある。第20図の断面をみると、若干雁木状に見えないこともない。石組み遺構を有する船入の東西幅は、東側はその端を確認できていないが、５ｍ以上はあったものと考えられる。

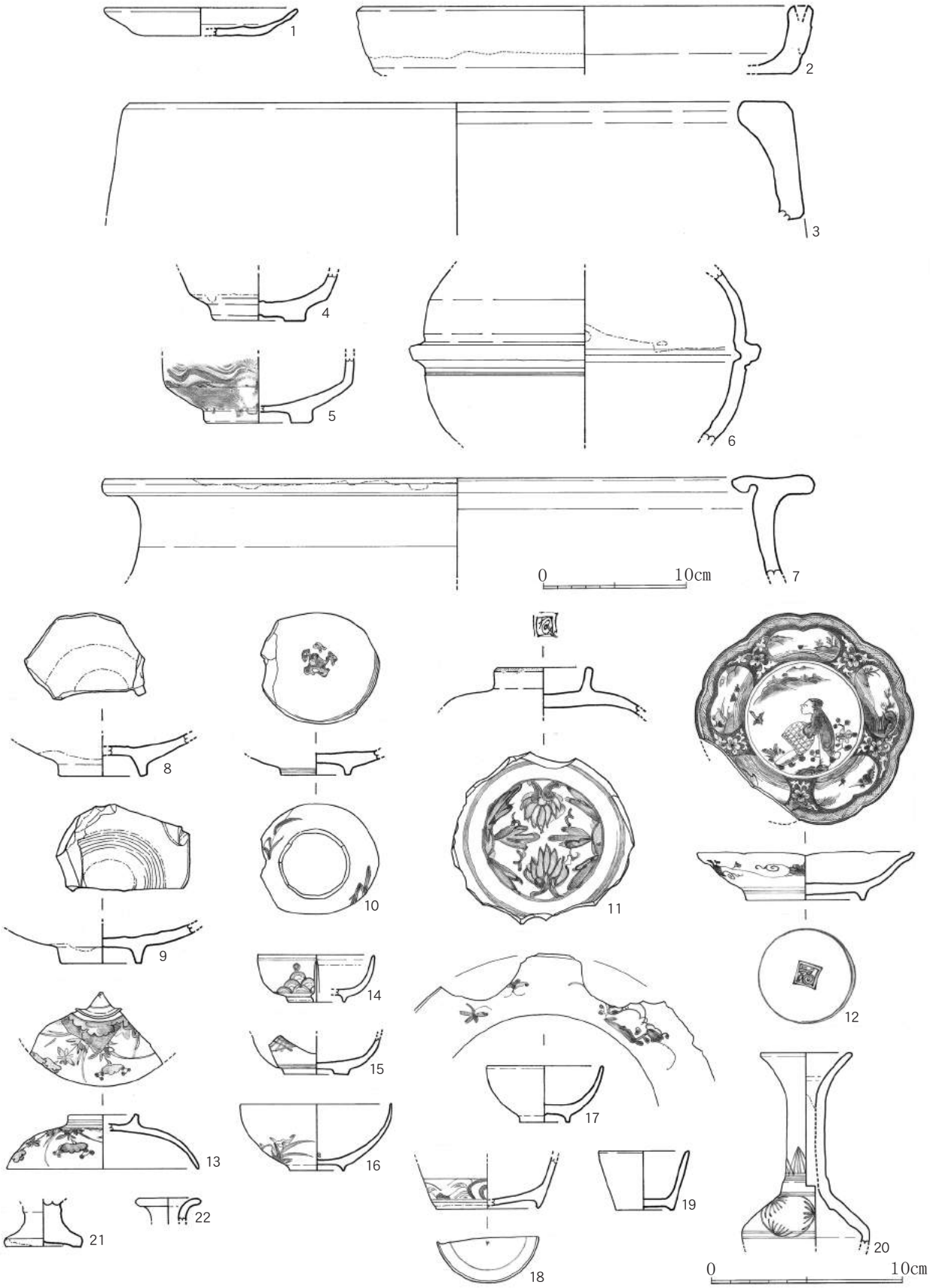
さらに、船入状遺構と見る根拠は、Ｓ36の石組み東側で垂直に突き刺さった竹杭を検出したことである（図版第７－１）。調査進行上、図面を作成する余裕がなく、写真のみの記録となってしまったが、この竹杭は船を係留するためのものと考えられる。

この石組み船入状遺構を、当初は、安宅島に置かれた徳島藩の初期船置所関連の遺構と考えていたが、出土遺物が17世紀後半代以降のものに限られるため、その可能性はないものと判断された。

２）出土遺物（第21～23図、図版第25）

〔土師器〕第21図１は、土師皿で、底部は回転糸切り後、板目状圧痕が見られる。**２**は、関西系炮烙で、口縁端部に穿孔がある。**３**は、復元口径35㎝の焜炉になると思われる口縁部破片。日下分類（日下正剛「徳島城下町出土の土製火鉢・焜炉類」『論集徳島の考古学』、2002年）のⅡＣ類である。口縁端部は両側が面取りされている。外面から平坦面および内面の面取り部に丁寧なミガキが施される。内面はヨコナデ。外面には赤彩が施され、内面と平坦面に若干の煤が見られる。

〔陶器〕第21図４は、肥前系の陶胎染付の火入。内面・底部・蛇の目高台は無釉で、茶褐色を呈する。18世紀後半～19世紀である。これは、石組み西側に設定した南北トレンチ内から出土。**５**は、肥前系の火入。内面無釉で、外面には刷毛目装飾が見られる。17世紀後半から18世紀前半にかけてのもの。



第21図　石組み船入状遺構Ｓ36出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）　７は縮尺：１／４

第21図6は、産地不明の土瓶と思われる。外面上半には鉄釉をかけ、内面下半には鉄釉を塗っている。外面下半には煤が付着している。19世紀代。壁の崩落土から採集したものなので、確実にＳ36に伴うものとは見られない。**7**は、肥前系の大甕口縁部。

〔磁器〕第21図8は、肥前系の青磁皿。底部・高台は無釉である。発色は非常に淡い緑色で、白磁に近い色合いである。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。17世紀後半から18世紀前半かけてのもの。**9**も肥前系の青磁皿。やや淡い緑色の発色。高台は無釉で、畳付に砂が付着する。見込みは蛇の目釉剥ぎである。17世紀後半以降のものである。これは、前述の第21図４と同じく南北トレンチより出土している。**10**は、肥前系の筒形碗の底部片。見込みに五弁花文のコンニャク印判が押される。18世紀後半のもの。

第21図11は、肥前系の青磁染付の碗蓋。畳付は無釉で、砂が付着する。見込みには花文、高台内には二重方形枠内に「渦福」の銘が描かれる。18世紀中葉のもの。**12**は、肥前系の染付輪花皿。見込みに人物図、周囲に山水図五景を描き、口縁端部は鉄錆を塗った口紅装飾。外面には唐草文を巡らし、高台内には圏線と二重方形枠内に「渦福」の銘を描く。畳付は無釉。17世紀末から18世紀初にかけてのもの。**13**は、肥前系の丸碗の蓋。外面に草花文を描く。18世紀中葉から後半のもの。**14**は、肥前系の小型蓋物の身と思われる。内面口縁部には釉がかかっていない。外面には青海波文が部分的に描かれる。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**15**は、肥前系の碗か蓋物底部。外面に斜格子文を描き、幅広の高台。18世紀後半のもの。

第21図16は、肥前系の半球碗形の小杯。外面に草花文を描く。18世紀中葉のもの。**17**は、肥前系の小杯。外面に草花文を配する。18世紀中葉から後半にかけてのもの。**18**は、肥前系の猪口。外面底部に区画された青海波と渦巻きの文様が見られる。高台内には圏線と五弁花が描かれていたようである。18世紀代。**19**は、肥前系の白磁小杯。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**20**は、肥前系の仏花瓶。頸部下方でやや段となる。頸部下方に竹文、肩部に松葉文を描き込んだ丸文を三方に配す。内面にはシボリ痕が明瞭に見られる。18世紀後半のもの。

第21図21は、肥前系の仏飯器。17世紀末から18世紀にかけてのもの。**22**は、肥前系の瓶類の口縁部。

〔木製品〕第22図7は長方形の加工品で、一角が斜めに切られている。用途不明。

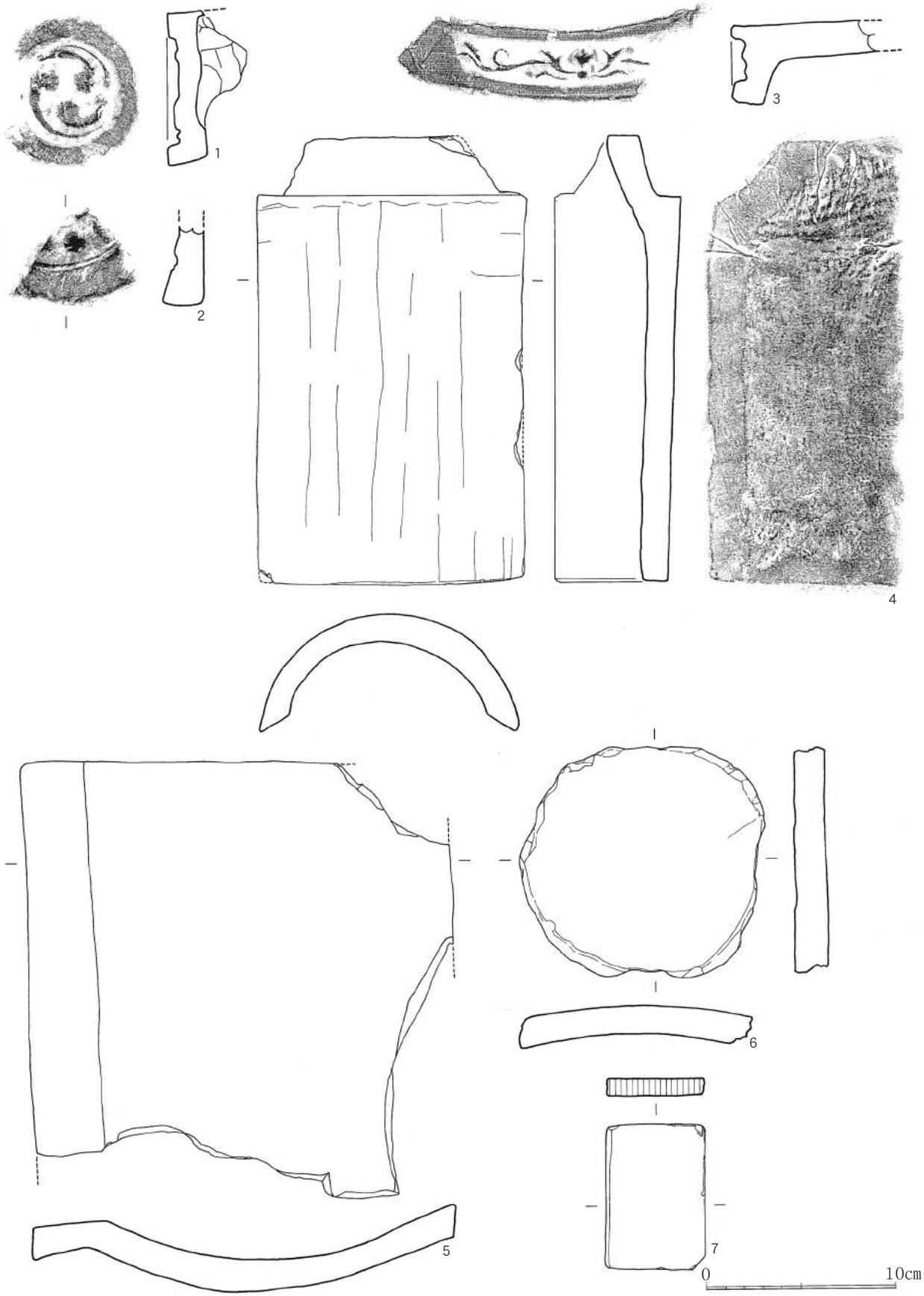
〔瓦〕第22図1は、軒桟瓦の軒丸部で、巴文。**2**は、巴文軒丸瓦。焼成は甘く、淡褐色を呈する。**3**は、軒桟瓦の軒平部。**4**は、丸瓦で、内面に布目。**5**は、桟瓦。

〔特殊品〕第22図6は、桟瓦ないしは平瓦を打ち欠いて作る加工円盤の未成品。この大きさ程度で完成すると、かなり大型の円盤になるが、その際には、円盤自体が多少湾曲していることになる。あるいは、さらに打ち欠いていき、小型の円盤にする途中なのであろうか。

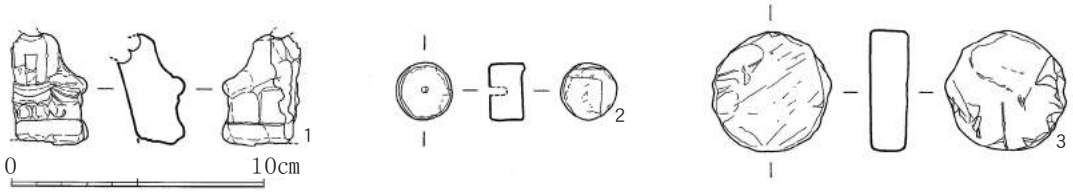
第23図1は、学問の神様菅原道真をモチーフにした天神の土人形。底部から胸部にかけて、かなり大きな空洞部を設けている。**2**は、真鍮製の棒状のものを切断している。切断面には、完全に切断する手前で止めて、折って分割したことを示す痕跡が残る。切断面と反対の面は、本来の形状で、周囲の１㎜は一段低くなり、中心には、直径３㎜の孔が深さ７㎜ほどあけられている。**3**は、瓦を再利用した加工円盤。

２．土坑Ｓ37（第24図、図版第７－２・３）

第１遺構面で検出された溝Ｓ19によって、本遺構の南側部分は切られている。現状で東西1.2ｍほど、深さ８㎝ほどの浅い土坑である。遺物は出土していない。



第 22 図　石組み船入状遺構Ｓ 36 出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）



第23図　石組み船入状遺構Ｓ 36 出土遺物実測図(3)（縮尺：１／３）

３．土坑Ｓ 38（第24図、図版第７－４・５）

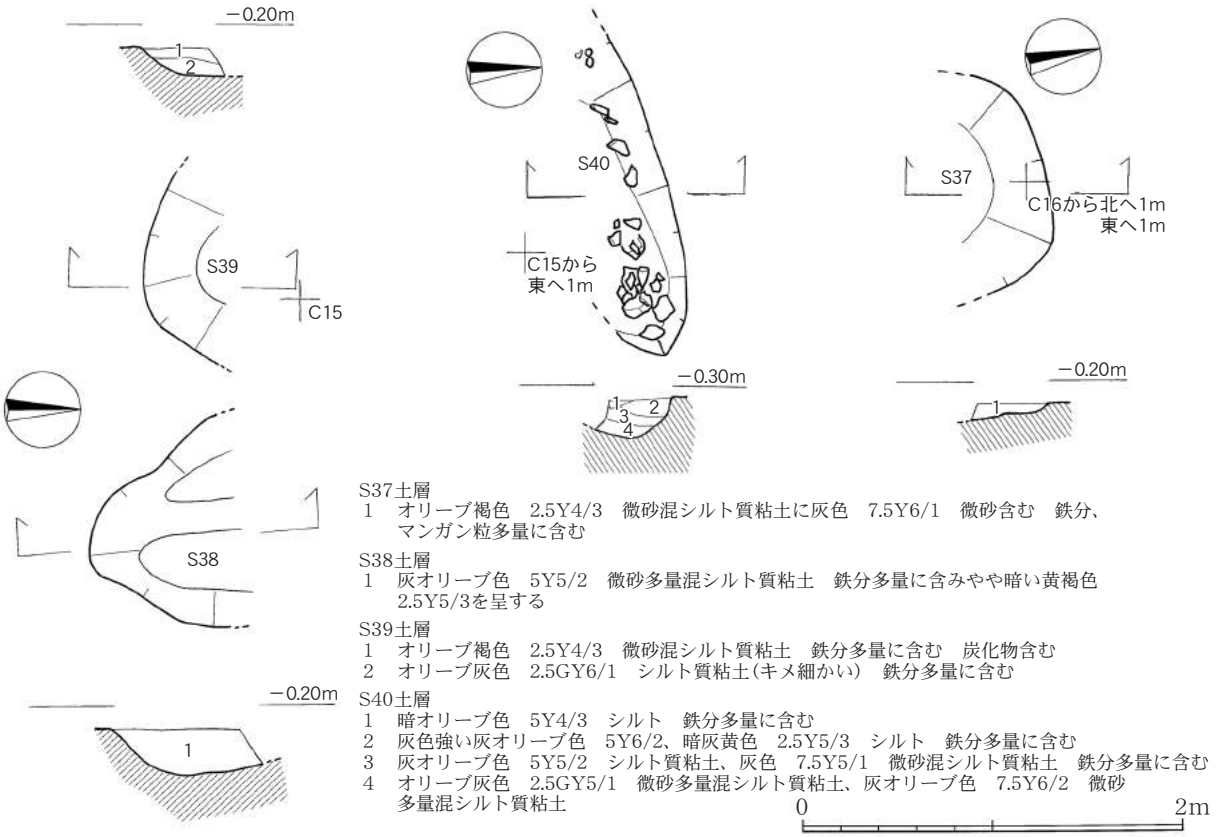
第１遺構面で検出された溝Ｓ 19によって、本遺構の北側部分が切られている。現状で東西1.1ｍほどである。底面に凹みが西側と東側の２ヵ所あり、ほぼ10㎝の段差がある。深いところで20㎝ほどである。遺物は出土していない。

４．土坑Ｓ 39（第24図、図版第７－６・７）

第１遺構面で検出された溝Ｓ 19によって、北側部分を切られている。深さは12㎝ほどである。遺物は出土していない。

５．土坑Ｓ 40（第24図、図版第７－８）

第１遺構面で検出された溝Ｓ 19によって、南側部分を大きく削られている土坑である。深さ20㎝前後である。



第24図　土坑Ｓ 37・Ｓ 38・Ｓ 39・Ｓ 40 実測図（縮尺：１／40）

第５節　江戸時代第１遺構面で検出された遺構と遺物

１．土坑Ｓ 16

１）**遺構**（第25図、図版第８～10）

この遺構の調査を始めたときは、人工掘削の大きな落ち込みないしは池ではないかと思われたが、石組み船入状遺構Ｓ 36 を確認した段階で、Ｓ 36 が廃絶埋没した後に、その窪みを廃棄坑として利用していたことが判明した。したがって、遺構の位置としてはＳ 36 の石組みの上およびＳ 36 の船入部とほぼ同じところということになる。

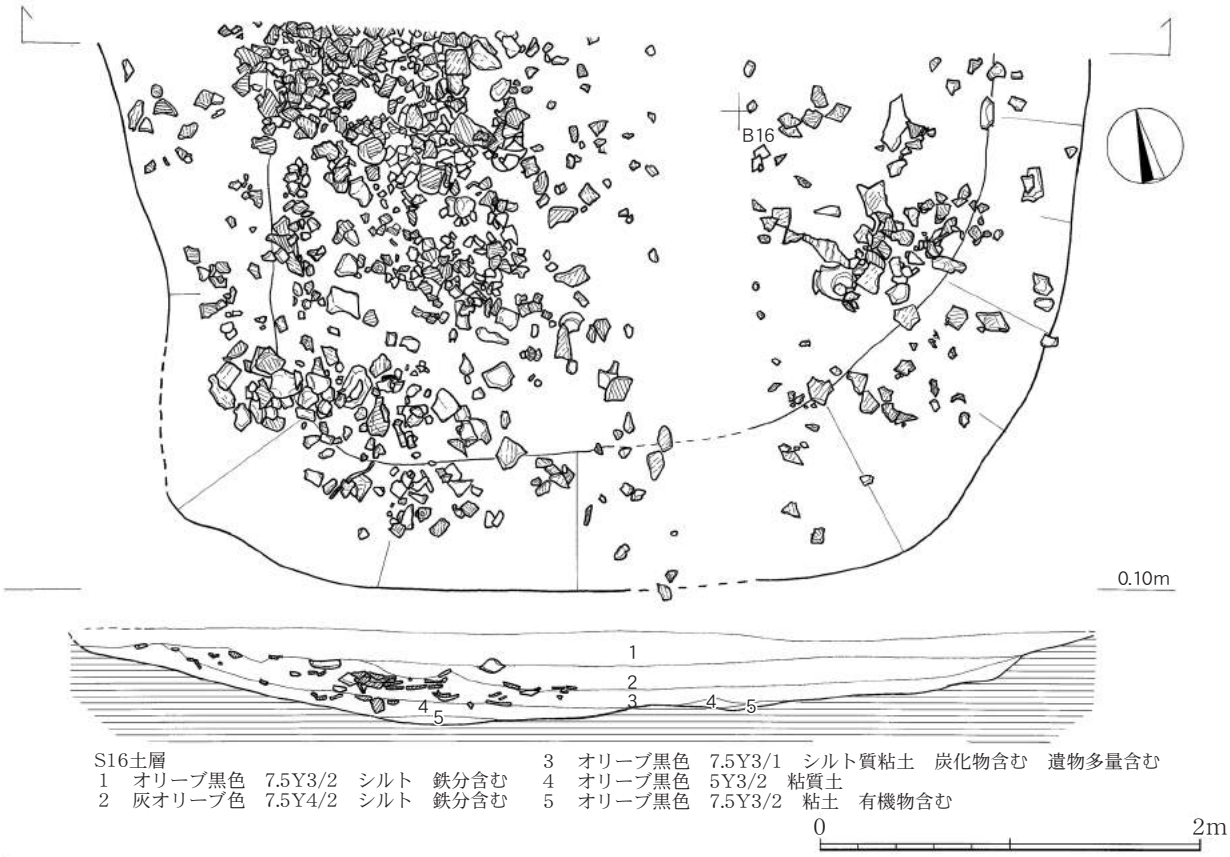
東西約 5.5 ｍの範囲に遺物がところどころに密集して存在していて、本発掘調査では遺物が最も多く出土した遺構である。

出土遺物の中には、瓦類・陶磁器類などの他に、土師質で「眉山下雲光」や「喜助」の刻印のある火鉢などの日常用品がいくつか見られ、出土品の多さとともに土師質日常用品の存在が注意される。

２）**出土遺物**（第 26 ～ 35 図、図版第 26 ～ 30）

〔土師器〕第 26 図 1 は、土師皿。底部は回転糸切り。口縁端部に煤が付着。18 世紀後半から 19 世紀。2 は、火消壺の蓋のつまみ。19 世紀。 3 は、焜炉の窓部分。外面はミガキで、稜は面取りされている。

第26図 4 は、外壁が立方体で、内部施設が環状となる焜炉。一辺21㎝の方形外壁の半分が残存し、かつ体部上方のみの残存である。内部施設最上部に角形の突起が２個確認されたが、３方向に付けられていたと復元できる。外壁外面はミガキが施される。外壁内面と内部施設外面は横方向のハケメ調整で、



第 25 図　土坑Ｓ 16 実測図（縮尺：１／40）

内部施設内面は未調整。外壁の角内面には粘土板を接合したときの縦方向のユビナデが認められる。外壁の上面と体部との境は面取りされる。内部施設外面には漆喰が薄く塗られている。外壁上面には煤が多く付着し、一部外壁体部の上方にも付着する。外壁上面には、摩滅して判読が難しいが、「喜助」と読める刻印がある（第27図１）。新蔵１丁目遺跡企業局総合管理センター地点では、「嘉助」の刻印のものが出土しているが、本例では七を三つ書いているので、喜と読まざるをえない。この「喜助」刻印は、徳島城下町遺跡では初めての出土例となる。

第26図５は、焜炉の底部で、日下分類のⅡＡ類に相当する。胎土は肌理の細かな精選されたもので、本遺跡出土の他の火鉢・焜炉類の胎土とは若干異なるという印象を受けた。底部の円盤は完全に残っている。底径16.5㎝で、底部から直立する体部は若干残るのみであるが、底部ぎりぎりの所に窓の下部がきている。窓外には窓にあわせて沈線が巡らされる。高台は２方向の切込みである。日下分類では、このⅡＡ類は３方向切込の高台とされているが、本品は２方向切込であるのが特徴である。外面には「眉山下雲光」の刻印があり（第27図２）、徳島城下町遺跡の発掘調査では初めての出土である。豊田進『阿波の陶磁』（雄山閣出版、1974年）には、眉山下雲光焼という簡略な記述があり、刻印の拓本が載せられている（第27図３）。本例の刻印はこれに非常に酷似するが、同一の印かどうかは判断できない。

第26図６は、焜炉。日下分類のⅡＣｂ類に入ると思われる。窓下端を含む一部の破片である。外面はミガキ、内面はナデである。窓下端と内面の一部に煤が付着している。７～９は、灰落しで、日下分類のオⅣＡ類である。**７**は、復元直径12.5㎝で、一面は灰白色に変色し所々剥離していて、胎土が赤変している。いっぽう、その裏面では変色は見られない。**８**は、復元直径12㎝で、７と同様な状況が見られる。**９**は、完形に復元できたもので、直径12㎝。両面とも淡灰白色に変色し、表面が一部剥離している。両面とも使用されていたものである。

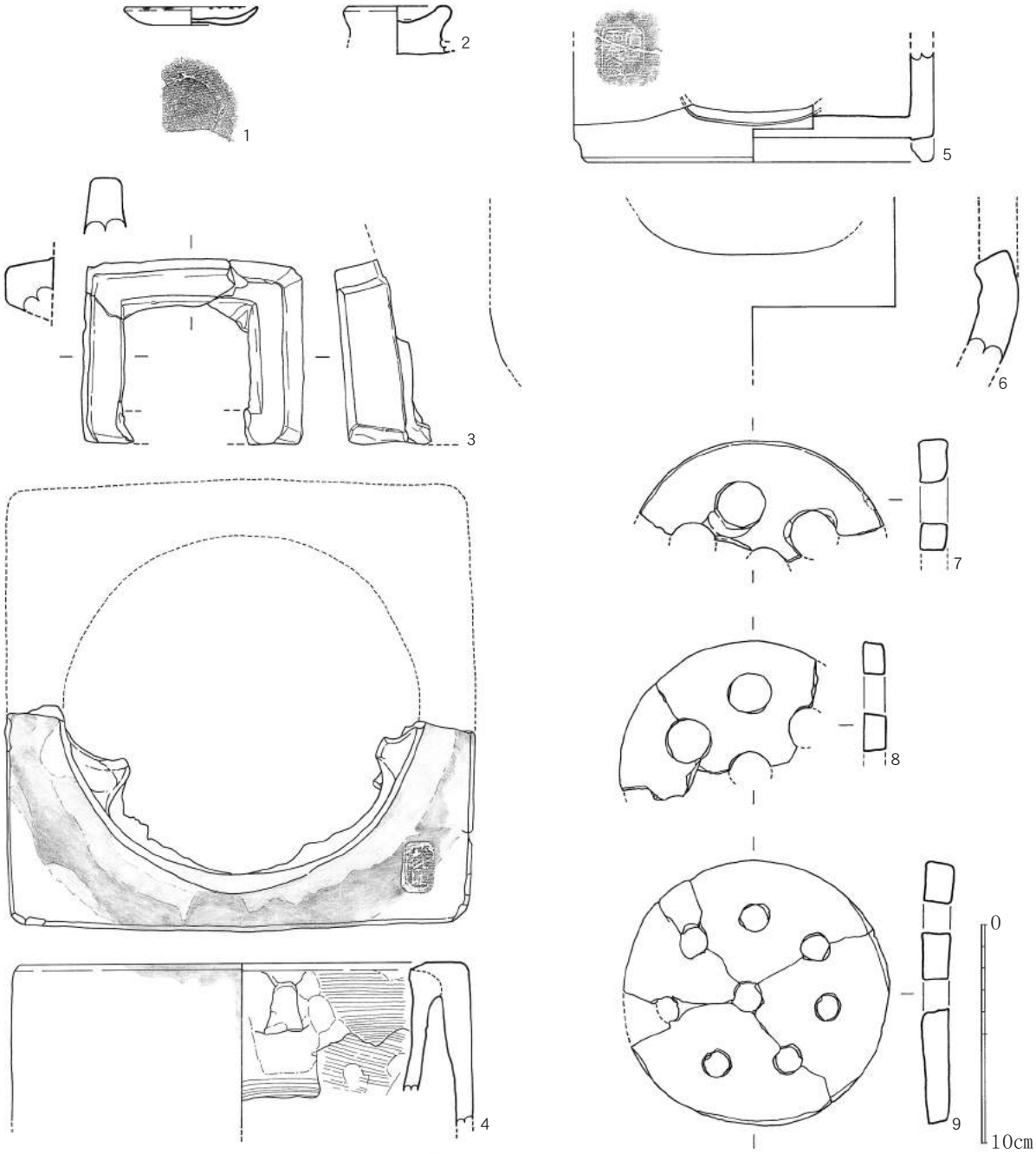
第28図１は、復元口径21㎝の焜炉の口縁部片。日下分類のⅡＣ類に入ると思われる。内面に突起があり、半円形になると思われる切込の窓部分が一部残存する。外面・口縁端面・窓部はミガキ。窓部の角は丁寧な面取りが行われる。内面の突起部上から口縁端面、窓部に煤が付着する。内面の突起より下および外面には煤は見られない。**２**は、火鉢。日下分類のＩＢ類に相当すると思われる。下部で器壁がかなり厚くなっているので、輪高台に続くものと思われる。頸部に鋭い沈線が巡る。外面から口縁部内面にかけて、非常に丁寧なミガキが施される。内面体部はこれも丁寧なヨコナデが施される。内外面の一部に煤が見られる。**３**は、火消壺。日下分類のⅣＢ類に相当する。内外面ともに剥離が甚だしい。

第29図１は、火入か香炉の蓋。煉り込みの胎土。19世紀のもの。

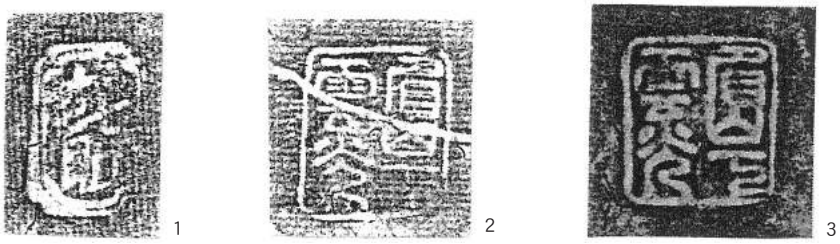
〔陶器〕第29図２は、備前の灯明皿。内面に塗土を施す。18世紀末から19世紀にかけてのもの。**３**は、京・信楽系の灯明皿。内面に菊花貼付文がある。口縁部外面に煤が付着。底部には、図示していないが、墨書の痕跡が見られる。19世紀代のものである。**４**は、大谷焼の土瓶の蓋。19世紀中葉以降のものである。**５**は、大谷焼の鍋。内面全面に釉がかかる。底部近くには小粘土塊を貼り付けていて、三足と思われる。底部に墨書の一部があり、「□(和？）の〔……〕」か。19世紀中葉以降のものである。

第29図６は、産地不明のミニチュア玩具の鍋。鉄釉がかけられ、把手が付く。**７**も、産地不明のミニチュア玩具の鍋。鉄釉がかけられる。**８**は、大谷焼の土瓶の下半部。底部に墨書の一部が鮮明に残るが、解読不能である。**９**は、京・信楽系のしめなわ文茶碗。海老は赤、目は緑の上絵付けである。**10**は、京・信楽系の碗。19世紀代のものである。

第29図11は、京・信楽系の土瓶底部。本破片の外面は無釉で、内面には灰釉が全面にかけられてい

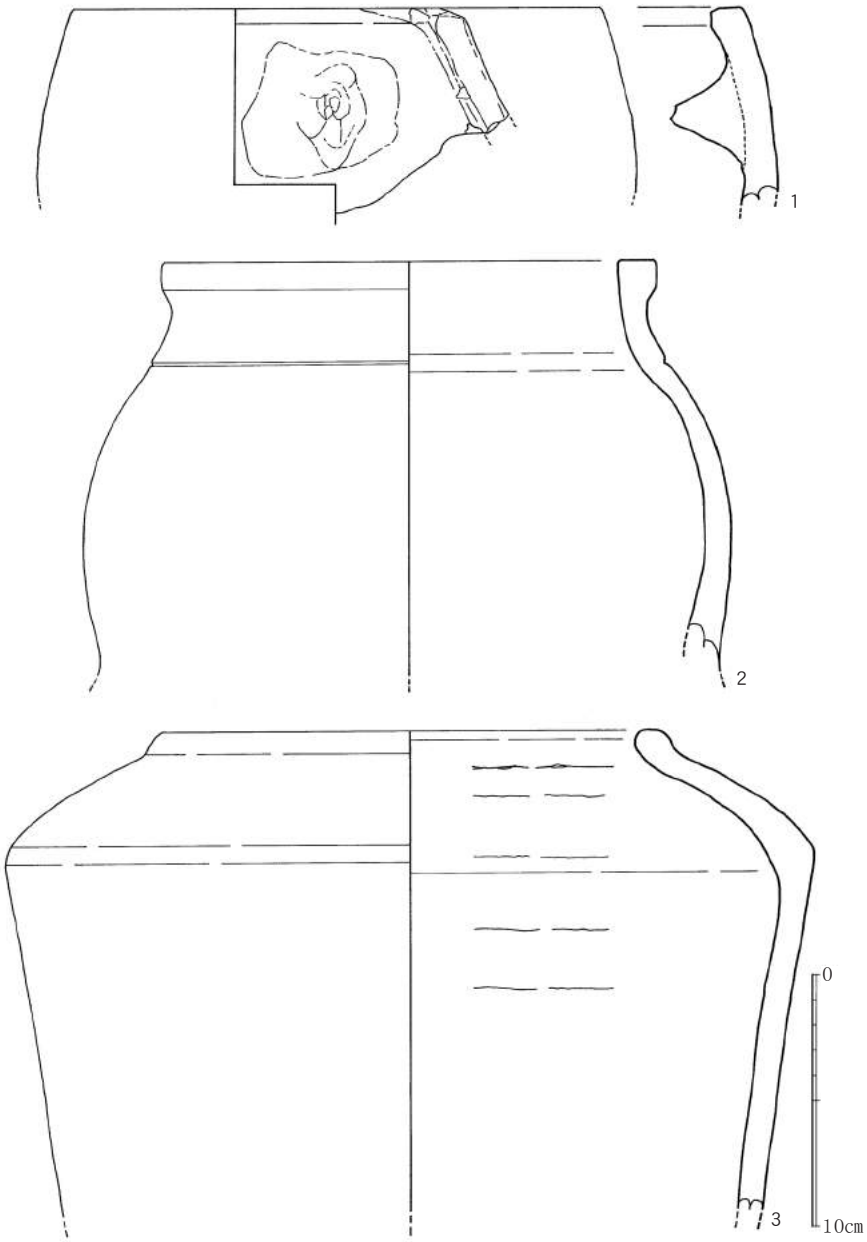


第 26 図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）



第 27 図　土坑Ｓ 16 出土火鉢・焜炉類拓本（実大）

１．土坑Ｓ 16 出土「喜助」刻印　２．同「眉山下雲光」刻印　３．豊田進『阿波の陶磁』掲載「眉山下雲光」刻印

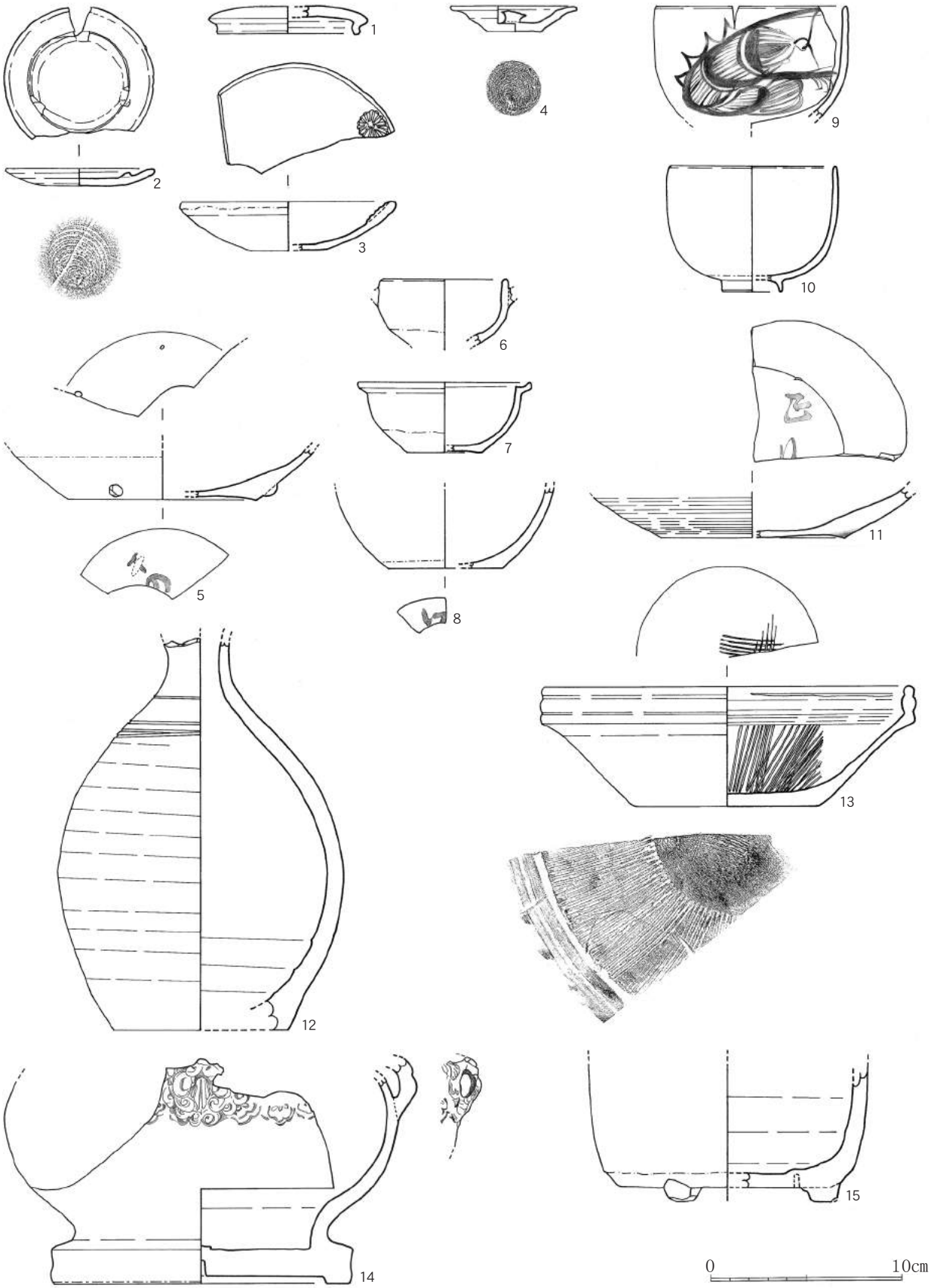


第 28 図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）

る。底部には「正月」の墨書が見られる。19 世紀。**12** は、備前の徳利。頸肩部の境に沈線を１条巡らし、その下に螺旋沈線を巡らす。17 世紀後半以降のもの。**13** は、堺・明石系の擂鉢。幕末ころのもの。**14** は、瀬戸・美濃系の火鉢。底部を除いた外面には緑釉を施し、内面全面には淡い緑色の発色の灰釉が塗られている。体部上半には把手が付けられている。底部中央に小さな穿孔がなされる。19 世紀中頃のもの。**15** は、瀬戸・美濃系の火鉢。外面には緑釉が施され、その下部は厚く釉溜りとなっている。底部には、低い三足が付けられ、その各足の内側寄りに小さな穿孔がなされている。19 世紀代のもの。

第 30 図は、瀬戸の水甕。口径 38.6 ㎝、器高 27.5 ㎝で、器体上下に雷文を押捺して巡らす。体部には陽刻の雲龍文を配する。外面は緑釉、内面は灰釉で上半部には緑釉を掛け流している。底部外面は無釉。内面底部には大きな胎土目跡が８か所に残っている。18 世紀末から 19 世紀にかけてのものである。

第 31 図 1 は、丹波の甕。復元口径 48 ㎝。外面に鉄釉を施し、内面にも鉄釉がかかる。

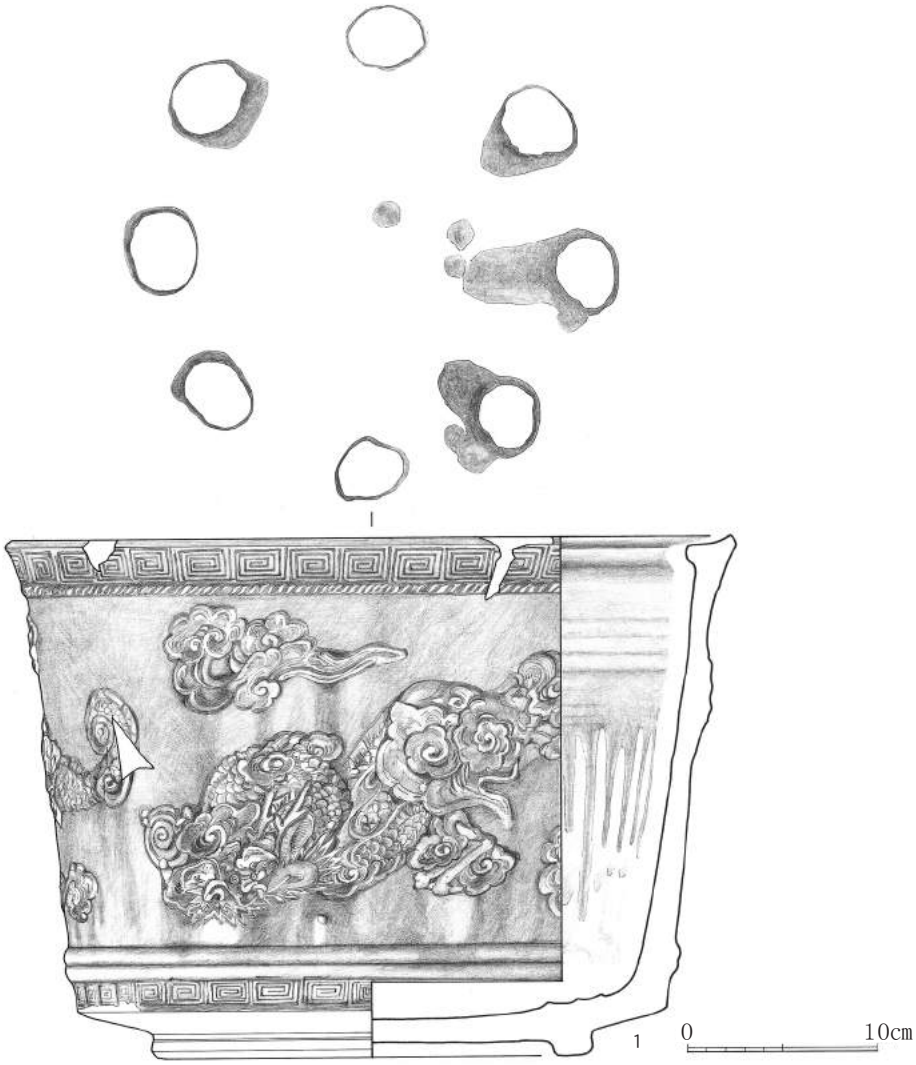


第29図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(3)（縮尺：１／３）

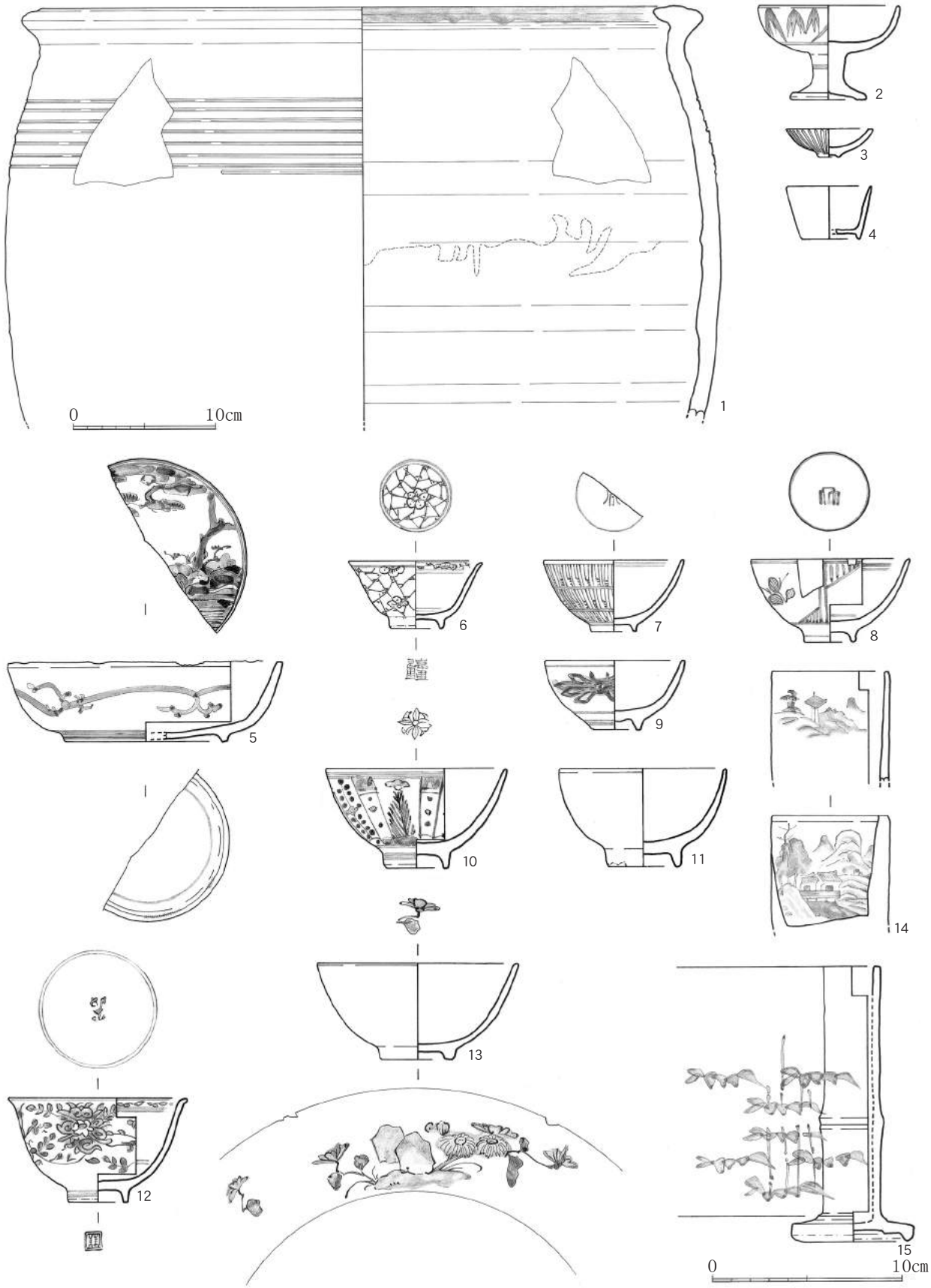
〔磁器〕第31図2は、肥前系の仏飯器。体部に笹文をあしらう。釉は脚部の上半部までしか施されていない。18世紀後半から19世紀のもの。**3**は、肥前系の紅皿。白磁で、外面底部付近は無釉である。18世紀から19世紀にかけてのものである。**4**は、肥前系の白磁の小杯。18世紀末から19世紀のもの。**5**は、肥前系の青磁染付皿。口縁端部は輪花になる。青磁釉は内面の体部にのみ施される。見込みには、松竹梅文が描かれる。外面には唐草文が濃のみで描かれる。ガラス焼継を行っている。18世紀後半のものであるが、ガラス焼継が普及するのは19世紀以降なので、廃棄時期はさらに新しくなると思われる。

第31図6は、関西系の小杯。外面全面、内面口縁部と見込みに氷裂文に梅花を配した文様を施す。19世紀中葉以降のもの。**7**は、肥前系の小杯。外面に暦文を施し、見込みには「壽」のくずし字がある。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**8**は、肥前系の小杯。外面に草文、見込みに源氏香文を描く。これも18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**9**は、肥前系の小杯。外面に結びのし文をコンニャク印判で施す。内面は無文。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**10**は、肥前系の小広東碗。外面は区画された瓔珞文が描かれる。見込みには十字花文が描かれる。18世紀後半のものである。

第31図11は、肥前系の白磁碗。18世紀後半から19世紀にかけてのもの。**12**は、瀬戸・美濃系か関西系の端反り碗。内面口縁部に花唐草文、見込みにも花唐草文を配する。外面には、牡丹唐草文を描く。



第30図　土坑Ｓ16出土遺物実測図(4)（縮尺：１／４）



第31図　土坑Ｓ 16出土遺物実測図(5)（縮尺：１／３）　１は縮尺：１／４

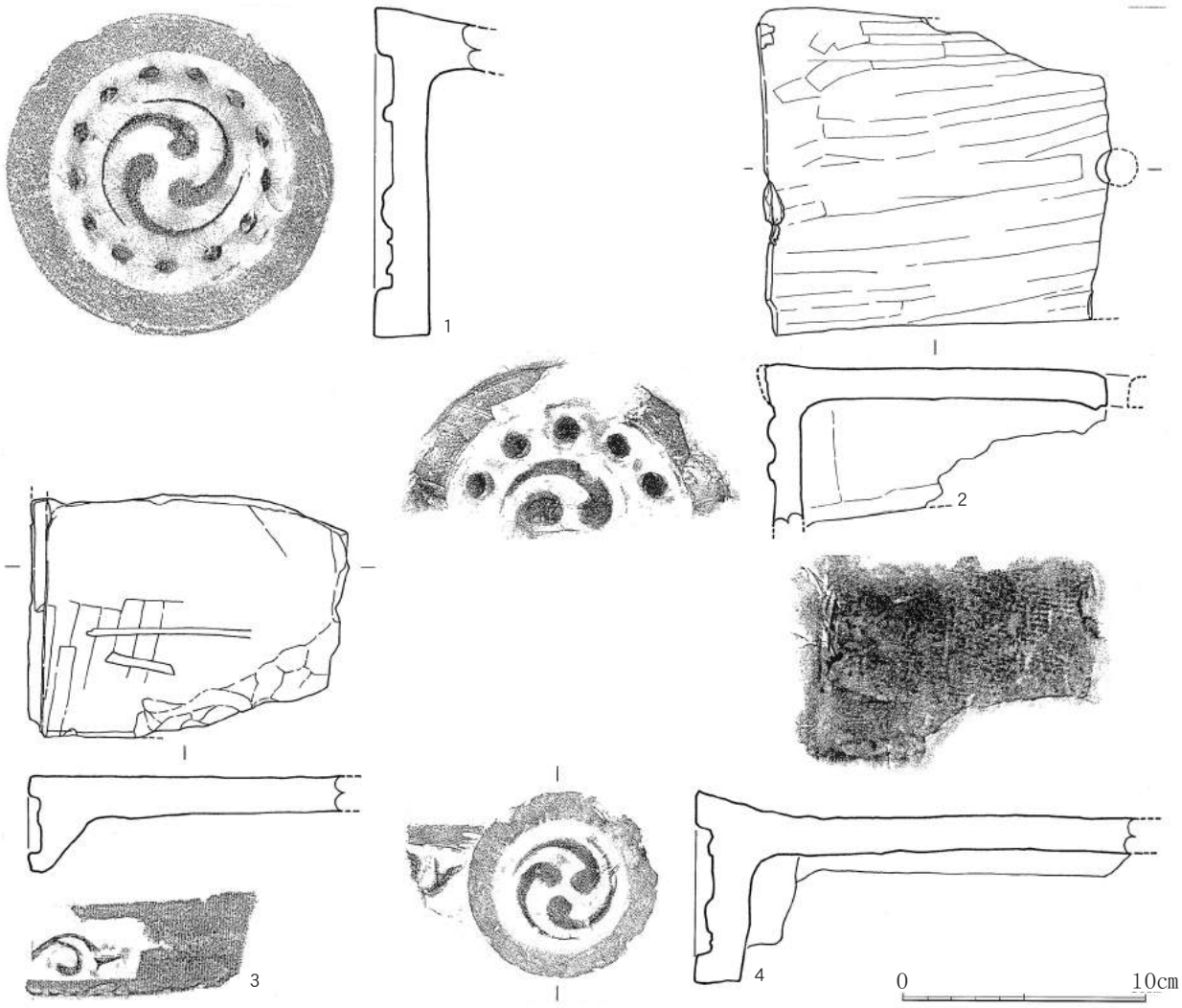
高台内には、二重方形枠内に変形字銘がある。13は、肥前系の碗。外面と見込みに菊花文を描く。高台は、幅広のものである。18世紀後半のもの。14は、関西系の筒碗であろうか。口縁端部と口縁部内面が無釉なので、蓋を伴うものと見られる。外面に山水文を描く。19世紀のもの。15は、肥前系の筆立あるいは花立。体部は竹の節部を模り、外面に竹文を配する。高台は蛇の目凹形である。19世紀のものである。

〔瓦〕第32図１は、巴文軒丸瓦。２は、巴文軒丸瓦で、丸瓦部に穿孔がある。３は、唐草文軒平瓦。４は、軒桟瓦。

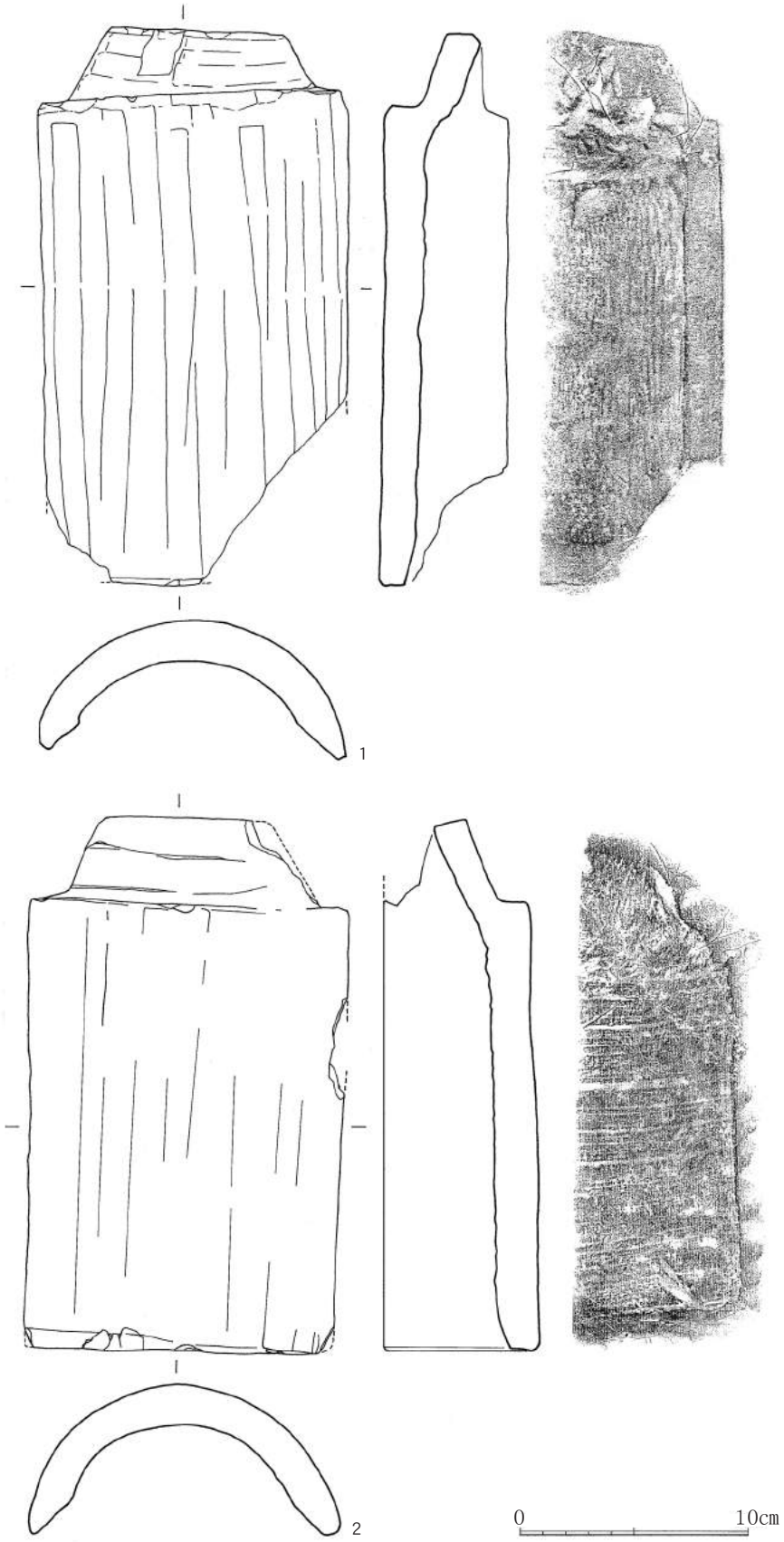
第33図１・２は、丸瓦。**第34図**１は、丸瓦で、穿孔の見られるもの。

〔特殊品〕第34図２は、縄状突帯を有する肥前系の陶器大甕の破片を再利用して、加工円盤にする途中のもの。一部の縄状突帯は剥ぎ取られている。３～８は、瓦を再利用した加工円盤。このうち、３・５・６は、完成品である。きれいな円形で、側面が磨かれている。７は、側面が磨かれ、完成品と考えられるが、いびつな円形である。４と８は、打ち欠きは最終に近いが、側面は磨かれていない未成品である。

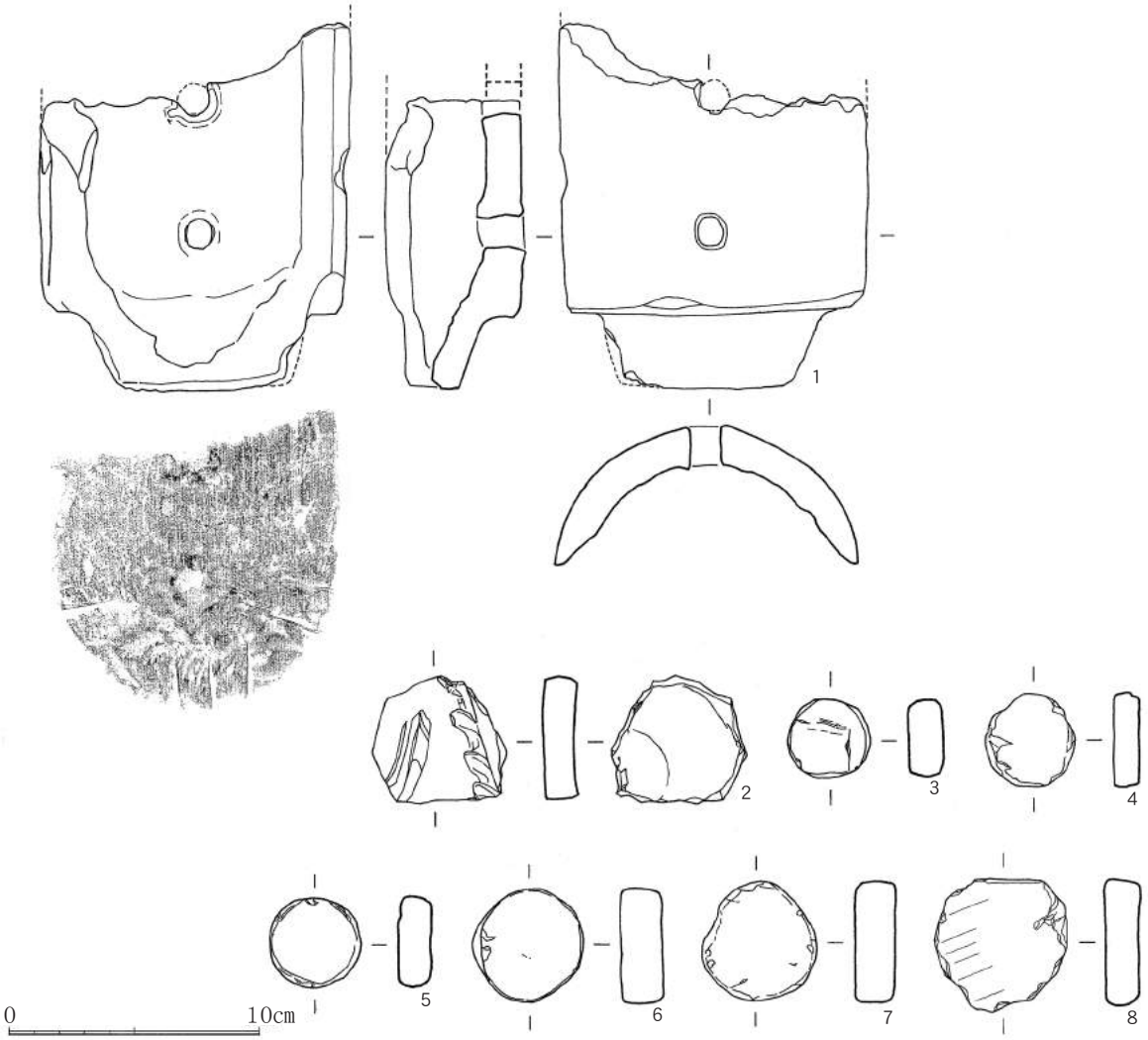
第35図１は、土製ミニチュアで、紅皿写しと思われる。２は、土製秉燭。無釉で、突起は上からの方形の切込を有す。突起の上面には煤が付着する。３は、土製鳩笛。上面に透明釉をかけ、さらに頭上



第32図　土坑Ｓ 16出土遺物実測図(6)（縮尺：１／３）



第33図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(7)（縮尺：１／３）



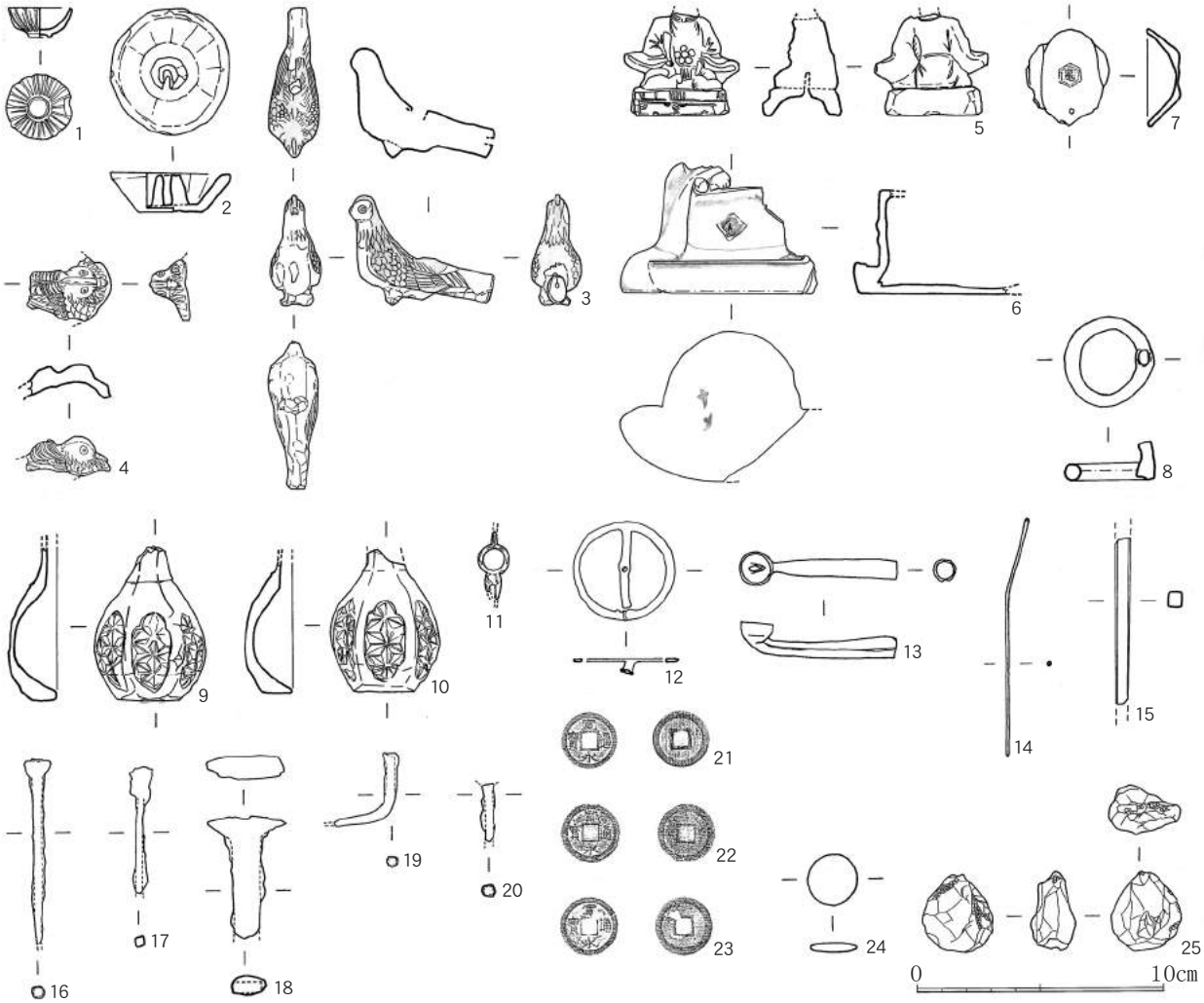
第 34 図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(8)（縮尺：１／３）

部から羽にかけて緑釉を施す。４は、土製オシドリ。頸部上面に、製作時に穿孔された１㎜弱の非常に小さな穴がある。５は、土製人形の天神。天神様の体のみに鉄釉がかかる。底には窪みが作られ、中心に円形の穿孔がある。

第 35 図 6 は、京・信楽系陶器の水滴。胎土は白色の非常に精選されたもので、内面には布目痕が見られる。注口部は手の右側に設置されるが、欠損している。前面の下部は浅い溝状に作られる。底部に墨書があり、カタカナの「ナソ」と読め、記号か。7 は、４の土製オシドリの下半部で、底部に二重六角枠内に「亀」の押印がある。このことは製図・レイアウト後に判明したため、別個に掲載しているが、本来は４と７とは接合する。8 は、灯心押さえ。産地不明の陶器である。一本の粘土紐から成形されているが、欠損のため、長さ不明。上半部には鉄釉をかける。底部は無釉。9・10 は、土製ミニチュアの六角面取り徳利。２点は同一個体ではないが、作りと押印は全く一緒である。底部を除いて、緑釉を施す。

〔金属製品〕第 35 図 11 は、銀製簪。頭部には耳掻きが付いていたと思われる。陰刻の文様がかすかに見られる。12 は、鉄製で、飾り金具と思われる。中心部に小さな鋲の痕跡が残っている。13 は、真鍮製の煙管雁首部。19 世紀代の形態である。14 は、真鍮製の簪の髪にさす部分の破片。

第 35 図 16 ～ 20 は、鉄製釘。このうち、16 は頭巻釘。



第 35 図　土坑Ｓ 16 出土遺物実測図(9)（縮尺：１／３）

〔銭貨〕第 35 図 21 ～ 23 は、寛永通宝。

〔ガラス製品〕第 35 図 15 は、笄と思われる。外面はスリガラス状となっている。

〔石製品〕第 35 図 24 は、黒色の碁石。**25** は、火打石。淡い青色のチャートである。

２．溝Ｓ 19

１）**遺構**（第 36 図、図版第 11）

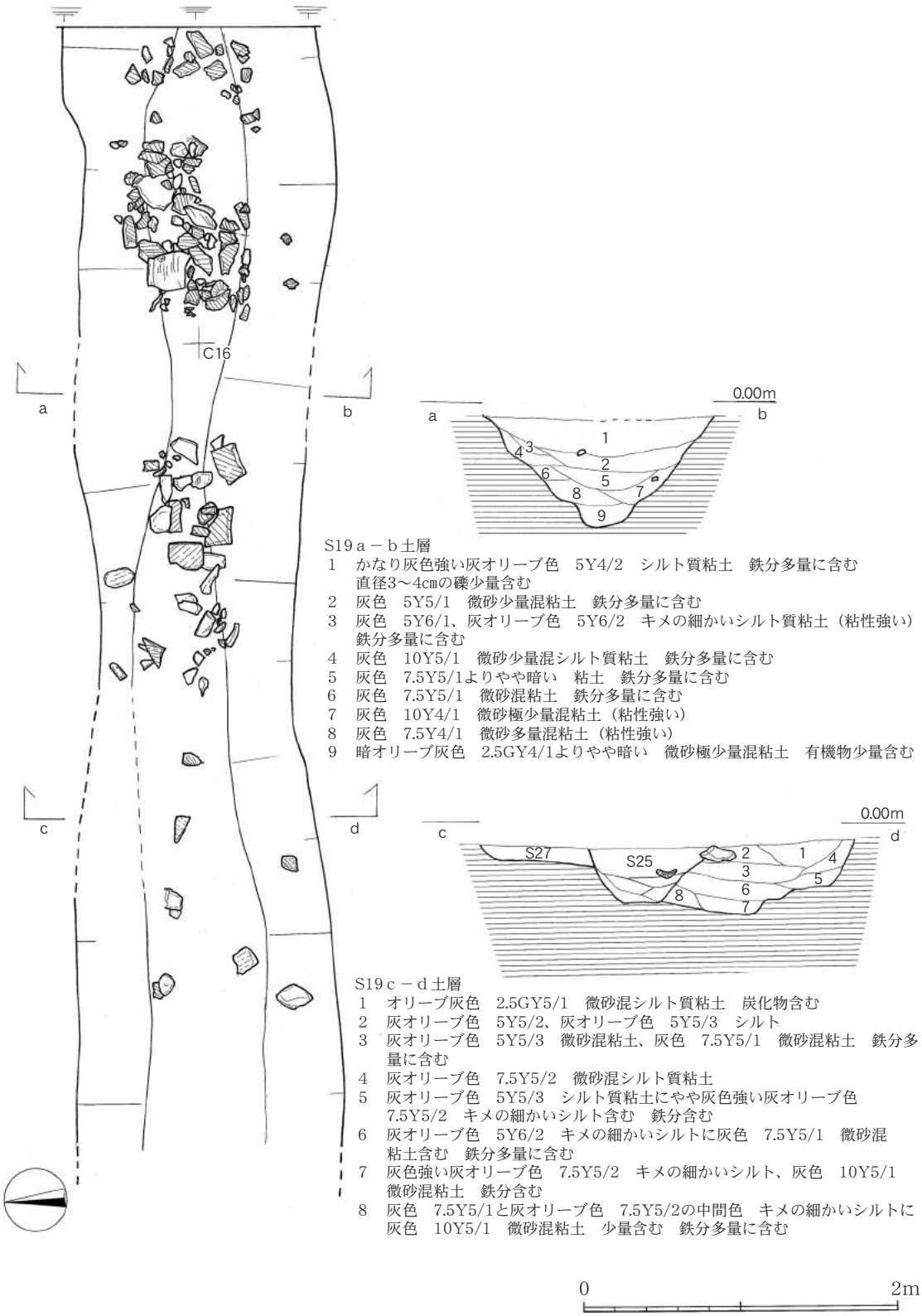
当初は調査区東壁にかかる大きな土坑として調査を行っていたが、調査が進むにつれて西側にのびていく溝であることを確認した。幅 1.5 ～ 1.7 m、深さ 70 ㎝弱である。

この溝より南側には各遺構面とも遺構が少なく、屋敷地の中でもこの溝以南は畑などに使用されていた可能性がある。

２）**出土遺物**（第 37・38 図、図版第 30）

〔土師器〕第 37 図 1 は、関西系の焙烙。内面底部には煤が付着し、黒色に変色している。19 世紀代のもの。

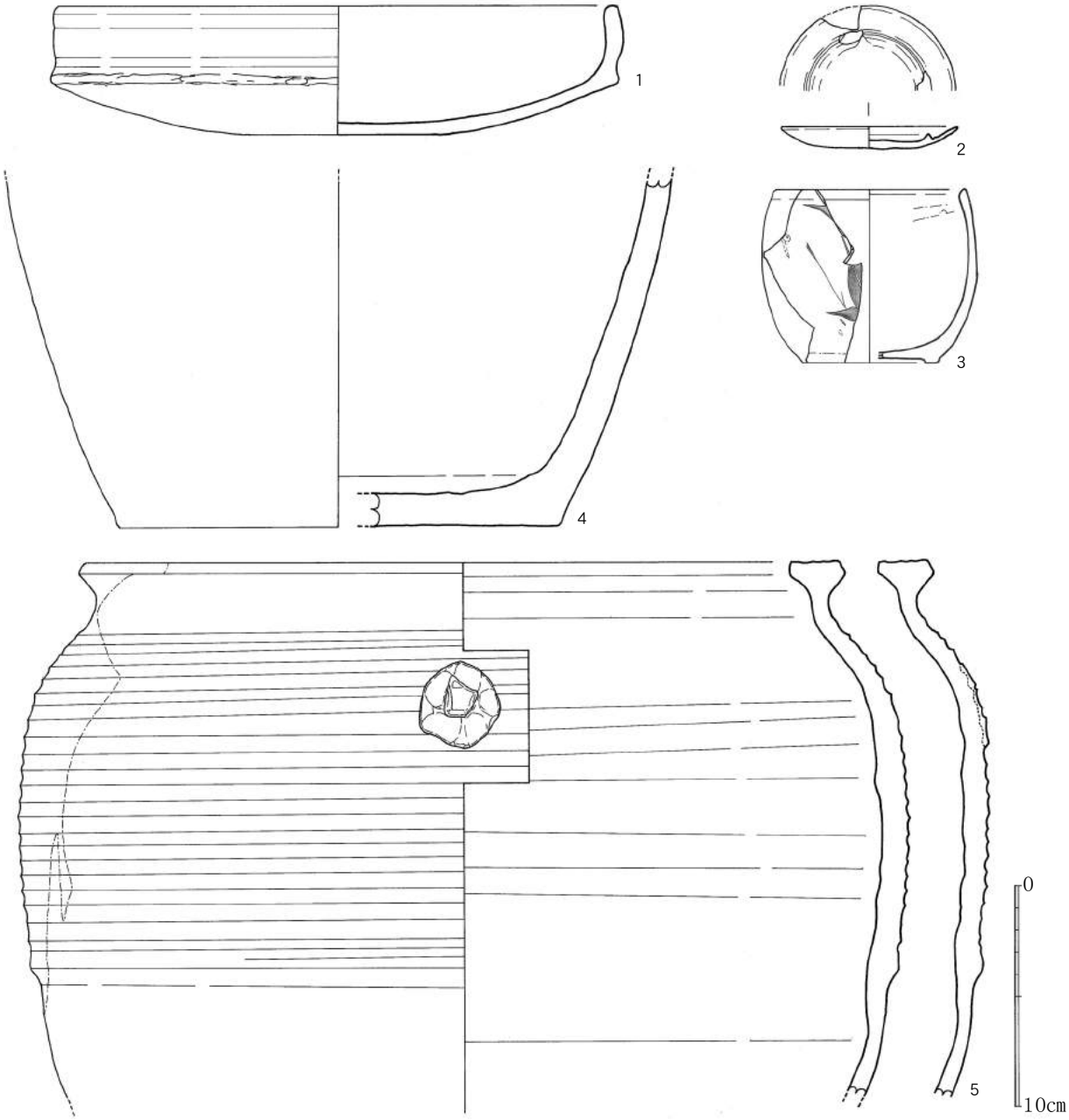
〔陶器〕第 37 図 2 は、備前の灯明皿。内外面に塗土をしていて、こげ茶色を呈する。19 世紀代。 **3** は、京・信楽系の香炉ないしは火入。外面から口縁部内面にかけて白化粧をし、その後施釉している。文様



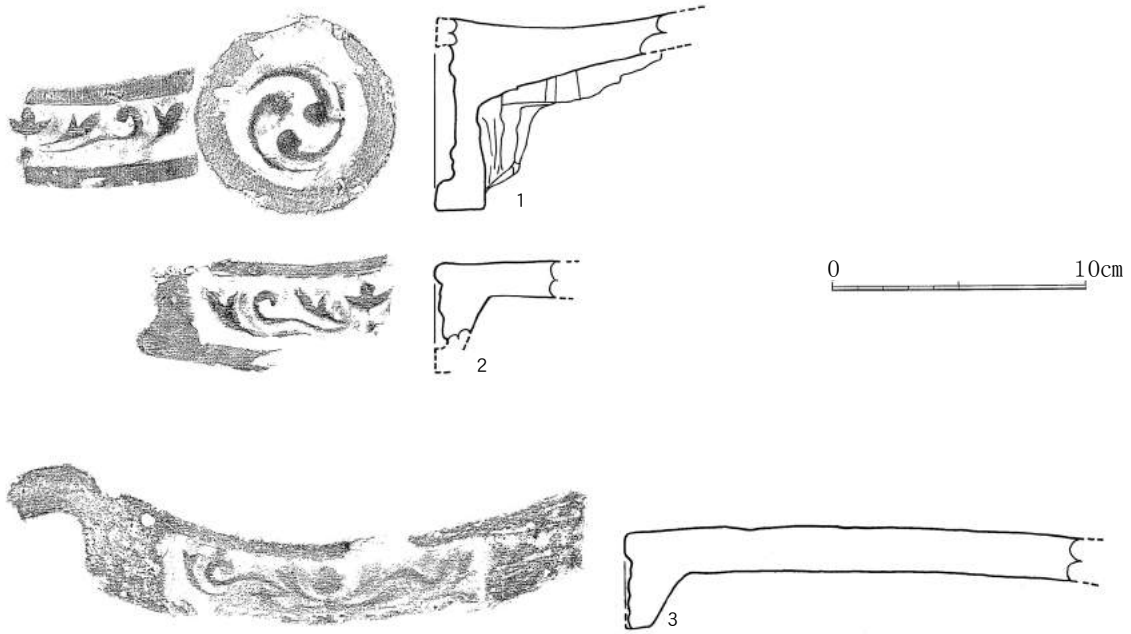
第36図　溝Ｓ 19実測図（縮尺：１／40）

は、鉄絵と色絵の草花文。体部に縦方向に窪んだ部分が一部見られるので、ロクロ成型の後に型打ちを行っている。18 世紀末から 19 世紀にかけてのもの。 **4** は、備前の甕底部。内面に火襷が見られる。 **5** は、丹波の甕。付遊環を肩部に付ける。18 世紀後半から 19 世紀初頭のものである。

〔瓦〕第 38 図 1 は、巴文と唐草文の軒桟瓦。 2 は、唐草文の軒平瓦。 3 は、唐草文の平瓦。



第 37 図　溝Ｓ 19 出土遺物実測図(1)（縮尺：１／３）



第 38 図　溝Ｓ 19 出土遺物実測図(2)（縮尺：１／３）

３．土坑Ｓ 18

１）**遺構**（第 39 図、図版第 12 － １）

溝Ｓ 19 の北側で検出した土坑である。その西側は土層観察用のアゼ中に入っていて、未調査である。南北の長さ 1.05 m、深さ 30 ㎝弱の土坑である。

２）**出土遺物**（第 41 図）

〔陶器〕第 41 図 1 は、京・信楽系の色絵碗と思われる。高台内に円刻と墨書がある。墨書は、図面の右側にカタカナの「カ」、左側にやや薄く「エ」と書かれている。

４．土坑Ｓ 21（第 39 図、図版第 12 － ２・３）

土坑Ｓ 22 とともに、調査区の南半部で検出された遺構である。径 20 ～ 25 ㎝、深さ 12 ㎝のほぼ円形の小さな土坑である。

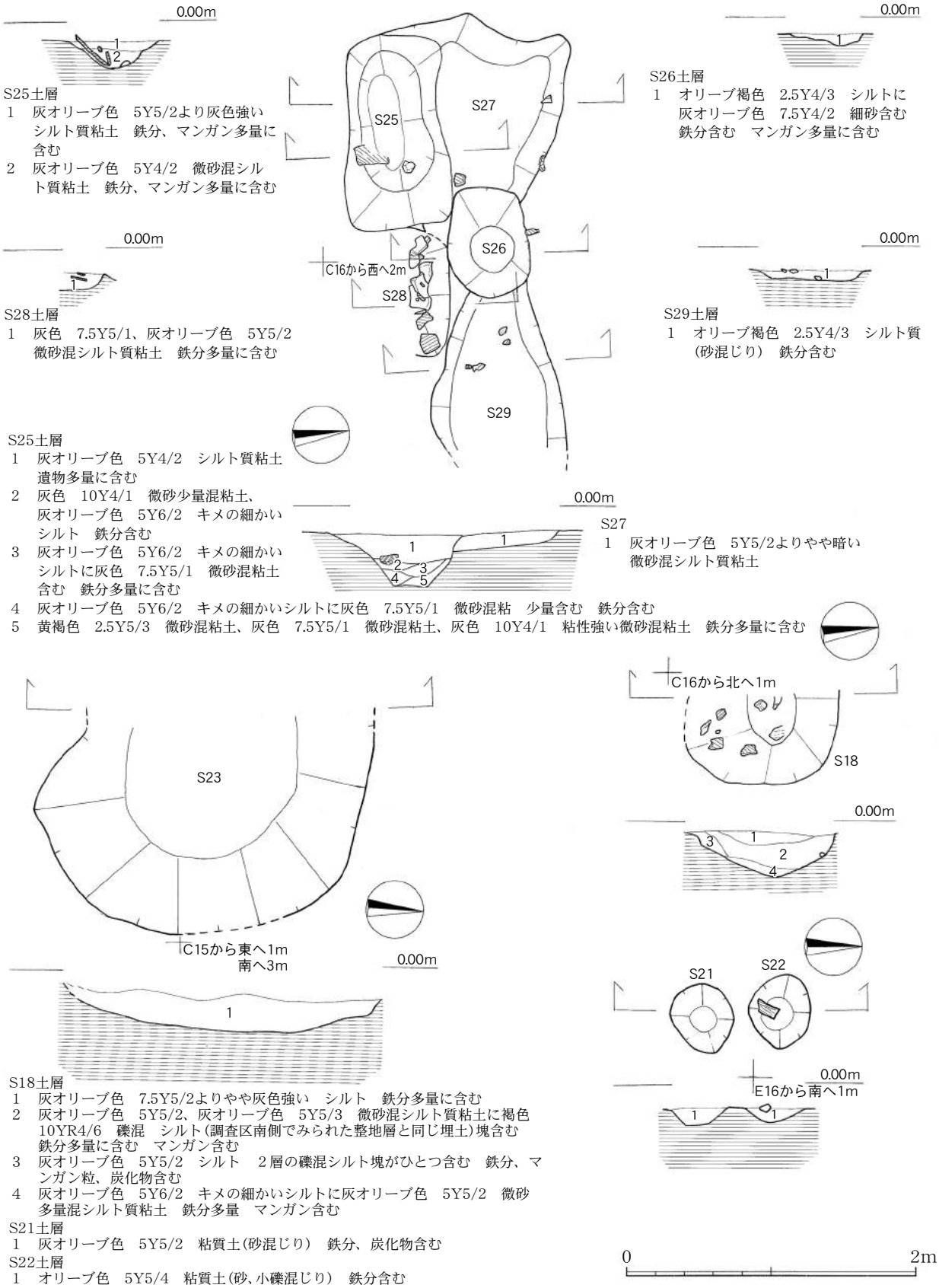
５．土坑Ｓ 22（第 39 図、図版第 12 － ２・３）

土坑Ｓ 21 のすぐ北側に位置する。径 20 ～ 25 ㎝、深さ 10 ㎝のほぼ円形の小さな土坑である。規模は土坑Ｓ 21 と同じで、遺構の性格も同じと思われる。

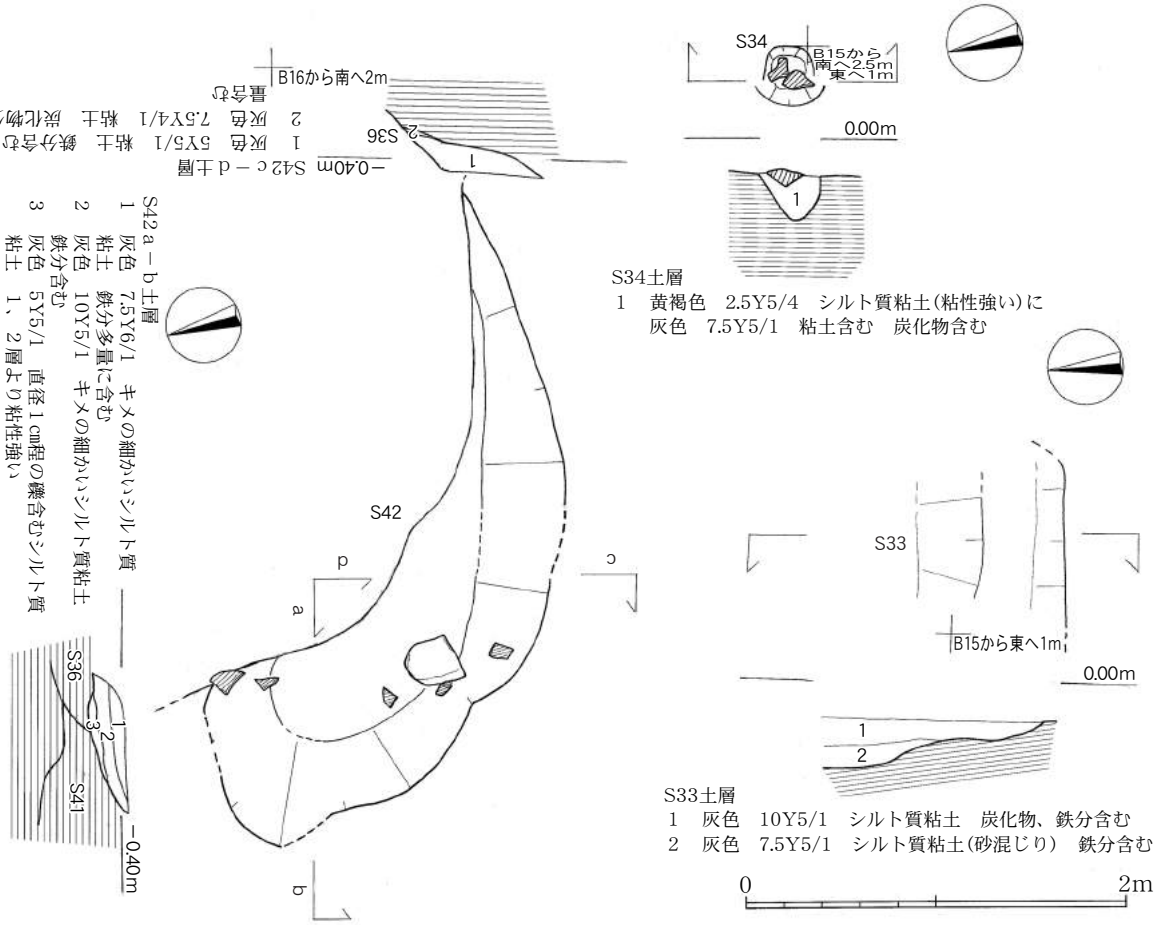
６．土坑Ｓ 23（第 39 図、図版第 12 － ４・５）

この遺構の西側部は調査区外にのびている。調査可能であった部分の南北の長さは約 2.3 m、深さは約 30 ㎝である。この遺構の南側の一部は、土坑Ｓ 20 によって切られている。

埋土は褐色で、それは調査区南側で検出した整地層と同じ土質であった。また、この土坑底部で南北に走る噴砂痕のようなものを確認したが、明確に噴砂と確定はできなかった。



第39図　土坑Ｓ18・Ｓ21・Ｓ22・Ｓ23・Ｓ25・Ｓ26・Ｓ27・Ｓ28・Ｓ29実測図（縮尺：１／40）



第40図　土坑Ｓ33・Ｓ34・Ｓ42実測図（縮尺：１／40）

７．土坑Ｓ25（第39図、図版第12－６）

南側で溝Ｓ19を切り、北側で土坑Ｓ27を切っている。長軸1.35ｍ、短軸75㎝ほどの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは約35㎝である。

８．土坑Ｓ26（第39図、図版第12－７・８）

長軸75㎝、短軸55㎝の楕円形に近い形態の土坑である。深さ10㎝弱である。土坑Ｓ27と土坑Ｓ29を切っている。

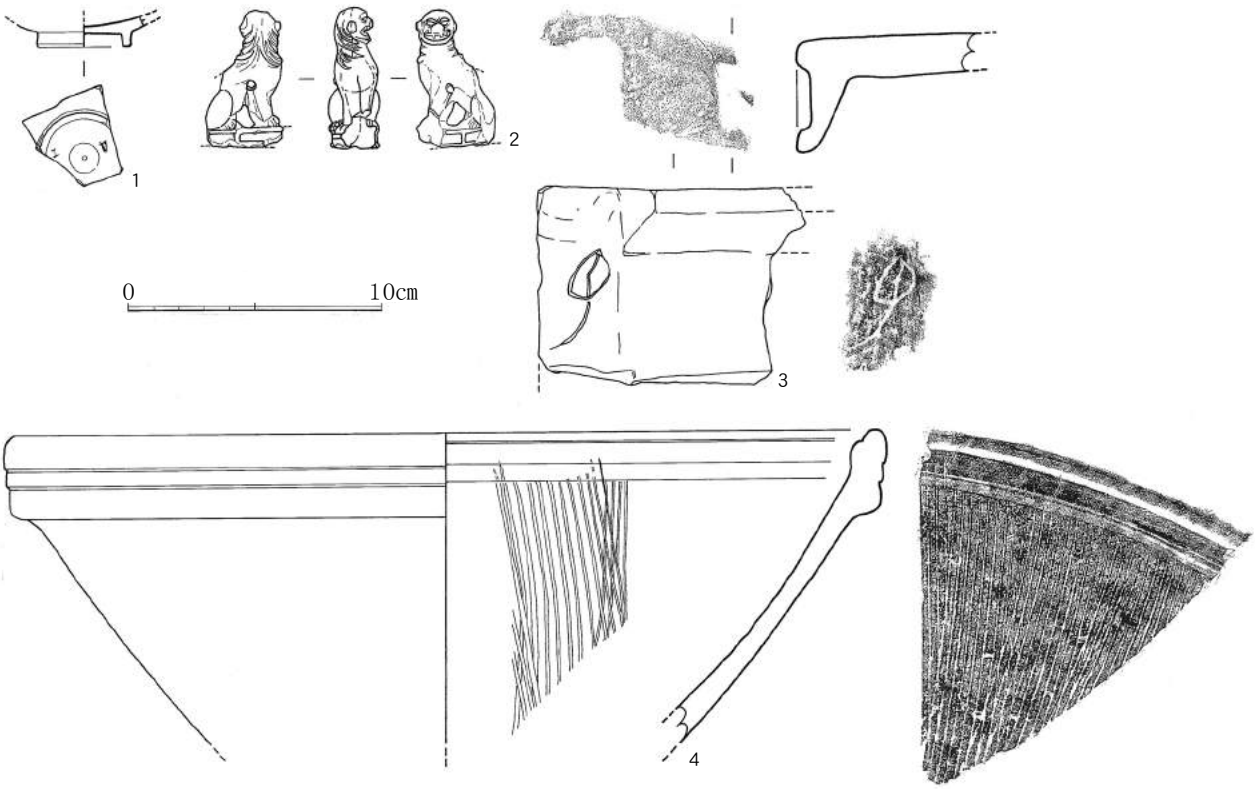
９．土坑Ｓ27

１）遺構（第39図）

南側を土坑Ｓ25によって切られ、東側を土坑Ｓ26によって切られている。したがって、正確な大きさや形状を確定することはできないが、推定で東西1.8ｍ、南北1.4ｍほどの東側にむかってやや狭くなる土坑であろう。深さ10㎝前後である。

２）出土遺物（第41図、図版第30）

〔特殊品〕第41図２は、土製の狛犬。



第41図　土坑Ｓ 18・Ｓ 27・Ｓ 28・Ｓ 42出土遺物実測図（縮尺：１／３）

10.　土坑Ｓ 28

１）**遺構**（第39図、図版第13－１・２）

本遺構の南側部分は、溝Ｓ 19によって切られている。東西の長さが90㎝ほどであり、深さは15㎝前後である。

２）**出土遺物**（第41図）

〔瓦〕第41図3は、唐草文の軒平瓦。淡灰褐色のややあまい焼きで、裏面に陰刻がある。窯印であろうか。

11.　土坑Ｓ 29（第39図、図版第13－３・４）

西側を土坑Ｓ 26によって切られ、東側端は土層観察用のトレンチとアゼで確認することができなかった。南北の最大幅が95㎝ほど、深さが８㎝ほどである。

12.　土坑Ｓ 33（第40図、図版第13－５・６）

西側部分が井戸Ｓ 08によって切られ、東側部分が土坑Ｓ 16によって切られているため、全体を復元することができない。溝などの可能性は低く、おそらく土坑になるものと思われる。北側に向かって現状では２段になって落ちていく状況が認められる。現状の最大の深さは30㎝ほどである。

13.　土坑Ｓ 34（第40図、図版第13－７・８）

作業進行上、東側を10㎝ほど下げてしまったために、全体の形状は不明であるが、直径40㎝ほどの円形の土坑であったと思われる。深さは25㎝ほどである。

14. 土坑Ｓ 42

１）**遺構**（第40図）

遺構番号は新しいが、石組み船入状遺構Ｓ 36を精査中に検出した江戸時代第１遺構面に相当する遺構である。第３遺構面検出の素掘り船入状遺構Ｓ 41を西壁断ち割りによってこの遺構より先に検出したため、番号がＳ 41の次になってしまった。土坑Ｓ 16によって北側部分が切られているため、全体の形状は不明である。深さ20㎝ほどである。

２）**出土遺物**（第41図）

〔陶器〕第41図４は、堺・明石系の擂鉢。18世紀中葉のものである。

第６節　江戸時代第１遺構面上半で検出された遺構と遺物

１．井戸Ｓ 08

１）**遺構**（第42図、図版第14・15上・16－１）

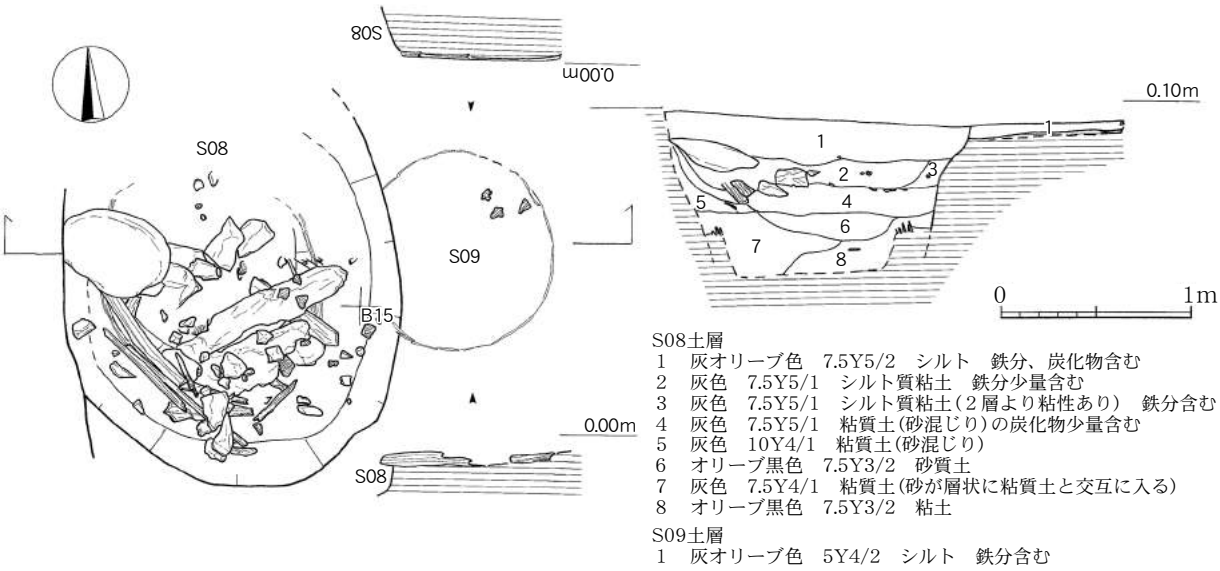
第１遺構面上半で検出したが、北側の一部が汚水管の下に入っていたため、井戸全体を調査することはできなかった。掘り方は推定直径1.8ｍである。

この井戸内上面からは石と板材が多く出土し、石の中には長径60㎝の大石もあった。これらを排除すると、中央部に直径1.1ｍの竹製の輪状のタガを確認した。このタガは、井戸の内部構造として使用された桶の板材を抜き取った後に残ったものと考えられた。

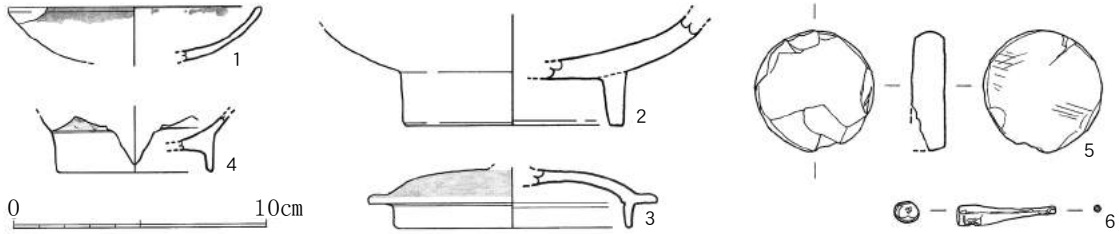
したがって、この井戸の廃棄の際には、桶から板材を抜き取って、一部を石とともに埋めたものと推測される。

２）**出土遺物**（第43図、図版第31）

〔陶器〕第43図１は、備前の灯明皿。内面から口縁部外面にかけて塗土を施す。口縁部に煤が厚く付着する。18世紀後半から19世紀のもの。**２**は、京・信楽系の鉢。内外面に鉄釉をかけ、内面には灰釉を散らす。**３**は、産地不明の蓋物か土瓶の蓋。外面に灰釉がかかり、内面は無釉。



第42図　井戸Ｓ 08・曲物埋設遺構Ｓ 09実測図（縮尺：１／40）



第43図　井戸Ｓ08出土遺物実測図（縮尺：１／３）

〔磁器〕第43図４は、肥前系の広東碗。19世紀代のもの。

〔特殊品〕第43図５は、箱型の焜炉などの大型の土師器を再利用した加工円盤。側面が磨かれているので、完成品である。使用による欠損が甚だしい。

〔金属製品〕第43図６は、煙管の吸口。

２．曲物埋設遺構Ｓ09

１）**遺構**（第42図、図版第15下・16－２）

井戸Ｓ08の東側で検出された遺構である。井戸Ｓ08に切られた直径1.05ｍの曲物の痕跡を確認した。調査してみると、曲物の痕跡は、北側の高いところで８㎝、南側では２㎝ほどしか残っていなかった。底板は検出することができなかったので、もともと底板の無い曲物を埋設したものと思われる。

基底部は、井戸Ｓ08の検出面より少し下という程度である。非常に浅いので、当然井戸の可能性は全く無いことになる。また、この曲物自体がそれほど高さのあるものではなかった可能性があり、用途不明の遺構である。

２）**出土遺物**（第46図、図版第31）

〔特殊品〕第46図１は、土製玩具で、飾り馬。後方の底部に、小さな穿孔がある。

３．土坑Ｓ05（第44図、図版第16－３）

二等辺三角形に近い不整形な土坑である。南北約1.6ｍ、東西1.2ｍ、深さ30～40㎝である。層位的に、水田Ｓ01の下にあり、明治時代の水田Ｓ01内の溝と考えられる溝Ｓ12によって切られているので、幕末頃と推定される。

４．溝Ｓ07（第45図、図版第16－４・５・６）

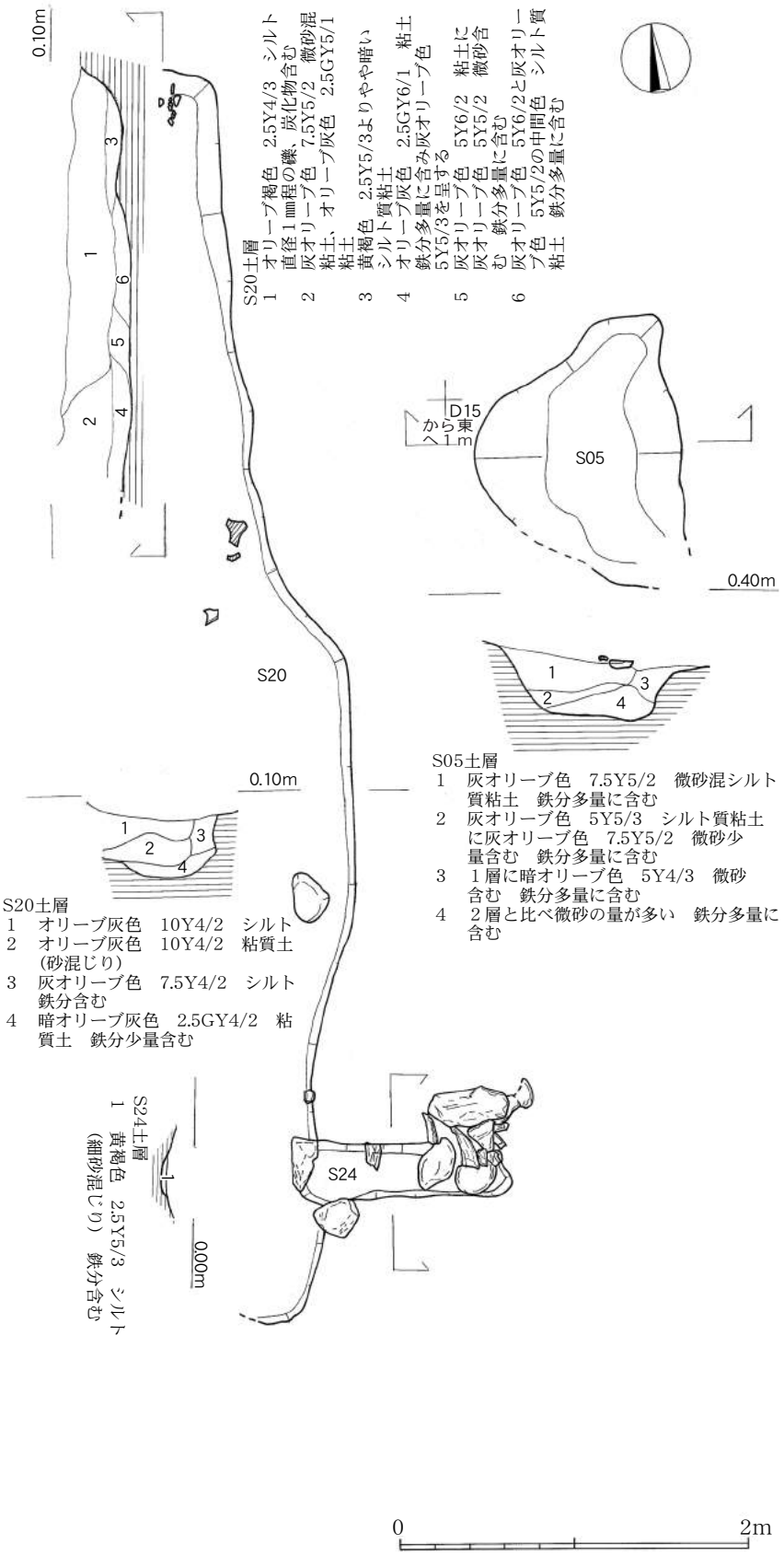
井戸Ｓ08に切られて、土坑Ｓ05近くまで南下する幅22～50㎝の溝である。深さ10㎝ほどである。

溝Ｓ12とともに、水田Ｓ01の方向とほぼ一致し、埋土も水田の土とほぼ同じである。第１遺構面上半の検出であるが、水田Ｓ01の西側端の耕作痕ないしは溝になると思われ、明治時代の遺構の掘り残しである。

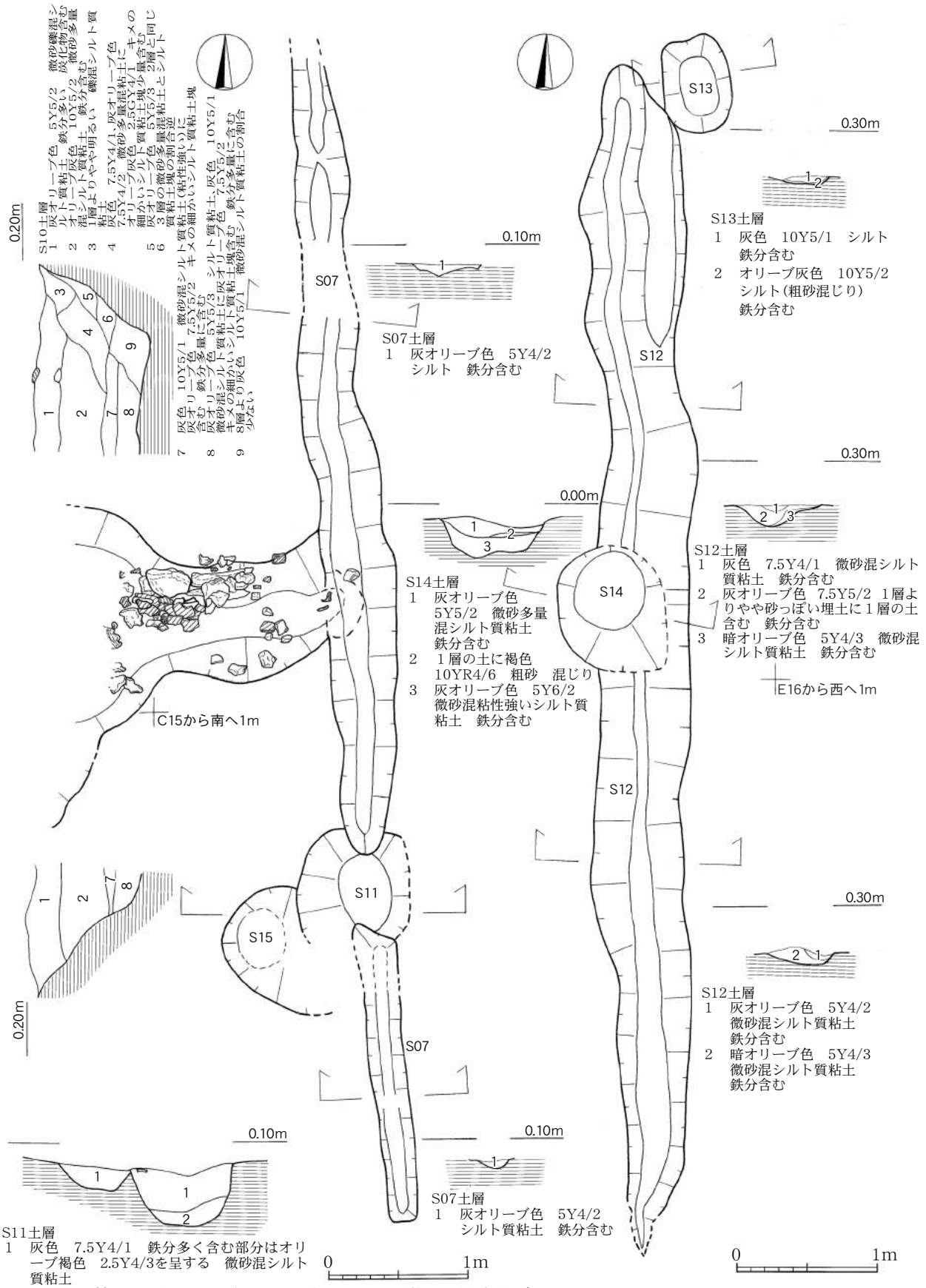
５．土坑Ｓ10

１）**遺構**（第45図、図版第16－７）

Ｂ・Ｃ15区で検出した土坑になると思われる遺構で、西側は調査区外にのびる。東側は明治時代と思われる溝Ｓ07によって切られている。南北幅は西側で約2.3ｍ、東側で約80㎝を測り、東西は現存



第44図　土坑Ｓ05・Ｓ20・Ｓ24実測図（縮尺：１／40）



S11土層
1　灰色　7.5Y4/1　鉄分多く含む部分はオリーブ褐色　2.5Y4/3を呈する　微砂混シルト質粘土
2　灰オリーブ色　5Y5/2よりやや暗い　キメの細かいシルト質粘土　鉄分多量に含む

S15土層
1　灰オリーブ色　5Y4/2よりやや灰色強い　鉄分多く含む部分はオリーブ褐色　2.5Y4/4を呈する　微砂混シルト質粘土

第45図　溝Ｓ07・Ｓ12、土坑Ｓ10・Ｓ11・Ｓ13・Ｓ14・Ｓ15実測図（縮尺：１／40）

で1.8ｍ確認できた。西側で大きく広がる土坑と思われる。深さは80㎝ほどである。

２）**出土遺物**（第46図）

〔瓦〕第46図２は、巴文の軒桟瓦。３は、唐草文の軒平瓦。

６．土坑Ｓ 11（第45図、図版第16－８）

揚水施設Ｓ 04北側で検出した。この揚水施設Ｓ 04周辺は、遺構の切り合いが複雑で、平面・断面観察を何度も行った結果、Ｓ 15→Ｓ 11→Ｓ 07→Ｓ 04･Ｓ 17の順序を最終的に確認した。径80㎝前後、深さ40㎝ほどのほぼ円形に近い土坑である。

７．溝Ｓ 12（第45図、図版第17－１）

土坑Ｓ 05の南側から溝Ｓ 07の延長方向と一致する方向で南下し、南側は撹乱により壊されている。現存で長さ約8.4ｍを測り、幅は広い部分で60㎝を測る。位置的に、水田Ｓ 01内の西端南側の溝状の落ち込みに対応するので、溝Ｓ 07とともに水田Ｓ 01内の西側端の耕作痕ないしは溝になる可能性が高い。

８．土坑Ｓ 13（第45図，図版第17－２・３）

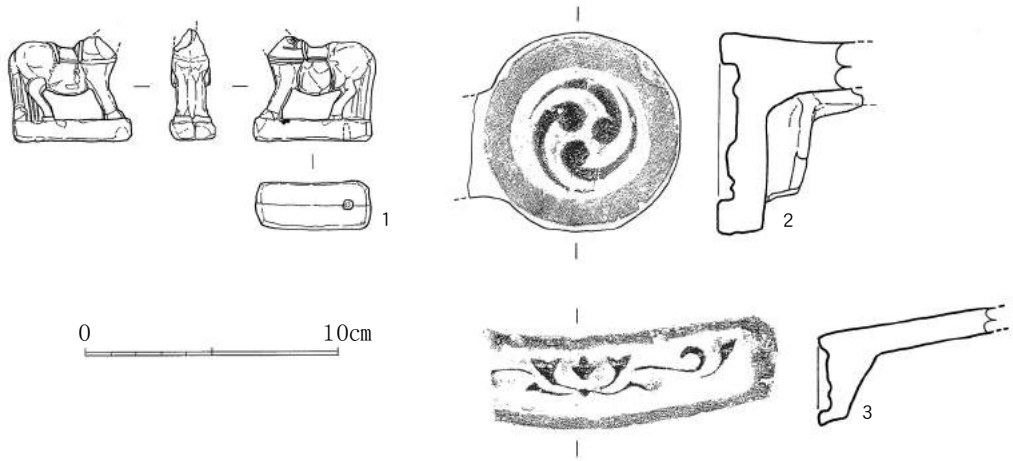
溝Ｓ 12の北端東側で検出した長軸70㎝、短軸50㎝、深さ７㎝ほどの小さく浅い土坑である。南西端を溝Ｓ 12で切られているので、土坑Ｓ 05と同じく幕末頃の時期が想定される。

９．土坑Ｓ 14（第45図、図版第17－４・５）

Ｄ 15区で検出した長軸90㎝、短軸約80㎝、深さ30㎝弱のやや楕円形に近い土坑である。溝Ｓ 12によって切られている。

10．土坑Ｓ 15（第45図）

揚水施設Ｓ 04と土坑Ｓ 11とによって切られていて、正確な大きさは確定できないが、短軸60㎝強、長軸80㎝以内、深さ20㎝の土坑である。



第46図　曲物埋設遺構Ｓ 09、土坑Ｓ 10出土遺物実測図（縮尺：１／３）

11.　土坑Ｓ 20（第44図、図版第17－６・７）

Ｃ・Ｄ15区の調査区西壁際で検出した大きな土坑と思われる遺構である。西側端で幅約7.1ｍを測る。深さは約35㎝である。

12.　土坑Ｓ 24（第44図、図版第17－８）

Ｄ15区で検出した東西に細長い土坑で、東側は高圧線の掘り方で壊されているが、この撹乱以東にはのびない。西側は土坑Ｓ20を切っている。東西約1.2ｍ、幅30㎝、深さ５㎝ほどの浅い遺構である。この遺構の上、特に東側周辺では人頭大の川原石・青石が集中していたが、これらの石とこの遺構との関係性は認められなかった。

第７節　明治時代水田面で検出された遺構と遺物

１．水田Ｓ 01

１）遺構（第47図、図版第18）

ほぼ南北方向に向いた水田の西側端が調査区のほぼ中央で確認された。南側端も確認されて、一部ではあるが、水田面の南西側の輪郭を検出することができた。灰色粘質土が20㎝ほど堆積していたが、南側に行くにつれてその厚さは薄くなっていた。

検出面で粗密はあるものの、ほぼ全面で南北方向の鋤痕を確認した。東西方向の鋤痕は南北方向のものに比べると少ない。また、西側端には溝があり、この溝は水田の南側に延びる溝Ｓ02と関連するかもしれない。

また、前節で記述した溝Ｓ07と溝Ｓ12とは、この水田の西側端の耕作痕ないしは溝になる可能性が非常に高い。水田は耕作により、何度も掘り返されるので、特に水田端部は深く掘り返されていたものと想像される。

水田の西側端斜面では、畦部に大豆を植えていたのではないかと推測される痕跡を確認した。このことに関しては、その痕跡内の土壌と周辺の土壌を採集して、自然科学的分析を行った。その結果は、第４章の「常三島遺跡工学部電気電子棟地点における花粉分析」で明らかにされている。

２）出土遺物（第50図）

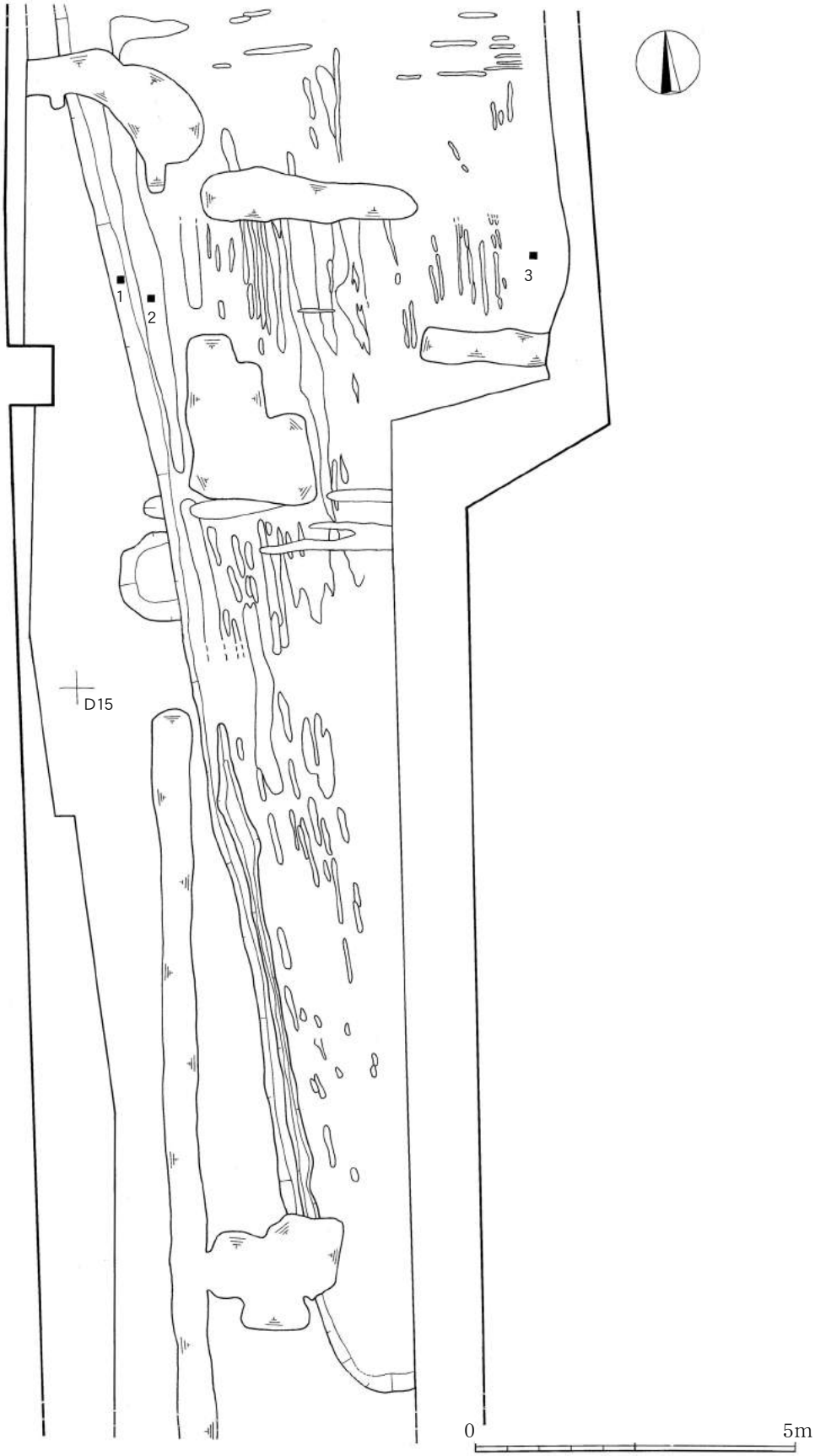
〔特殊品〕第50図１は、小型の土錘で、半分以上が欠損している。

〔金属製品〕第50図２は鉄製品で、カンナの刃と思われる。**３**は、鉄釘である。頂部を折って頭部とした皆折釘である。

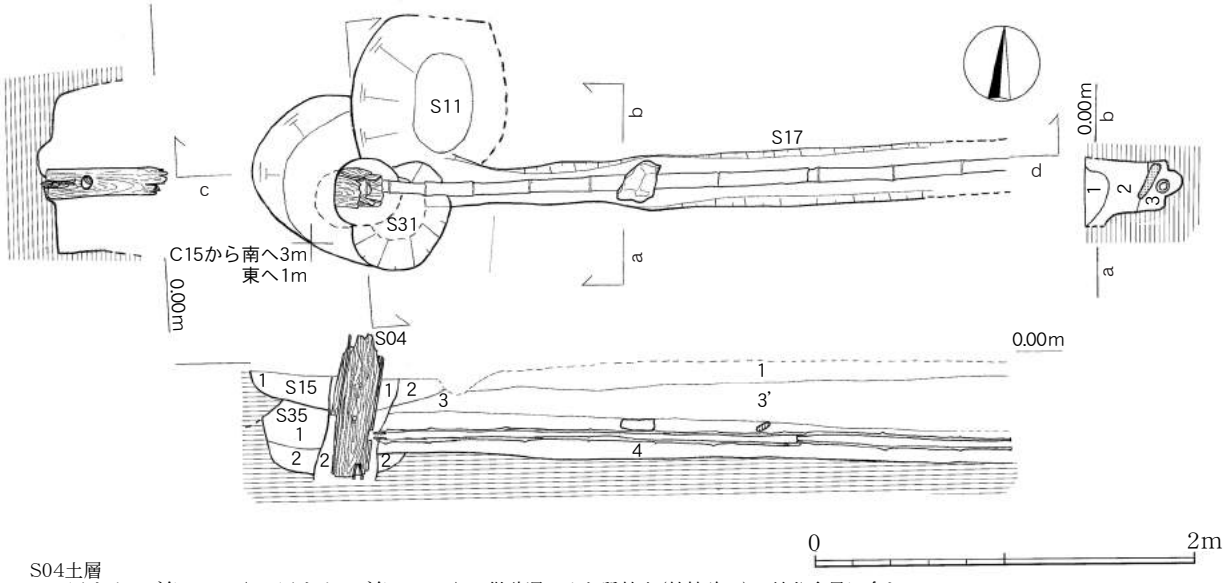
２．揚水施設Ｓ 04・暗渠Ｓ 17（第48図、図版第19・20・21－１～３）

水田Ｓ01を調査中にその西側端で、水田に切られた小さな木組遺構の揚水施設Ｓ04を検出した。この木組遺構は二重になっている。堅固に作られた内側の木組があって、その底から30㎝上にこれを取り巻くように外側の木組が作られていた。

当初性格不明であったので、南側を半裁しながら調査を徐々に進めたが、水田Ｓ01を掘り下げた後の第１遺構面上半で、この揚水施設Ｓ04から東に延びる竹樋遺構である暗渠Ｓ17を検出し、揚水施設であることが分かってきた。



第 47 図　水田Ｓ 01 実測図（縮尺：１／100）　■は花粉分析用土壌サンプル採集地点



S04土層
1　灰オリーブ色　5Y5/2　灰オリーブ色　5Y5/3　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分多量に含む
2　灰色　7.5Y4/1と灰オリーブ色　7.5Y4/2の中間色　微砂多量混粘土

S15土層
1　灰オリーブ色　5Y4/2よりやや灰色強い　鉄分多く含む部分はオリーブ褐色　2.5Y4/4を呈する　微砂混シルト質粘土

S35土層
1　灰色　7.5Y4/1　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分多量に含む
2　灰オリーブ色　7.5Y5/2と灰オリーブ色　7.5Y4/2の中間色　微砂多量混粘土

S17ａ－ｂ土層
1　灰オリーブ色　5Y4/2　シルト質粘土　鉄分含む
2　灰オリーブ色　5Y5/2　シルトに灰色強い灰オリーブ色　7.5Y5/2　微砂混シルト質粘土斑状に含む　鉄分多量に含む
3　かなり灰色強い灰オリーブ色　5Y5/2　微砂多量混シルト質

S17ｃ－ｄ土層
1　灰オリーブ色　5Y5/2　シルトに灰色　7.5Y5/1　微砂混シルト質粘土斑状に含む　鉄分非常に多く含む
2　灰オリーブ色　5Y4/2　微砂少量混シルト質粘土に灰オリーブ色　5Y5/3　キメの細かいシルトを斑状に含む　鉄分多量に含む
3　灰色　7.5Y5/1　微砂混シルト質粘土(粘性強い)　鉄分多い
3’灰オリーブ色　5Y5/3　微砂混シルト質粘土(粘性強い)に３層の土を斑状に含む　鉄分多量に含む
4　かなり灰色強い灰オリーブ色　5Y5/2　微砂多量混シルト質粘土

第48図　揚水施設Ｓ04・暗渠Ｓ17実測図（縮尺：１／40）

暗渠Ｓ17は、幅30㎝、深さ40㎝の溝を掘り、その底に竹樋を埋設したものである。揚水施設Ｓ04の東側板の下部に孔があり、竹樋はその孔に結合されている。竹樋の１本の長さは揚水施設Ｓ04と結合したもので2.2ｍあり、それには固定のために平らな石がほぼ中央部分に置かれていた。暗渠Ｓ17は東側に向かってレベルを下げていて、結合部と調査区東端部との比高差は約10㎝であった。

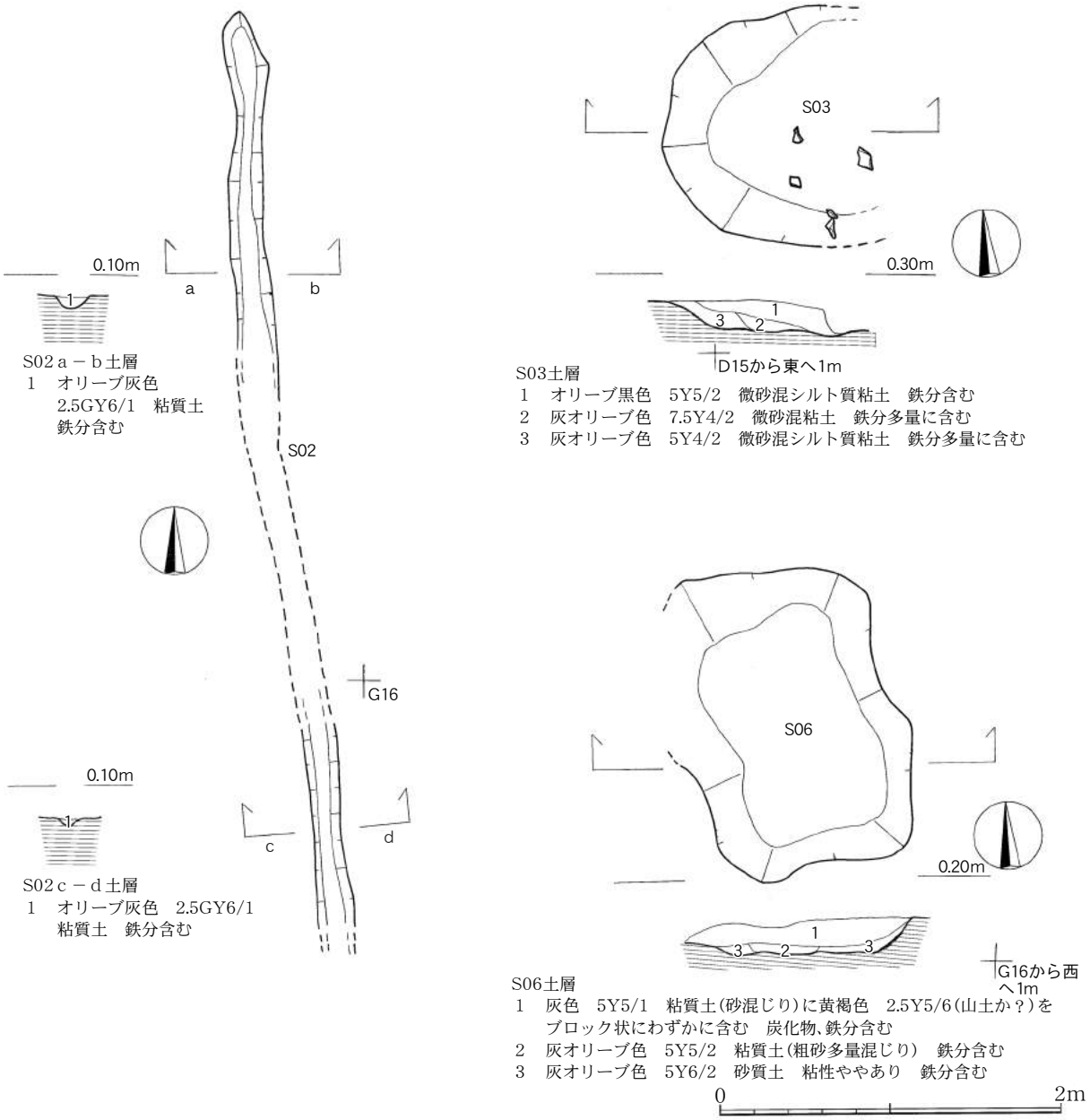
さらに精査をして、揚水施設Ｓ04の底で砂地に竹を垂直に打ち込んでいる痕跡を確認した。この竹の中に錘球を入れて深さを確認したところ、現状で深さ2.2ｍほどであった。

構造から見て、地下水を自噴させて東側へその地下水を導水する施設と思われるが、調査区外に竹樋の暗渠が延びているため、どのような所へ導水していたのかは不明である。

揚水施設Ｓ04の掘り方がＳ01水田によって切られていて、前節で記述した水田Ｓ01内の溝の可能性が極めて高い溝Ｓ07によって暗渠Ｓ17が切られているので、水田Ｓ01より古い可能性があった。しかし、水田は毎年耕作によって掘り返されているので、水田として利用されていたある時期にこの揚水施設Ｓ04・暗渠Ｓ17が設置されたものとみられる。したがって、水田Ｓ01と同時期の明治時代と判断される。

３．溝Ｓ02（第49図）

水田Ｓ01の西側端のほぼ延長線上の南側にある幅30～45㎝、深さ４～８㎝の細い溝である。この溝の北端は水田Ｓ01を切り込んでいて、また水田Ｓ01の方向とは若干ずれる。しかし、埋土は水田Ｓ



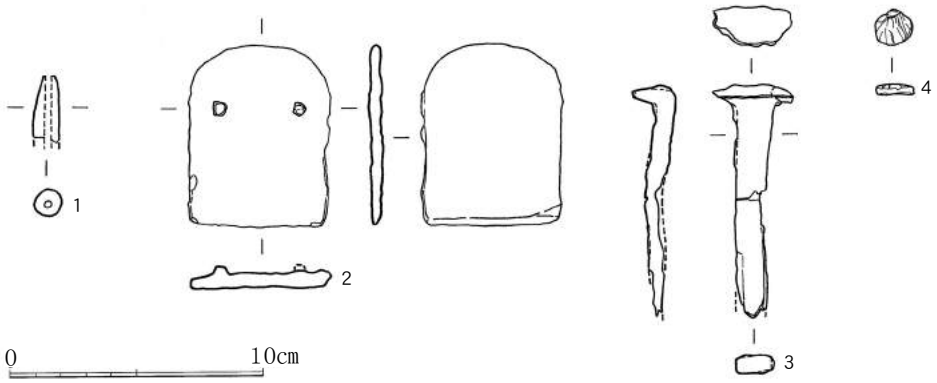
第49図　溝Ｓ02、土坑Ｓ03・Ｓ06実測図（縮尺：１／40）

01とほぼ同じなので、水田Ｓ01と関連する溝の可能性が高い。

４．土坑Ｓ03

１）遺構（第49図、図版第21－４）

水田Ｓ01によって東側部分の約半分が切られている。もともとは円形ないしは楕円形の土坑であったと思われる。南北1.4ｍを測り、深さ20㎝弱である。この土坑は、一方で揚水施設Ｓ04を切っている。明治時代の水田Ｓ01によって切られ、同じく明治時代の揚水施設Ｓ04を切っているので、水田Ｓ01と揚水施設Ｓ04とほぼ同時期の明治時代の遺構と思われる。水田Ｓ01は何度も耕作で掘り返されるので、水田Ｓ01が存在している時期で、揚水施設Ｓ04設置以降の時期となろう。



第 50 図　水田Ｓ 01、土坑Ｓ 03 出土遺物実測図（縮尺：１／３）

２）**出土遺物**（第 50 図、図版第 31）

〔特殊品〕第 50 図４は、土製の泥面子。貝をモチーフとしている。

５．土坑Ｓ 06（第 49 図、図版第 21 － 5 ・ 6）

調査区の南半部で検出した、東西約 1.3 m、南北約 1.8 m、深さ 20 ㎝ほどの隅丸長方形の土坑である。長軸の方向が水田Ｓ 01 や溝Ｓ 02 の南北方向とほぼ平行しているので、水田Ｓ 01 や溝Ｓ 02 に関連する遺構の可能性が高く、明治時代と思われる。

第８節　考古学的まとめ

今回の工学部電気電子棟地点発掘調査では、予想もしなかった船入状遺構と考えられる遺構を検出したことが最大の成果と言えよう。それも上層に 17 世紀後半から 18 世紀にかけてと思われる石組み船入状遺構Ｓ 36 が、下層に 17 世紀前半から中頃と思われる素掘り船入状遺構Ｓ 41 が互いに少し離れてはいるものの、層位的に重複していたのである。

素掘り船入状遺構Ｓ 41 は、東側のごく一部を確認したのみであるが、出土遺物から 17 世紀前半から中頃の時期と推定された。調査区西壁の崩壊などにより、遺物の収集方法に若干の問題はあったものの、出土位置などを詳細に検討していくと、前述したようにこの素掘り船入状遺構Ｓ 41 は 17 世紀前半から中頃の時期に限定でき、石組み船入状遺構Ｓ 36 との層位的な関係、およびＳ 36 出土遺物との関係でも、その時期が妥当と考えられた。

この 17 世紀前半から中頃にかけての時期、現在の工学部付近は安宅島と呼ばれ、『徳島藩領国図屏風』や国文学研究資料館史料館所蔵『御山下画図』（寛永年間製作と推定）など、江戸時代初期の屏風・絵図には徳島藩の船置所が描かれている。これらの屏風や絵図には助任川から西に向かう水路が描かれている。この水路から南側に入るドッグ状の船着場を造っていたと推測すれば、素掘り船入状遺構Ｓ 41 はそれに該当する可能性が非常に高い。しかし、この公的な船置所は、17 世紀中ごろに福島安宅へ移される。

石組み船入状遺構Ｓ 36 は、その西側に緑泥片岩の石組み護岸を構築している。層位的に素掘り船入状遺構Ｓ 41 の上に設置され、17 世紀後半から 18 世紀の遺物が出土している。この時期には、すでに福島安宅に新船置所が建設されている。

いっぽう、17世紀中頃に旧安宅島は宅地化されていくことが個人蔵『阿波国徳島城之図』（1646年）の絵図で確認され、この地は民澤家の屋敷地となる。絵図には描かれていないものの、17世紀前半の旧安宅島の船置所施設などを宅地化以後も利用して、宅地内に船入を造り、私的な水運を行っていたのではないかと憶測せざるをえない。

その場合、屋敷地内に近くの助任川へ通じる水路があって、その水路が屋敷地東側の道路を分断していたことになる。そのあたりの屋敷地内の土地利用のあり方、武家屋敷の区画のあり方、道路のあり方などとも関連して、以上のような推測が可能なのかどうか、今後の検討課題である。

ただし、2004年度に埋蔵文化財調査室が発掘調査を行った新蔵遺跡（第2図）での知見では、隣接する屋敷地内を通過する水路も存在し、絵図には描かれないものもあることを確認している。そのようなことから考えると、常三島地域で最も敷地面積の広い民澤家に、屋敷地を通過する水路があり、船着場的なものが存在していたのでないかという推測は十分可能ではないかと思われる。

以上のような判断をとりあえずは下しているが、調査面積が狭く、ほとんど絵図などを念頭においた想像の域を出ない解釈ではある。本調査のあと、第16次調査の総合科学部3号館地点、第17次調査の工学部建設棟地点、さら第10・13次調査の工学部共通講義棟地点、第11次調査の工学部共同溝Ⅱ期地点の成果を今後合わせて、最終的な安宅島の船置所、および宅地化以降にも水路を造って、宅地内に船をいれていたということを考古学的に実証していきたい。

次に、発掘調査区内における土地利用に関してである。第1節の調査の概要の項目で述べたが、第1遺構面で検出された溝Ｓ19以南には、ほとんど遺構が見られなかった点が特筆される。発掘調査面積が狭いこともあり、断定はできないが、江戸時代初期の船置所があった時期も、少なくとも調査区地点には、構造物などは造られていなかったと判断される。

宅地化されて、民澤家の屋敷地になった時点でも、構造物は造られなかったようである。調査区は、民澤家の南端であり、推定される道路に極めて近い場所になる。これに関しても、前述した工学部共通講義棟・共同溝の発掘調査の成果とあわせて、考察を加えていかねばならないと思っている。特に、上述したように、民澤家は常三島では最も広い面積を有した屋敷地であるので、上級武士の屋敷地である新蔵地区などの発掘成果ともつき合わせて考えていく必要性がある。

なお、石組み船入状遺構Ｓ36の石組み部分に関しては、新電気電子棟渡り廊下の階段部分の位置を変更することが可能であったため、その部分のみ簡易に囲繞し、真砂土を入れて埋め戻して保存することにした。

そして、新電気電子棟の渡り廊下に、石組み船入状遺構Ｓ36の位置を廊下床面に青石（緑泥片岩）を埋め込んで表示すると共に、説明板を床に埋め込んだ（図版第32）。

説明版はタイトルを『常三島遺跡　船入状遺構』とし、石組み船入状遺構想像復元図とともに、

「2002年の発掘調査で、素掘り船入状遺構（17世紀前半）と石組み船入状遺構（17世紀後半～18世紀）とが重複して発見された。江戸時代の常三島の変遷を知る上で貴重な遺構であり、石組みは現地に保存されることになった。

工学部付近は安宅島と呼ばれ、徳島藩の船置所が1639年まで置かれていたが、以後福島へ移転する。素掘りは藩の船置所に関連する遺構、石組みは福島安宅へ移転した後、武家屋敷として宅地化されたが、前船置所の水路などを再利用した家臣の私的船置所として使用されていたと推定される。」

という文章を付した。この中で、船置所の移転年代を 1639 年と具体的な年代を示しているが、17 世紀中ごろとするより、時期的なイメージがつかみやすいということで、いくつかある移転年代説のうち、2002 年当時最も蓋然性が強いだろうと思われた 1639 年という年代を採用した。

国民共有の財産である埋蔵文化財の一部を後世の人々に残していくこと、遺構の位置を示し説明することは、歴史教育や埋蔵文化財保護、そして大学・社会における教育普及活動にも大いに意義のあるものである。今後も、常三島遺跡のみならず、江戸時代の遺跡である新蔵遺跡、弥生時代を中心とする複合遺跡である庄・蔵本遺跡の三つの徳島大学構内遺跡で、可能な限り遺跡を知ってもらうための解説板などを設置していきたいと思っている。

第３章　安宅の移転について

根　津　寿　夫（徳島市立徳島城博物館）

第１節　は　じ　め　に

徳島藩において、「安宅」とは水軍集団とその基地のことをいった。徳島の碩学高田豊輝氏の著した『阿波近世用語辞典』によれば、「安宅」の語源は淡路水軍の安宅氏によるという。

徳島藩の水軍[1]である安宅は、はじめは安宅島と呼ばれた常三島南東端に置かれていたが、江戸前期に福島東部に移転した。この移転年については複数の説が存在し明確ではなかったが、近年、坂東美哉氏[2]が沖洲の水主屋敷や安宅に関する考察のなかで、移転年代やその目的について整理を行い、一定の成果がみられる。しかし、水軍町の成立と変容を主題としているため、必ずしも当該問題を本格的に扱ったとはいえない。

本稿では、従来、分析の対象とされてこなかった徳島藩主蜂須賀家文書を中心に考察し、移転年の確定を行うとともに、その目的や意義について考える。

第２節　安宅移転年に関する諸説

まず、安宅の移転年について諸説を掲げる。

【寛永４年説】
「異本阿波志」上[3]
　「渭府雑記　安宅　　古安宅より寛永四卯年今の所へ引
　　沖の洲　其前より少し人家有けるとなり、安宅持・
　　郡持両様あり　　」

「異本阿波志」は地誌・軍記・和歌等を集成したもので、江戸後期に成立した。編者は不詳。これ以外に寛永４年（1627）説については、須藤茂樹氏[4]が「徳島藩の水軍の根拠地は、はじめ安宅島にあったが、寛永四年頃に現在の安宅に移され」たと支持している。

【寛永10年説】
「正保慶安明暦万治之間雑記」[5]
　「　　覚
　一蓬庵屋敷惣廻之壁破損仕候条、かけ直度候旨、
　　四ケ年以前雅楽様・大炊様京都御上被成候刻、得御意候処、
　　重而従江戸可被仰下之由被成御意候へとも、いまた何共
　　不被仰下候事

一只今迄舟置申所、川あさく罷成候条、六間屋と申
所へ引申度存候、舟道具入置候家を仕、ふな入なと
ほり申度存候事
（中略）
付札ニ在之
右ハ先年上使御国廻之刻仕上ル書付之跡書　三通　　」（下線、筆者）

進入路の川筋が浅くなったために、新しい船置所を吉野川に面した大岡六間屋に築造することが計画された。本史料の年代は「上使御国廻之刻」とあり、国廻り上使が派遣された寛永10年（1633）と考えられる。

本書の内容は、両国高・家中馬乗数・国本加子数・益田豊後の処分・谷休古書付（関ヶ原合戦時の蜂須賀家動向）・伏屋源兵衛覚書（同上）・岩屋御関船置所之覚・広田与右衛門の帰参・蜂須賀万之介（隆重）親類書等といった、17世紀中葉における藩政上の重要事項によって構成されている。成立時期は不詳であるが、原文書の忠実な写しであり内容は信用できる。

【寛永11年説】
「阿淡年表秘録」[6)]
「（寛永十一年）春
御願之上淡州由良御城須本
へ被移御普請被仰付、
安宅御船置場福嶋ノ東へ被
移　　」

「阿淡年表秘録」は、12代藩主斉昌の命を受けた中山茂純が嘉永４年（1851）に著した徳島藩の編年史。藩の年寄役所に保管されていた文書・記録や藩士や領民に下賜された文書類からつくられた編纂物。徳島藩政史研究にとって基礎史料であるが、これまで書誌的な考察はない。

【寛永16年説】
①「阿波志」巻之二　城府[7)]
「船署　安宅に在り、旧常三島に在り、寛永十六年此に
移す、縦百五十歩・横二百三十四歩、慶安元年十一月
中村美作宅焼く、延ひて此署に及び船六隻亡ず、二
年船一隻を造り至徳と名く、三年二隻を造る、曰く飛
鴎、曰く一言、又船蘆あり、沖洲に在り、寛永中士二
人之を掌る、三年五月始て憲令十四章を出す　　」

②「御代々御書御草案書抜　全」[8)]
「福島舟之置処之事

忠英公御代
寛永十六己卯年福島舟之置処絵図之事
被命之
　右者留書ニ有之「御国元へ草案」
　と有之帳之内、五月廿四日之日付ニ而
　長谷川越前へ被下候
　御書之内ニ著ハれ居候を右御文面斗
　全文其儘記置、如左
一福島舩之置処絵図之事、出来次第可被
　指下候　　」（下線、筆者）

③「阿陽忠功伝　巻之五」[9]

「　　安宅之事、附召舩・台所舩被為造事
以前ノ安宅、常三島ニ有、然ルニ寛永十六己卯年ノ頃ヨリ今
ノ安宅ト成ル、東西二百三拾四間・南北百五十間有ト云リ、寛
永十八辛巳年台所舩鷲尾丸ヲ造ラセラル、慶安元戊子年
十一月十四日夜中村美作宅ヨリ出火、沖洲浦飛火来リ、御舩
屋へ付テ召舩六艘焼失ス、慶安二己丑年至徳丸ヲ造ラセラ
ル、同三庚寅年飛鴎丸・一言丸ヲ造ラセ給フト云リ　　」

④「御山下画図」[10]（第 51・52 図）

寛永 16 年説を示す史料は、多数存在している。

まず、①「阿波志」は藩儒佐野山陰が編じ、文化 12 年（1815）に成立した藩撰の地誌。山陰が直接史料を採訪するとともに、村々の庄屋に情報を提出させ編纂した。安宅の移転に関する記述は、③の享保 17 年（1732）成立の「阿陽忠功伝」と類似しており、同書を典拠としている可能性がある。

つぎの②蜂須賀家文書「御代々御書御草案書抜　全」は、江戸前期から中期にかけての草案のダイジェスト版で、江戸中期以降に編集された史料。ここで注目されるのは、寛永 16 年（1639）に福島（のちの安宅）船置所の計画図作製が命じられたことである。つまり、同年は少なくとも計画段階であった訳である。これは、寛永十六年を示す史料を考察する上で、念頭に置かなければならない。

③「阿陽忠功伝」は、徳島藩士西岡峯久が延宝年間（1673 ～ 81）までの歴代藩主の事蹟や忠勇、諸役旧制、法令等を集め、享保 17 年（1732）に著した徳島藩の史書。藩命によってつくられたものではないが、「阿淡年表秘録」の編纂にも利用された貴重な史料である。安宅移転から約 100 年後の成立であり、移転年については「寛永十六己卯年ノ頃」と幅をもたせた表現をしている。

④「御山下画図」は、「（忠英様御代）御山下画図」等とともに作られた絵図である。「（忠英様御代）御山下画図」には、のちに安宅となる福島東部の地域に船置所が描かれておらず、「御舩置所、但御普請之様子、小絵図別ニ致進上候」と記された付け紙があるだけである。この小絵図が「御山下画図」であろう。

それらの絵図が収められた袋には以下の記述がある。

第 51 図　『御山下画図』（寛永 16 年〔1639〕、国文学研究資料館史料館蔵）
『徳島城下絵図』（徳島市立徳島城博物館、2000 年）より

「忠英様御代　　十二番
一御山下画図　　一枚
　　寛永年間之図、地切島・六間屋御船入等之事
　　右之写出来、御普請奉行へ御下ケ被　仰付有之事
寛永十六年安宅替ル時之図
一右同　　一枚
　　小画図一枚添、写御普請奉行へ御下ケ二相成候事
一右同　　一枚
　　小画図一枚添、年暦不相分候得共、右同断之
　　画図二候事
　古物御櫓より出候分、天保十四年三月
　御留書入被　仰付　　」（下線、筆者）

「御山下画図」は二枚存在しているため特定できないが、片方には「寛永十六年安宅替ル時之図」と記されており、これが寛永 16 年説の根拠である。２枚の「御山下画図」には安宅の地に船置所が描かれているが、同所の規模（東西 200 間・南北 130 間）と船の進入路が住吉島川から沖洲川に向けて斜めに

第 52 図　『忠英様御代御山下画図』（寛永年間〔推定〕、国文学研究資料館史料館蔵）
『徳島城下絵図』（徳島市立徳島城博物館、2000 年）より

貫通していることの２点は、のちに実現した安宅船置所と明確に異なる[11]。このことから寛永 16 年の年紀を持つ「御山下画図」は、安宅築造の計画段階を示すものとしてとらえられる。特に現在の安宅地域を中心に描いた絵図[12]では、船の進入路は「舩入堀川」と記されているが明らかに陸地である。以上から、寛永 16 年は船置所の計画図が作成された段階であったと考えられる。

【寛永 17 年説】

「国元指置写」[13]

「一寛永十七年城廻り之繕并舩置場堀さらへ申儀、就御
願上候、御老中三人より奉書、右文言左記之、但折紙
以上

登久嶋之城船置場之儀、川筋浅成、舟之
出入就不合得、新規被仕度之由承候、右之趣達
上聞候之処、如絵図可申付之旨被　仰出候、可被得
其意候、將又山上并下屋敷之家・多門櫓・塀門等
令破損之間修復有度由事、惣廻水除之
古石垣損候之故、洪水之砌、家中之屋敷江水入候
之間、繕度由事、下屋敷廻之堀埋候付而浚度由
之事、何茂示給之通、得其意候、以連々如元可被
申付候、恐々謹言
　寛永十七　庚辰
　　五月廿一日　　阿部対馬守　重次判
　　阿部豊後守　忠秋判
　　松平伊豆守　信綱判
　　松平阿波守殿　　」（下線、筆者）

「国元指置写」は、慶長17年（1612）以降に出された幕府からの法度書（キリシタン禁制・参勤時の献上品統制・酒造制限・登城時の随行侍数の制限）及び幕府老中の奉書（城普請関係の許可書）等から構成され、国元に保管された重要書類である。江戸中期までの内容であるため、成立はそれ以降である。

城郭等の修築にあたっては、大名家は絵図等を添付して幕府に申請し、老中奉書という形で許可がなされた。徳島藩水軍の基地を移転するのであれば、当然のごとく幕府からの許可が必要であっただろう。その意味からいえば、本史料は写しではあるが、安宅の移転年代を確定する基本史料といえる。

【寛永18年説】

①「御判物御証文之写」[14)]

「　　仕上ル御訴訟之事
一先年福嶋ニ罷有候、其節ハ家職隠
たき会船之加子致口過候処、寛永
拾八年ニ屋敷替被為　仰付、大岡之
原へ罷越、居屋敷共四町余御普請
被下、加子頭弐拾人として作り居申候
其外ハ何之すきわいも無御座候得ハ、慶安
四年より承応三年迄ニ加子役銀五百
七拾八匁八分御未進ニ罷成、何共迷惑仕候
事
一右弐拾人之内壱人者老足御役違、弐人者
去冬かつゑ死申候、残而拾七人として
御役仕、其上御城下にて御座候得ハ、御上下
之刻かこ不被召置、安宅嶋より急度之

御用□□ニ被召仕、御役前無御座候得とも
迷惑仕候処ニ右之御未進銀指上候得と
毎度御催促被為仰付候得共、右之仕合故
銀子指上申儀罷成不申事
一右之未進銀御納所候儀ハ、安宅嶋へ
五年之間加子四五人ほと定詰ニ被召仕
被下候ハゝ可参候、左様成義罷成不申候ハ
安宅嶋より江戸舩御上下之刻、他浦之加子
被召寄候ヲ大岡浦之かこ五人被召遣被下候ハゝ
其年之御役前又者御未進銀共御重納
可仕候、左様成儀も罷成不申候ハゝ半役ニ
被為仰付被下之百姓共、先々迄堪忍仕
御役等御勤可申と奉存候事
右之通被　仰付被下候ハゝ可参候、以上
承応四年三月十三日　名東郡之内大岡浦　彦左衛門（以下四名略）
新居小右衛門様
岡　平右衛門様
右本紙者豊前殿ニ有、是ハ写　　」

大岡浦の彦左衛門らが福島浦で加子として生活していたところ、寛永18年に藩から移住を命じられ大岡へ移転した。しかし、彼らの暮らし向きは厳しく、藩に対して保護を求めた願書である。移転の理由は、船置所の築造のためと考えられる。

「御判物御証文之写」は、安宅に対して発給された規定を集めたもので、享保11年（1726）成立。本史料は承応４年（1655）に提出されたものの写しで、移転年代に近く重要である。

②「(江戸御書御控)」[15]

「　　申上候訴訟之事
七十六家之者加子役取続迄御赦免、其上已来壱石□家ニ被下七十六石宛
当年より三ケ年被下
一寛永十八年ニ福嶋浦ニ居申者四十四家、
沖ノ須浦ニ居申四十四家、両浦八十八家
之者共、津田浦へ一所ニ引越候へと越前様
為御意下山清左衛門様より被為仰付候ニ付
両浦之者共奉存候ハ津田浦少々之所へ
数多之者共一所ニ引越候而ハ先々堪忍
仕義難成奉存候、乍恐下山清左衛門様迄
御訴訟申上候ハ両浦之者共一所に
津田浦へ引越候而ハ先々之義ハ不及

申上当分より堪忍難成奉存候間、沖ノ
州浦ニ居申者共何之所候ても見立申候間
面々見及候浦へ被為遣候之様ニと申上候へハ
面々申上所尤之義と御意被成、則
越前様右之趣被為仰上候へハ越前様
御意被為成候ハ両浦之者共之義
安宅御扶持人加子同前ニ急々御用立
申加子之義ニ候間、渭津遠キ所へハ被為
遣間敷候、何分津田浦へ堪忍仕候様ニ
被為仰付可被下旨、御意之旨御意
被為成候ニ付難有奉存候、両浦之者共
一所ニ津田浦へ引越候所ニ寛永十九年ニ
越前様御仕置御替リ被為成候ニ付追而
御訴訟可申上様無御座居申所ニ百姓共
次第ニかぢけ其後慶安弐年之御改ニ
棟数十弐家たいてん仕候、其上相残
者共かぢけ申躰御覧被為成、御役之義
半御役銀ニ被為仰付被下候事、
（中略）
寛文八年申二月廿二日　津田浦庄や　六郎左衛門
五人与　千右衛門（以下四名略）
前田伊兵衛様御下代
姫田茂兵衛殿　」（下線、筆者）

①の大岡浦の住民から出された願書と同じく、寛永18年に福島浦の住民44家と沖洲浦の住民44家が津田浦へ移住を命じられたが、厳しい生活のため藩に対して保護を求めた願書である。移転の理由は、安宅船置所の築造と沖洲の水主屋敷の造成であろう。

「(江戸御書御控)」は、江戸にいた藩主からの指示・命令を集成したもの。本史料は寛文８年（1668）のもので、移転年代に比較的近く重要である。

【寛永18・19年説】

「安宅御船蔵記録」[16)]

「一寛永十八・十九右両年ニ只今ノ安宅江引越申候」

「安宅御船蔵記録」は安宅の船頭や水主の人数、構造物から船額に至るまでの詳細な記録であり、その内容から安宅関係者が本史料の作成に関わったことが類推される。ただし、成立は文久元年（1861）と安宅移転年とは大きな隔たりがある。

第３節　安宅の移転年について

１．移転年について

これまでみてきたとおり、安宅の移転年については、寛永４年、同10年、同11年、同16年、同17年、同18年、同18・19年と、実に７種もの説が存在したことが分かった（第３表）。

このなかで注目すべきは、寛永17年の老中奉書の写しであろう。それ以前の年紀を持つ記録や絵図は、おおむね移転・築造の計画にともなうものである。これまでみてきた史料を整理し、以下のように移転年について結論付けることができる。

安宅の移転は寛永10年頃から計画され、当初は吉野川沿いの大岡六間屋が候補地であった。その後、同16年には各種の絵図が作成され移転計画が本格化し、候補地も福島浦（のちの安宅）に絞られた。同年から翌17年にかけて幕府に申請し、寛永17年５月21日には新船置所築造の許可を受けた。翌18年には、船置所の移転先である福島浦や水主屋敷の造成が計画された沖洲浦の住民に立ち退きが命じられ、速やかに工事が始まったと思われる。工事がいつ完了し、水軍の移転が実施されたか具体的には不明であるが、寛永18年から19年にかけての時期に安宅は移転したと考えられる。

２．なぜ諸説が生まれたのか

それでは、なぜこれほどまでに多くの説が生まれたのであろうか。

諸説で注意しなければならないのは、その典拠の多くが編纂史料であるということ。「阿淡年表秘録」の示す寛永11年の根拠は不明であるが、数多くみられる寛永16年の根拠は明らかな年紀を持つ「御山下画図」であったろう。同図が計画図であったことを考慮せずに、年代のみを信用し編纂してしまった可能性がある。藩撰の地誌として名高い「阿波志」も、この轍を踏んだのである。安宅の移転年に関するこうした問題は、歴史学の基本である史料批判の尊さを指摘しているのである。

安宅船置所は、東西230間・南北150間という広大なスペースを有すとともに藩の重要施設であったため、計画の策定、幕府への申請、そして許可、着工と水軍集団の移転といった手続きと作業が必要であった。そのために、実に10年近い年月が費やされたのである。この検討期間を含む移転の長期化が諸説を生んだ、もうひとつの理由であろう。

第３表　安宅移転年比較表

移転年	典　拠	内容（成立年代・史料の性質）
寛永４年	異本阿波志	江戸後期成立　編纂史料
寛永10年	正保慶安明暦万治之間雑記	江戸中期成立　大岡六間屋への移転計画
寛永11年	阿淡年表秘録	嘉永４年（1851）成立　編纂史料
寛永16年	御山下画図	寛永16年（1639）　安宅船置所の築造計画図
	阿陽忠功伝	享保17年（1732）　年代記述に幅をもたす　編纂史料
	福島舟之置処之事	江戸中・後期成立　作図命令（＝計画段階）
	阿波志	文化12年（1815）成立　編纂史料（阿陽忠功伝に類似）
寛永17年	国元指置写	江戸中期以降成立　幕府の移転許可
寛永18年	申上候訴訟之事	寛文８年（1668）　原住民の移動命令（船置所築造・水主屋敷造成）
	御判物御証文之写	享保11年（1726）　原住民の移動命令（船置所築造）
寛永18・19年	安宅御船蔵記録	文久元年（1861）　安宅に関する記録集成　編纂史料

第４節　安宅移転の理由とその意義

１．移転の理由

徳島藩水軍が常三島南東部の安宅島から移転しなければならなかった直接の理由は、同所への進入路の川筋が土砂の堆積により航行に支障をきたすようになったからに他ならない。これは、移転の許可書である寛永 17 年の幕府老中奉書写しに「川筋浅成、舟之出入就不合得」とあることから確認できる。水軍にとって重要なこの問題は、寛永 10 年の「正保慶安明暦万治之間雑記」の覚書でも「川あさく罷成」とあり、かなり以前から顕在化していたことが窺える。

２．安宅移転の意義

安宅島からの移転は確かにその進入路の問題をきっかけとして実施されたが、それだけに留まっていては安宅移転を矮小化するとともに、その本質を見失うことになる。

安宅島から船置所が移転すると、藩にとってどのようなメリットがあったか。二代藩主蜂須賀忠英の書状[17] を掲げる。

「　一筆令申候
一安宅嶋、六間屋へ引
可申候、左候ハゝ其跡
侍屋敷何程出来
可申候哉、絵図仕
可指越候、其上を以
御老中へ可申入候
一神田左京儀、去年・
当年両所務之儀
候之条、重而手前
可令迷惑候、自余
々引別ニも不成儀、
候ハゝ令談合、其身ハ
指免役人迄可指
下候、為其如此候也
九月廿一日　忠英（花押）
尚々吉岡勘兵衛
義、次大夫ニ申付候
用所可被申付候、
主ニも其旨申
聞せ候
かしく
長谷川越前守殿　」（下線、筆者）

安宅の移転先が大岡六間屋とされた頃、すなわち寛永10年前後と思われるが、安宅島を六間屋に移動すれば、その跡地に武家屋敷がどれほど設けられようかと、忠英の期待が行間から伝わってくる書状である。徳島城の北東にあたる安宅島は城に近く、武家地には適当な場所であっただろう[18]。

安宅の移転は、船置所だけでなく、その周囲に存在した船頭や水主の屋敷等も合わせて移動することを意味する。すなわち、水軍エリアの移動が、この安宅の移動であったのだ。必然的に、水軍という組織にも影響を与えた[19]。しかし、安宅移転の意義は、それだけに留まらない。以下、この問題にふれておく。

まず、寛永年間後期の阿波国内の状況は、寛永15年（1638）の一国一城令によって阿波九城が撤廃され、軍事体制が完全に払拭されて統治機構整備の段階に移行する。寛永17年（1640）には13人の郡奉行宛の覚書が発給され地方支配機構が整備され[20]、寛永後期から正保期にかけては国境や川口の番所が設置され交通・流通制度が整えられたのである[21]。

こうした国内の動きと連動しながら、城下町徳島においても再編が進行する[22]。寛永15年の阿波九城の完全な廃棄によって、城詰めの家臣らが徳島城下に集まることになり、武家地は払底状態であった。そのため当該期における城下町徳島の課題は武家屋敷の創出であり、これを実現するために既存の武家地･町人地を整理･再編するとともに城下町域自体を拡大していった。具体的には、①従来の村方であった富田地区を武家地・足軽地とするために、区画整理を含めて大規模造成し、②城下西部の佐古地区を町屋として取り立てるとともに足軽町として整備し、そしてこれまでみてきたが、③船置所の移転にともない安宅・沖洲地区を水軍エリアとして確立したのだった。

この城下町の改編を通じて、武家地をはじめとして町人地や足軽町、そして水軍エリアが身分的秩序のもとに整然と配置され、近世的城下町として機能していくのだった。

以上のように安宅の移転は、国内の支配体制の改編と連動し、城下町徳島が「完全な城下町」として機能する政策的な事業として評価されるのである。

第５節　お　わ　り　に

諸史料を逐一掲げながら従来不明確であった安宅の移転年度を明らかにするとともに、諸説が生まれた理由や移転の目的、そしてその意義について述べてきた。

安宅の移転が、城下町徳島の近世化にとって重要な役割を果たしたことを指摘したが、そのことは後世に各種の史料や記録を生む前提になったのである。

なお、本稿では安宅島跡地が武家屋敷としていかに利用されていったのか、ふれることができなかった。史料的制約があり現状としては言及できなかったが、移転の重要さを強調するだけでは論理的に公平ではない。今後、同地の土地利用を歴史的に把握してみたい。

註

１）徳島藩の水軍については、「森水軍」「阿波水軍」等の名称が使われる。「森水軍」は本来的には森家の水軍であるにもかかわらず、徳島藩水軍と誤って認識されることが多い。また、「阿波水軍」は江戸時代以前における阿波海域の水軍を呼ぶことがあり、多義的であるので、本稿では使用せず「徳島藩水軍」を用いる。

２）坂東美哉「沖洲御水主屋敷の成立とその変容過程」（鳴門教育大学地理学教室、『地域研究（修士論文・卒

業論文集)』第15巻、2000年)。木原克司・坂東美哉「徳島藩城下町の特殊地域に関する一考察―水軍の根拠地，安宅・沖洲を事例に―」(『鳴門教育大学研究紀要』第17巻、2000年)。

３）徳島県立図書館蔵。呉郷文庫本。

４)「海の大名行列―徳島藩を事例に―」(『交通史研究』43号、1999年)。

５）国文学研究資料館蔵「蜂須賀家文書」№.412－２。以下、「蜂須賀家文書」とのみ記す。

６)『徳島縣史料』第１巻（徳島県史編さん委員会、1964年)。

７)『阿波誌』(郷土誌刊行会、1932年）参照。

８)「蜂須賀家文書」№.450。

９）徳島市立徳島城博物館蔵。

10)「蜂須賀家文書」№.1227。『徳島城下絵図図録』(徳島市立徳島城博物館、2000年）参照。

11）天和３年（1683)「阿波国渭津城下之図」によれば、船置場の規模は東西230間・南北150間、船の進入路は沖洲川口から西へ進む一方向だけである。

12）前出『徳島城下絵図図録』８頁。

13)「蜂須賀家文書」№.294。

14)「蜂須賀家文書」№.207。

15)「蜂須賀家文書」№.261－２。

16）国文学研究資料館蔵「徴古雑掌続編　阿波　十二中」。

17)「蜂須賀家文書」№.907－16。

18) 武家屋敷として安宅島跡地がいつから利用されたか、成立書等の文献では現状としては不明である。正保３年（1646）の「阿波国徳島城之図」では整然とした武家屋敷化しているが、同図は計画図的要素があり現状をどれほど反映したものか不明である。今後、こうした課題が考古学的成果によって克服されることを期待している。

19）水軍集団統治の法整備や組織化の進展。拙稿「徳島藩水軍の再編―武家集団における秩序の形成―」(『高橋啓先生退官記念論集　地域社会史への試み』、同編集委員会、2004年)。

20）石躍胤央「藩制の成立と構造―阿波藩を素材にして―」(『藩制成立期の研究』、1998年)。

21）中野正司「徳島藩における番所の成立について」(『鳴門史学』第２集、1988年)。

22）拙稿「城下町徳島の再編について―下屋敷を中心に―」(『史窓』24号、徳島地方史研究会、1994年)。拙稿「文献史料からみた徳島城下町と助任・前川地区」(『南前川町一丁目遺跡』、徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター、2002年)。

第４章　常三島遺跡工学部電気電子棟地点における花粉分析

国立大学法人奈良教育大学　金　原　正　明
古環境研究所　金　原　正　子

第１節　は　じ　め　に

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は、分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壌中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

常三島遺跡工学部電気電子棟地点では、近代以降の水田遺構、近世の船入状遺構の堆積物の花粉分析を行い、植生と環境の復元を試みた。

第２節　試 料 に つ い て

試料は、水田Ｓ 01（明治時代以降）より採取された試料№.１（灰褐色砂質シルト）、試料№.２（灰褐色砂質シルト）、試料№.３（灰褐色砂質シルト）の３点と、石組み船入状遺構Ｓ 36（17 世紀後半から 18 世紀）の最下層より採取された試料（灰褐色シルト粘土［草本植物含む］１点、素掘り船入状遺構Ｓ 41（17 世紀前半）の最下層より採取された試料（灰褐色砂質シルト［漆器・木器片含む］）の１点で、以上計５点である。

第３節　方　　法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村 (1973) を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え 15 分間湯煎する。
２）水洗した後、0.5 ㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
３）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。
４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。
５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500 rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるとい

う操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

第４節　結　　果

１．分類群

出現した分類群は、樹木花粉28、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉23、シダ植物胞子２形態の計55である。これらの学名と和名および粒数を第４表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第53図に示す。主要な分類群は図版第33に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、２分類群が検出された。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ツバキ属、カキ属、モクセイ科、ツツジ科、ニワトコ属－ガマズミ属、タニウツギ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ユリ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ソラマメ属、ササゲ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵

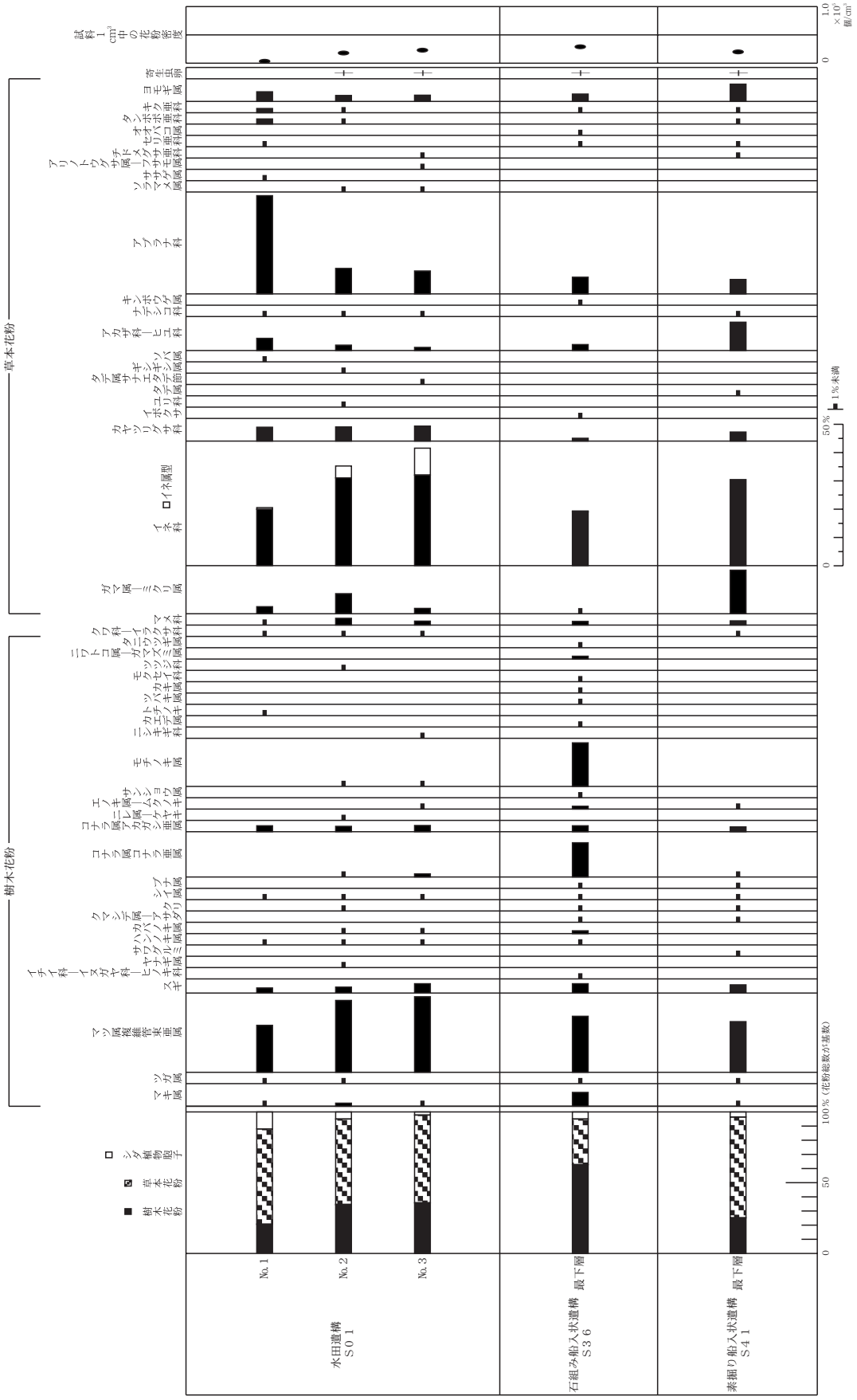
以下にこれらの特徴を示す。

・回虫　*Ascaris*（*lumbricoides*）

回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられ、卵には受精卵と不受精卵がある。遺跡の堆積物の分析では、堆積年数や薬品処理のため、受精卵と不受精卵の区別は

第４表　常三島遺跡工学部電気電子棟地点における花粉分析結果表

分類群		水田遺構　S01			石組み船入状遺構　S36	素掘り船入状遺構　S41
学名	和名	№.1	№.2	№.3	最下層	最下層
Arboreal pollen	樹木花粉					
Podocarpus	マキ属	3	4	1	19	2
Tsuga	ツガ属	1	3		1	1
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	54	96	96	77	73
Cryptomeria japonica	スギ	6	8	12	13	12
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科				2	
Salix	ヤナギ属		2			
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ					1
Alnus	ハンノキ属	2	1	2	3	
Betula	カバノキ属		1	1	4	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ				1	1
Castanea crenata	クリ		1		3	1
Castanopsis	シイ属	1	3	1	1	2
Fagus	ブナ属				1	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属		2	4	47	1
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	7	7	8	8	7
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ		1			
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属－ムクノキ			1	4	3
Zanthoxylum	サンショウ属				1	
Ilex	モチノキ属		3	2	60	
Celastraceae	ニシキギ科			1		
Acer	カエデ属				1	
Aesculus turbinata	トチノキ	1				
Camellia	ツバキ属				1	
Diospyros	カキ属				1	
Oleaceae	モクセイ科				1	
Ericaceae	ツツジ科		1			
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属－ガマズミ属				4	
Weigela	タニウツギ属				1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	2	2	1		1
Leguminosae	マメ科	2	9	5	5	6
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Typha-Sparganium	ガマ属－ミクリ属	8	27	7	3	63
Gramineae	イネ科	65	117	115	74	124
Oryza type	イネ属型	2	16	34	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	16	19	19	4	13
Aneilema keisak	イボクサ				3	
Liliaceae	ユリ科		1			
Polygonum	タデ属					1
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節			1		
Rumex	ギシギシ属		1			
Fagopyrum	ソバ属	1				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	14	7	4	8	41
Caryophyllaceae	ナデシコ科	3	1	3		1
Ranunculus	キンポウゲ属				1	
Cruciferae	アブラナ科	113	34	29	23	21
Vicia	ソラマメ属		1	2		
Vigna	ササゲ属	2				
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属－フサモ属			1		
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科			1		2
Apioideae	セリ亜科	1			1	2
Plantago	オオバコ属				1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	6	1			1
Asteroideae	キク亜科	5	1		1	2
Artemisia	ヨモギ属	11	8	8	10	25
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	16	5	2	7	7
Trilate type spore	三条溝胞子	28	14	6	13	8
Arboreal pollen	樹木花粉	75	133	129	254	105
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	4	11	6	5	7
Nonarboreal pollen	草本花粉	247	234	224	130	296
Total pollen	花粉総数	326	378	359	389	408
	試料１㎤中の花粉密度	3.4 $\times 10^3$	1.8 $\times 10^4$	2.3 $\times 10^4$	2.9 $\times 10^4$	2.0 $\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	9	14	6	14	7
Fern spore	シダ植物胞子	44	19	8	20	15
Helminth eggs	寄生虫卵					
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵		7	13	2	2
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵			1		1
Total	計	0	7	14	2	3
	試料１㎤中の寄生虫卵密度	0.0	5.6 $\times 10$	1.4 $\times 10^2$	3.2 $\times 10$	3.6 $\times 10$
	明らかな消化残渣	(－)	(－)	(－)	(－)	(－)



第 53 図　常三島遺跡工学部電気電子棟地点における花粉ダイアグラム

不明瞭である。比較的大きな虫卵で、およそ80×60μmあり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

・鞭虫　*Trichuris*（*trichiura*）

鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは、50×30μmでレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、３～６週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

２．花粉群集の特徴

１）水田Ｓ01（明治時代以降）（№１、№２、№３）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科とアブラナ科が優占し、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属、ガマ属－ミクリ属などが伴われる。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属が優占し、スギ、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。№１ではアブラナ科の出現率が高く、ソバ属、ササゲ属が出現する。№２と№３では、ソラマメが出現し、回虫卵および鞭虫卵がわずかに検出される。

２）石組み船入状遺構Ｓ36（17世紀後半から18世紀）最下層

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。草本花粉ではイネ科を主に、アブラナ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科などが伴われる。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属が優占するが、モチノキ属、コナラ属コナラ亜属、マキ属などが比較的高率に出現する。回虫卵がわずかに検出される。

３）素掘り船入状遺構Ｓ41（17世紀前半）最下層

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科が優占し、次いでガマ属－ミクリ属が多く、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが伴われる。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属が多く、スギ、コナラ属アカガシ亜属などが伴われる。回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出された。

第５節　考 察 と ま と め

１．Ｓ01水田遺構

出現した草本花粉はイネ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属の人里植物や耕地雑草の性格を持つもので占められ、栽培種を多く含むアブラナ科やイネ科が高率であり、明らかな栽培植物のソバ属、ササゲ属、ソラマメの花粉も検出される。水田と畑地が示唆され、畦の痕跡は、ササゲ属（アズキ、リョクトウ、ササゲなど）とソラマメの豆類が植えられていたとみなされる。回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出され、これらの寄生虫は中間宿主を必要とせず、生水や生野菜などから感染し蔓延する。ここでは人糞施肥によるものと考えられる。

近隣の森林は、マツ属複維管束亜属が優占することから、アカマツの二次林または植栽林が分布し、スギやコナラ属アカガシ亜属（カシ類）も多少生育していたと考えられる。

２．石組み船入状遺構Ｓ 36 最下層および素掘り船入状遺構Ｓ 41 最下層

いずれもマツ属複維管束亜属の樹木、イネ科、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属の草本は、共通して優勢であり、17 世紀から 18 世紀にかけて、周辺はアカマツの二次林または植栽林が主要に分布し、イネ科を主にアブラナ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属の人里植物や耕地雑草の性格を持つ草本が分布していた。

石組み船入状遺構Ｓ 36（17 世紀後半から 18 世紀）最下層と素掘り船入状遺構Ｓ 41（17 世紀前半）最下層の花粉群集の異なりは、前者でコナラ属コナラ亜属とモチノキ属の樹木が多く、後者でガマ属－ミクリ属が多いことである。石組み船入状遺構Ｓ 36（17 世紀後半から 18 世紀）最下層では、近隣にコナラ属コナラ亜属（コナラやクヌギなど）とモチノキ属（クロガネモチ、ナナミノキ、ソヨゴなど）の広葉樹が生育していたとみなされる。石組み船入状遺構Ｓ 36（17 世紀後半から 18 世紀）最下層ではイネ科のみの生育であり、素掘り船入状遺構Ｓ 41（17 世紀前半）最下層ではイネ科とガマ属－ミクリ属が主となる。遺構からみて、イネ科は水生植物のヨシの生育が考えられ、素掘り船入状遺構Ｓ 41（17 世紀前半）最下層ではヨシに加えてガマ属ないしミクリ属が生育する。ヨシは耐塩性でもあるが、ガマ属やミクリ属は耐塩性が強くない。このことから、石組み船入状遺構Ｓ 36（17 世紀後半から 18 世紀）最下層は塩分のある汽水の環境が考えられ、ガマ属－ミクリ属の生育する素掘り船入状遺構Ｓ 41（17 世紀前半）最下層は淡水の環境が考えられる。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82 － 110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248 － 262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

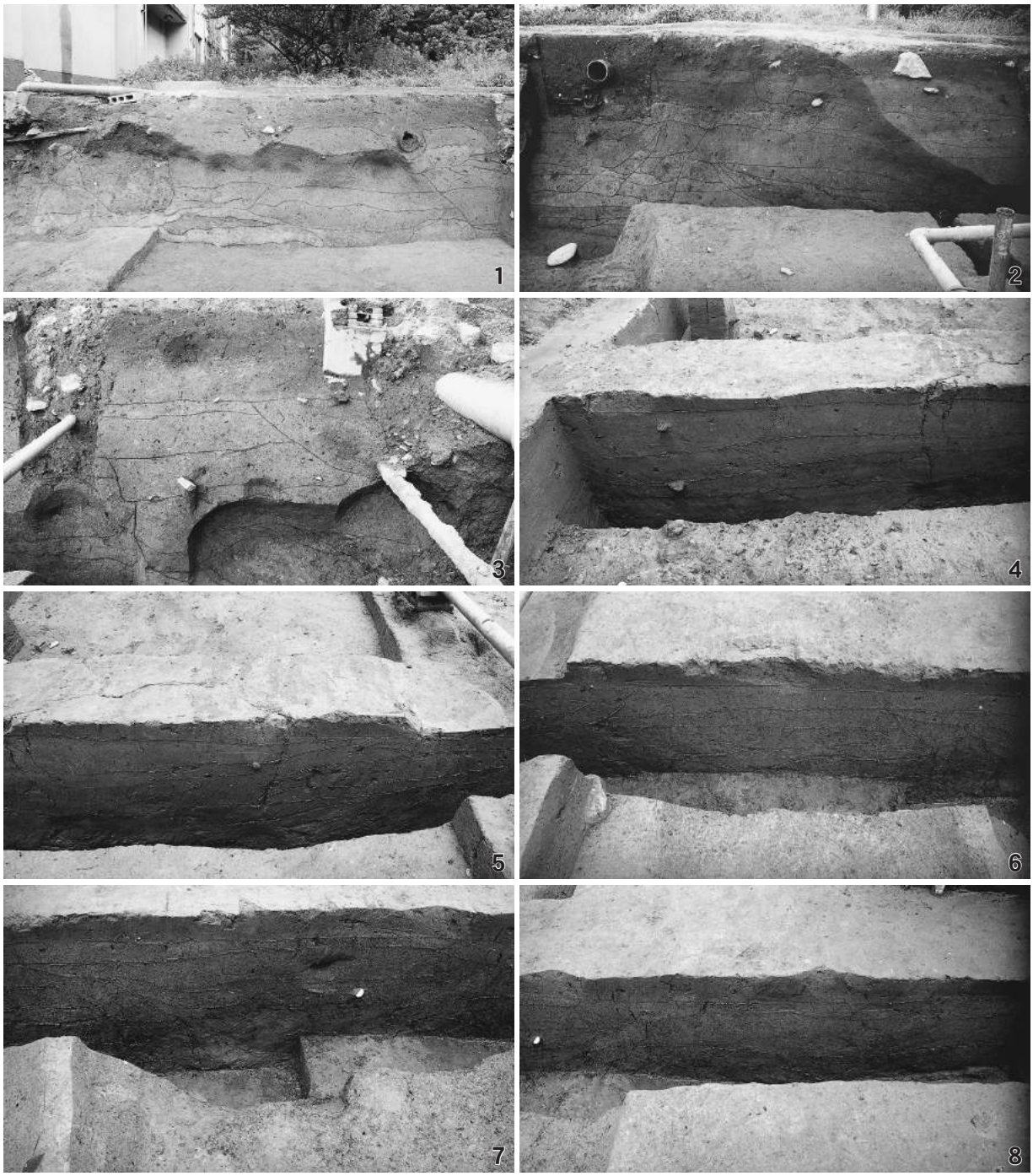
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として . 第四紀研究，13，p.187 － 193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21 － 30.

図　　版

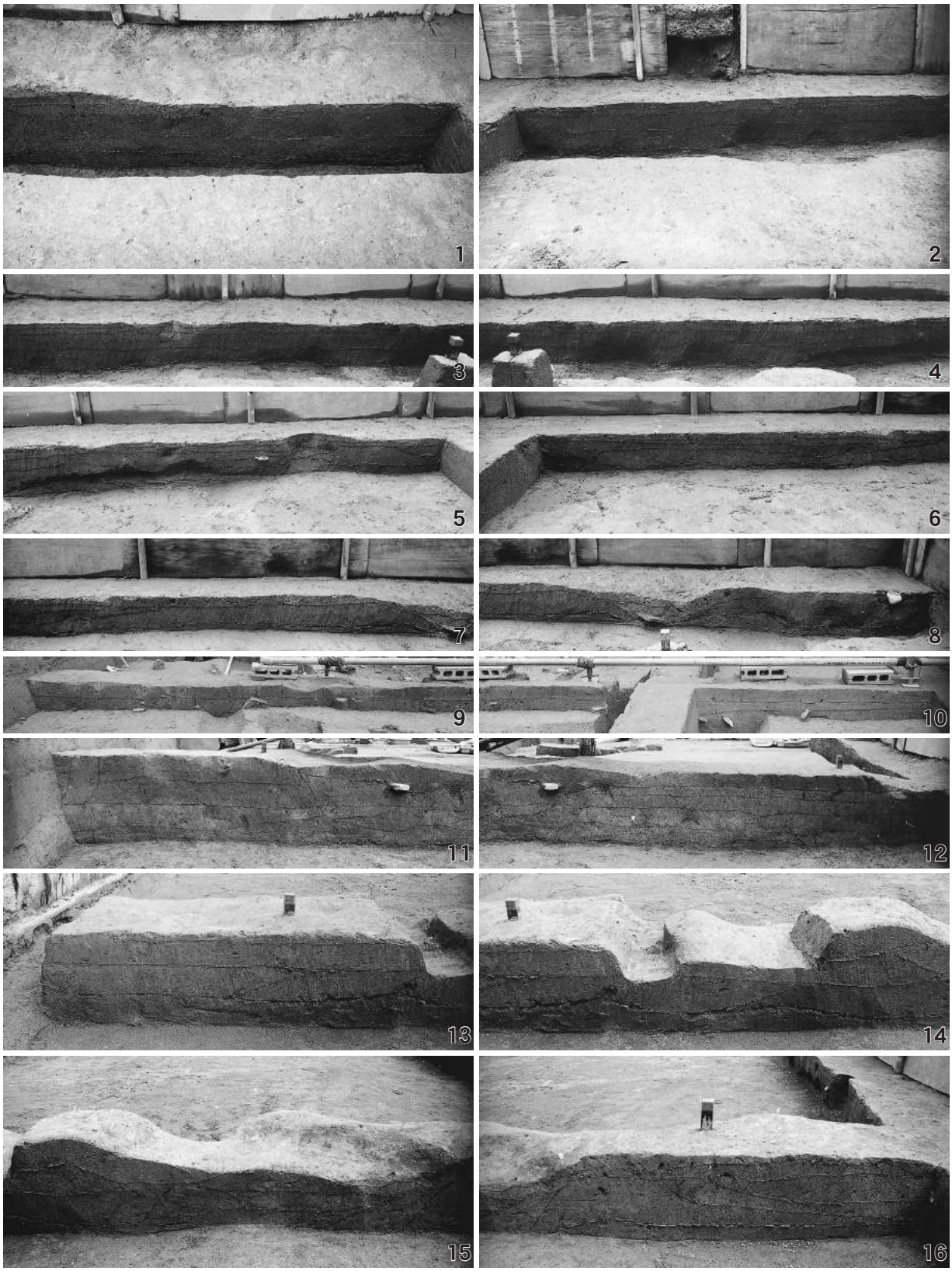
常三島遺跡航空写真（南より）

図版第２



調査区西壁断面・調査区東壁断面(1)

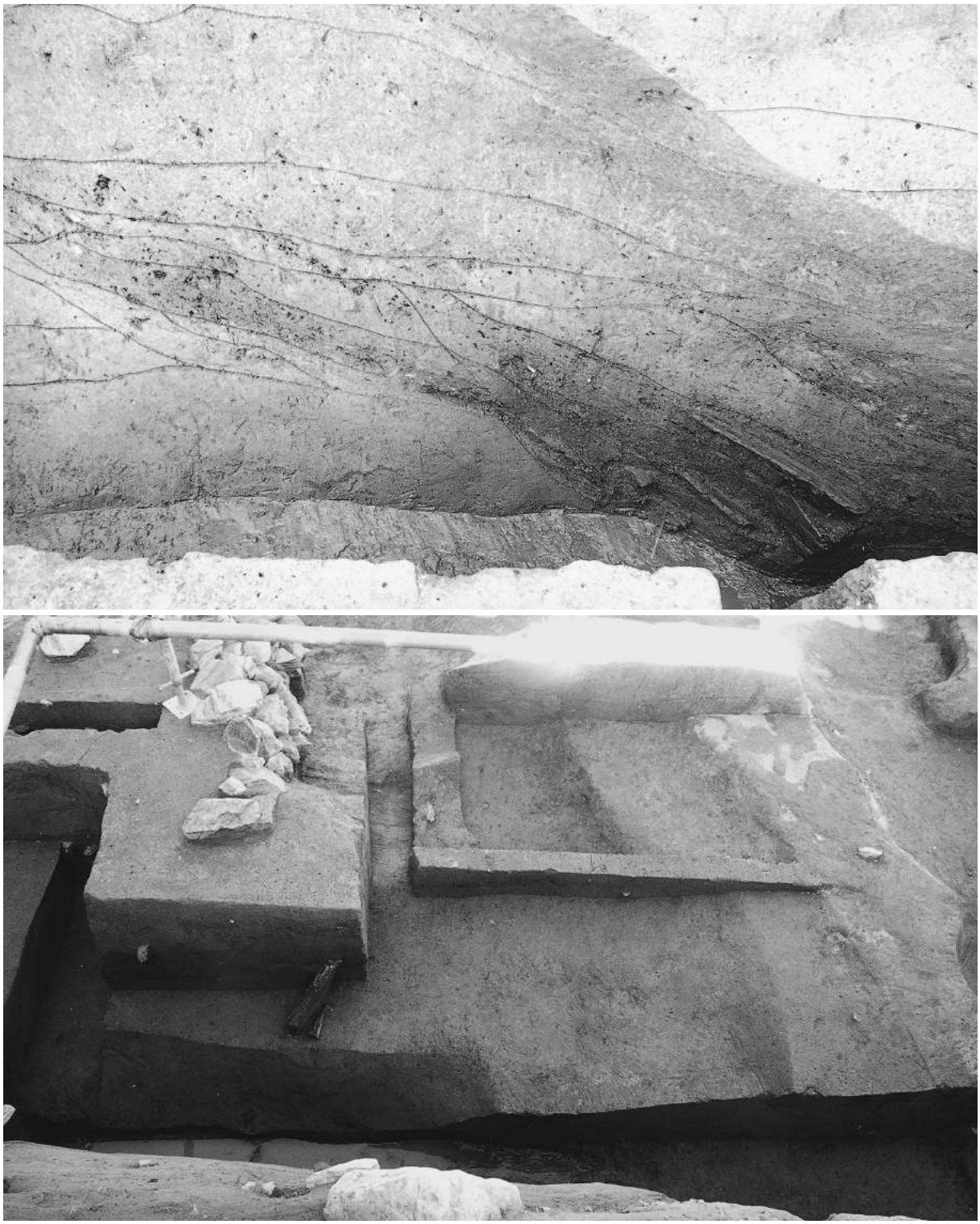
１～３．西壁断面（東より）　４～８．東壁断面（西より）



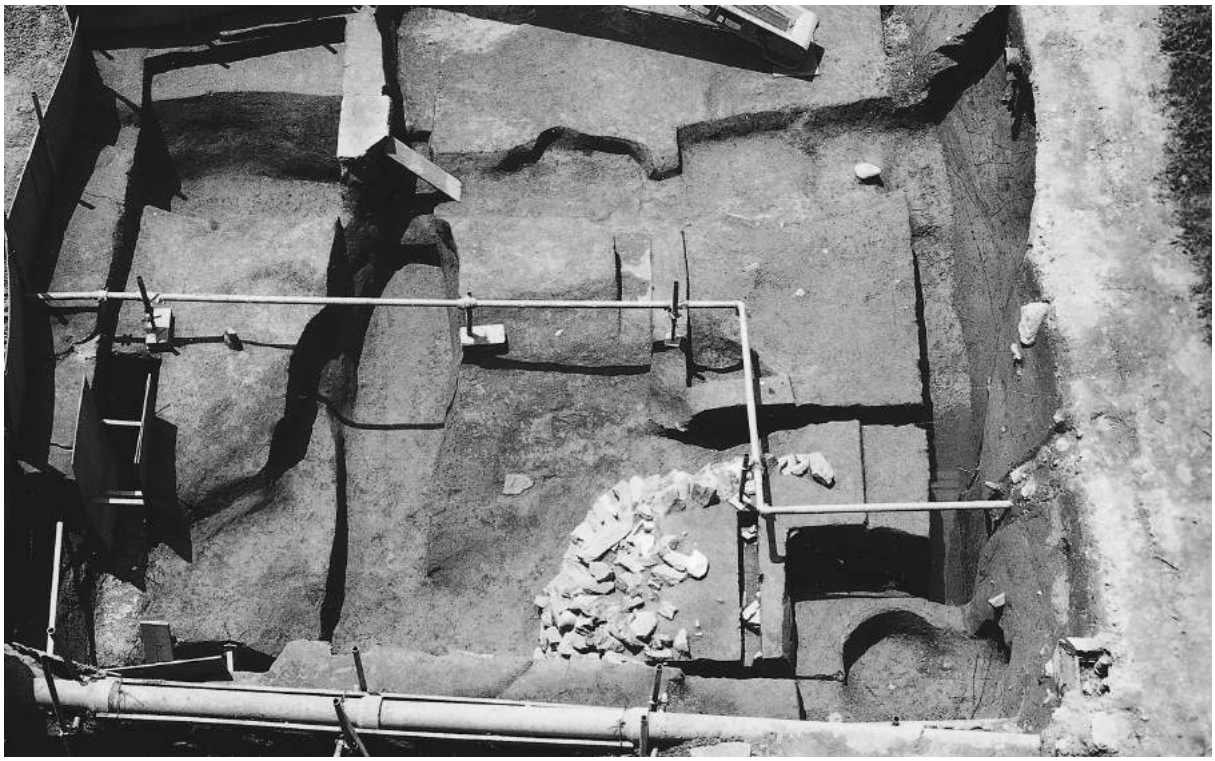
調査区東壁断面(2)・調査区東西断面

１～８．東壁断面（西より）　９・10．Ｂ区東西断面（水道管下）（南より）
11・12．Ｄライン断面（南より）　13・14．Ｅライン断面（南より）
15・16．Ｆライン断面（南より）

図版第４



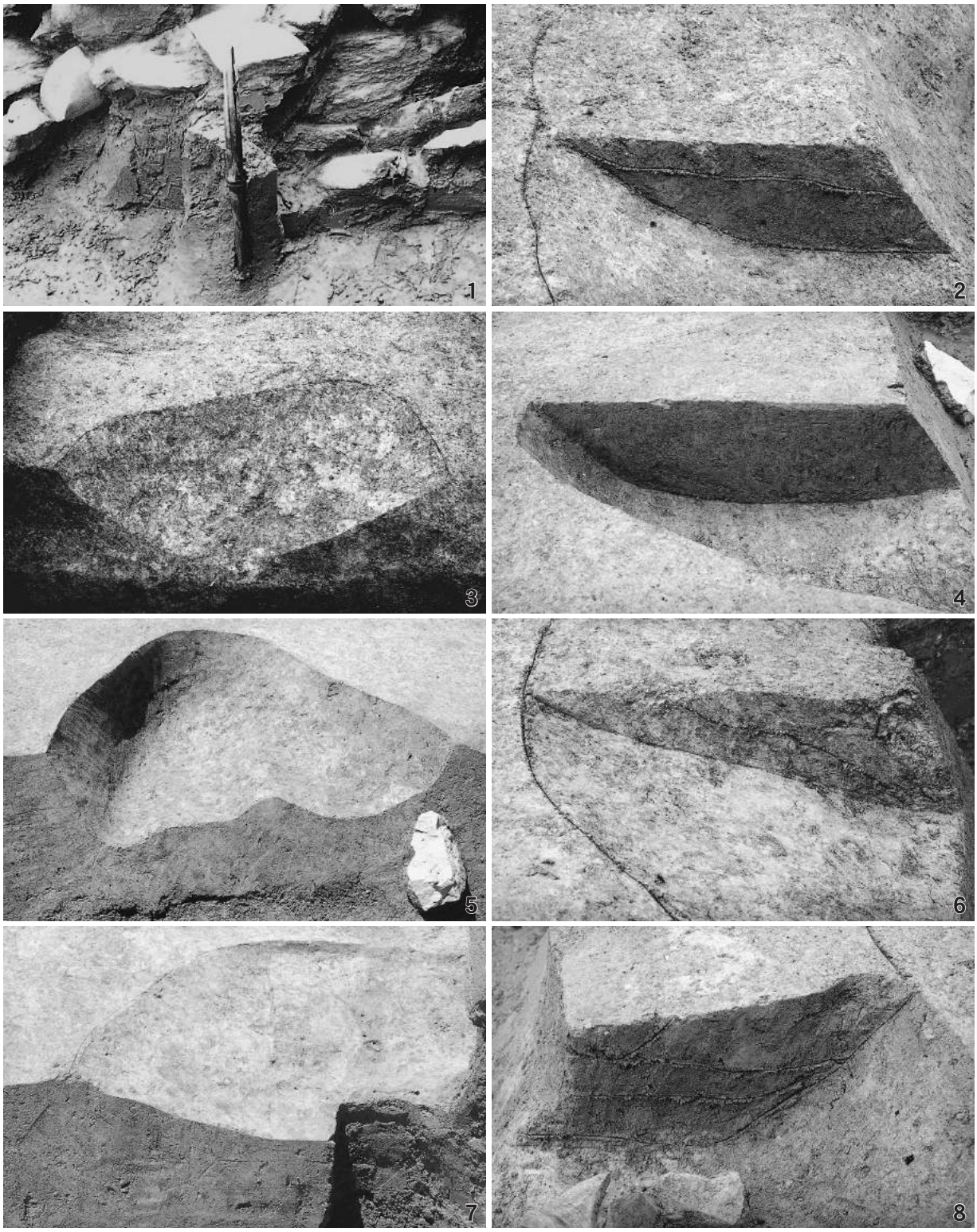
江戸時代第３遺構面　素掘り船入状遺構Ｓ 41
上．断面（東より）　下．完掘（西より）



江戸時代第 2 遺構面(1)　石組み船入状遺構 S 36
上．完掘(北より)　下．石組み部(東より)

図版第６

江戸時代第２遺構面(2)　石組み船入状遺構Ｓ 36
上．石組み部（南東より）　下．同（東より）



江戸時代第２遺構面(3)　石組み船入状遺構Ｓ 36、土坑Ｓ 37 ～ Ｓ 40

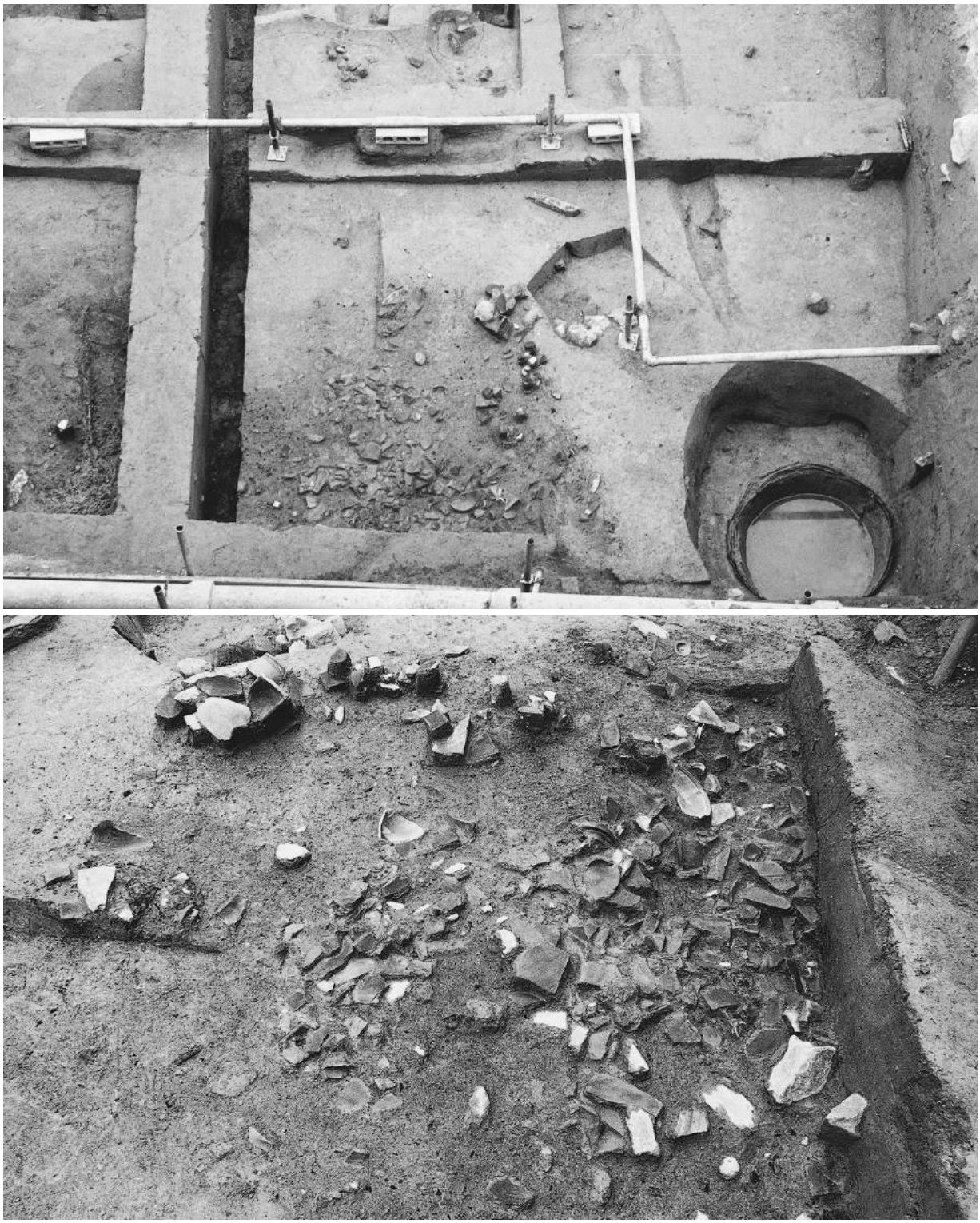
1. 石組み船入状遺構Ｓ 36 竹杭（東より）　2. 土坑Ｓ 37 断面（西より）
3. 同完掘（南より）　4. 土坑Ｓ 38 断面（東より）　5. 同完掘（北より）
6. 土坑Ｓ 39 断面（東より）　7. 同完掘（北より）　8. 土坑Ｓ 40 断面（東より）

図版第８

江戸時代第１遺構面(1)　土坑Ｓ 16

上．完掘（南側に溝Ｓ 19）（北より）

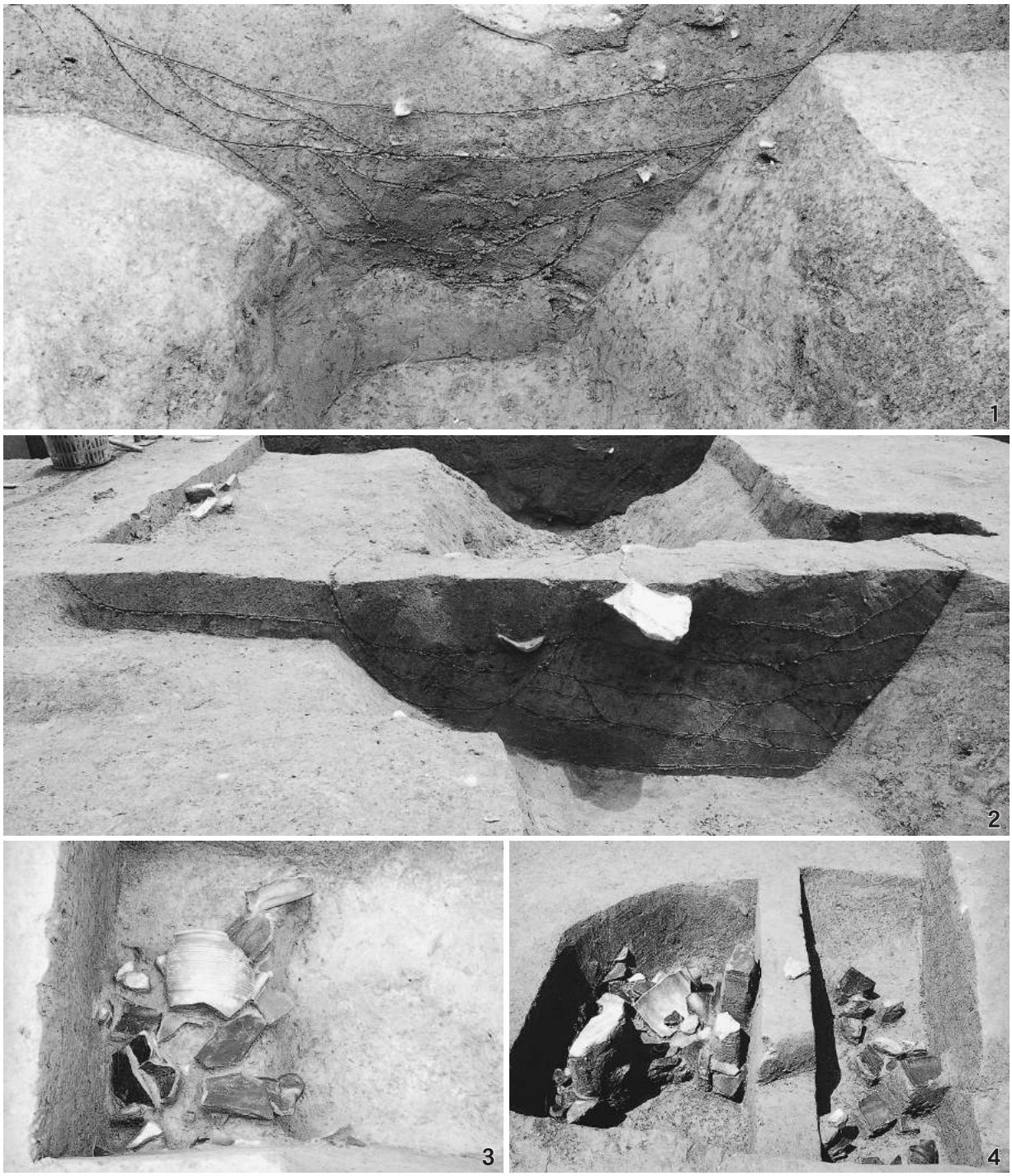
下．断面西半部（南より、下部は石組み船入状遺構Ｓ 36）



江戸時代第１遺構面(2)　土坑Ｓ 16
上．遺物出土状況（北より）　下．同（東より）

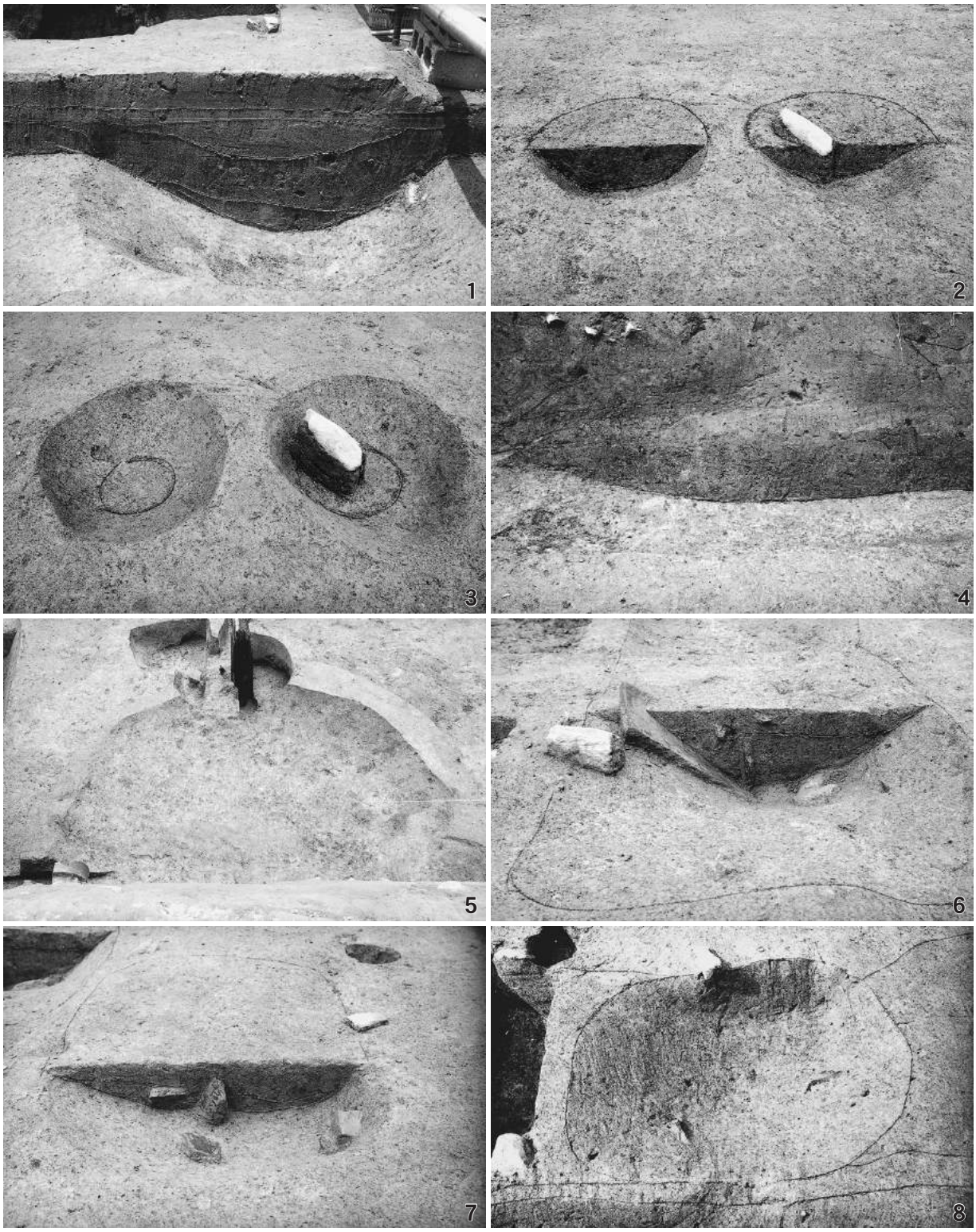
江戸時代第 1 遺構面(3)　土坑 S 16

1.　東西断面西半部(南より)　2.　同東半部(南より)
3.　南北断面(東より)　4.　遺物出土状況(北より)
5.　同(北より)　6.　同(南より)　7.　同(北より)　8.　同(西より)



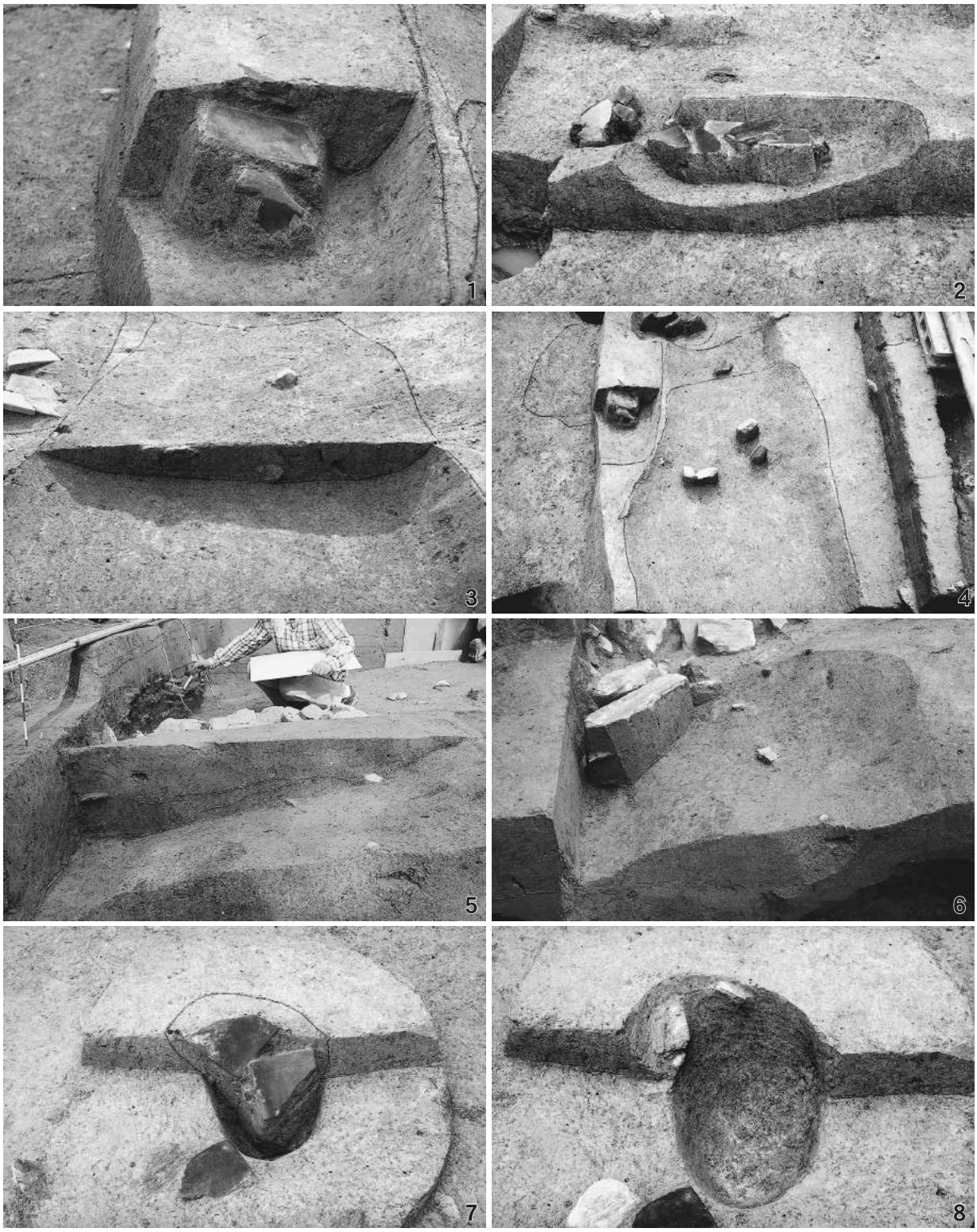
江戸時代第 1 遺構面(4)　溝 S 19

1. 東壁土層断面(西より)
2. 溝 S 19・土坑 S 25・土坑 S 27 切り合い断面(西より)
3. 遺物出土状況(南より)　4. 同(南より)



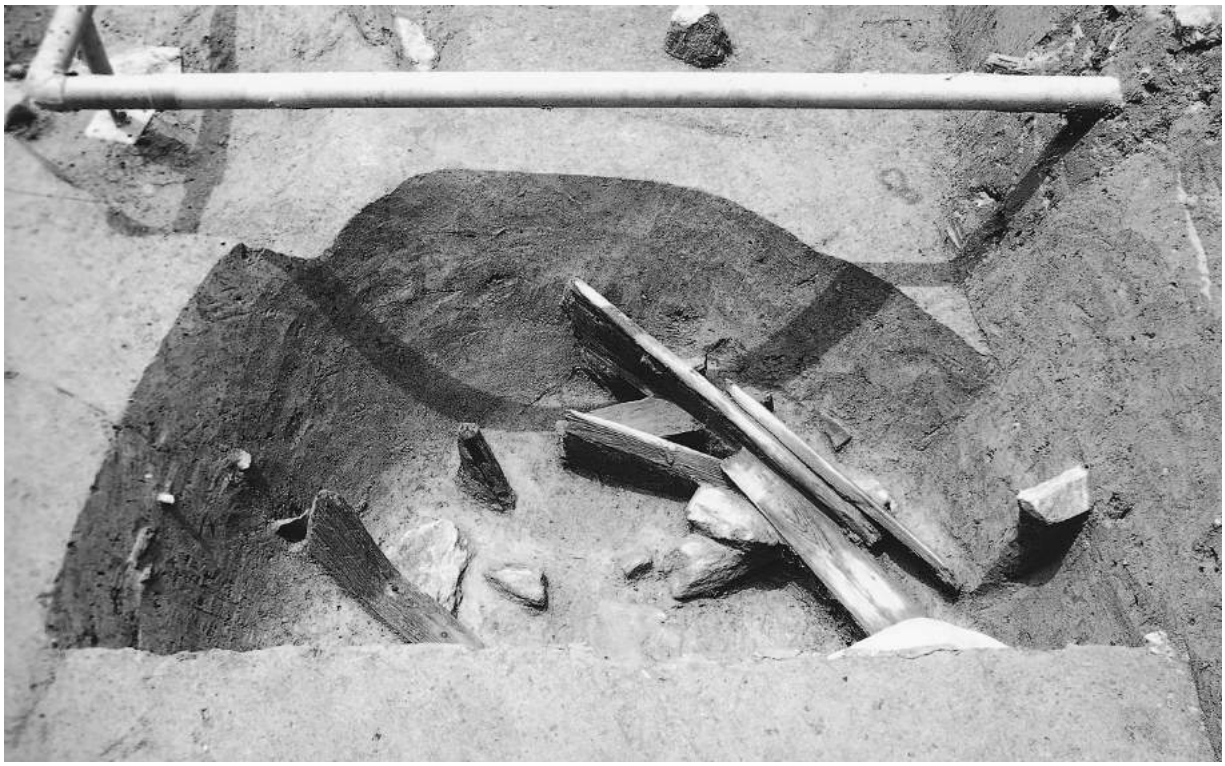
江戸時代第 1 遺構面(5)　土坑 S 18・S 21・S 22・S 23・S 25・S 26

1. 土坑 S 18 断面(東より)　2. 土坑 S 22(右)・土坑 S 21(左) 断面(東より)
3. 同完掘(東より)　4. 土坑 S 23 断面(東より)　5. 同完掘(西より)
6. 土坑 S 25 断面(東より)　7. 土坑 S 26 断面(東より)　8. 同完掘(南より)



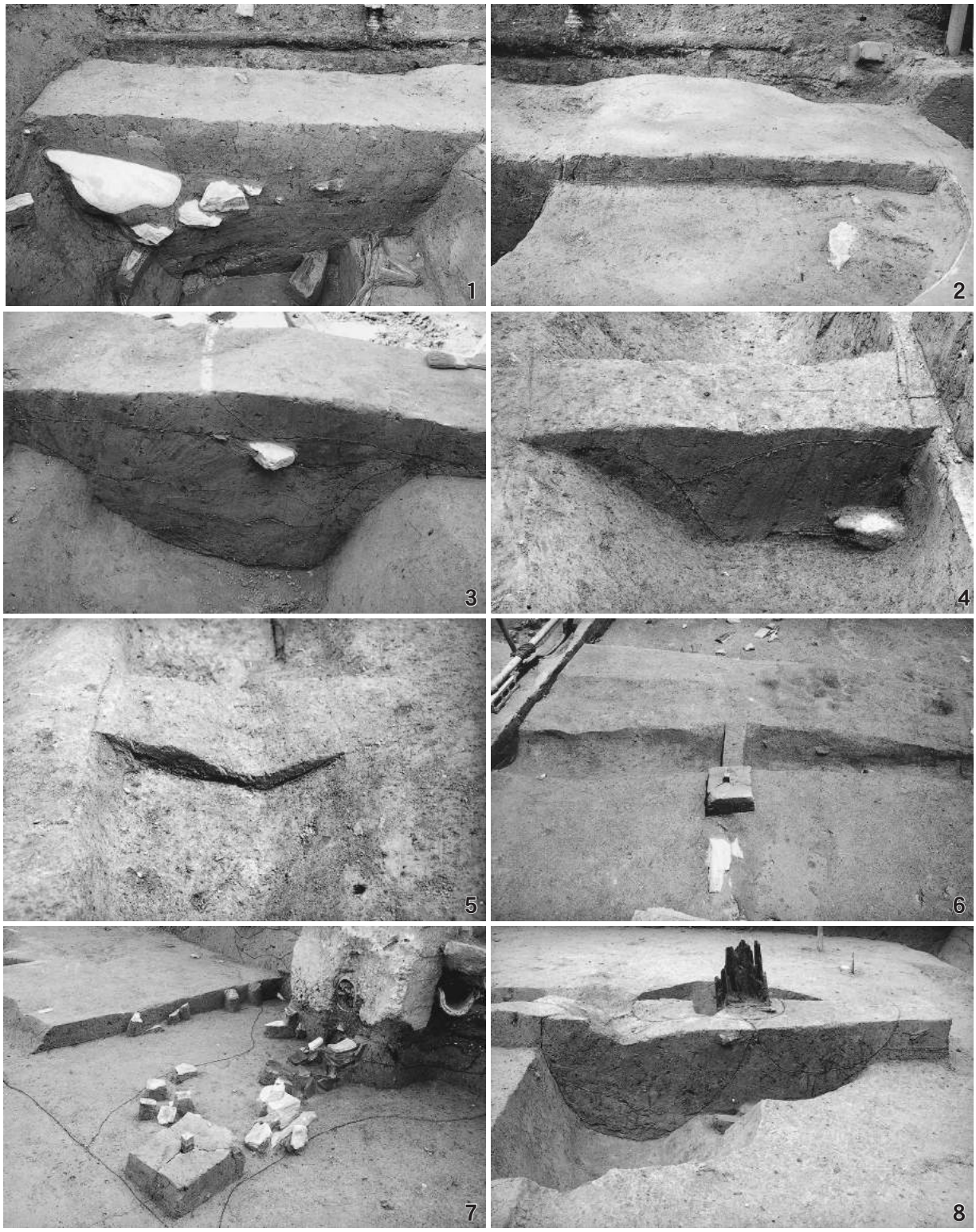
江戸時代第 1 遺構面(6)　土坑 S 28・S 29・S 33・S 34

1. 土坑 S 28 断面(東より)　2. 同遺物出土状況(南より)
3. 土坑 S 29 断面(東より)　4. 同完掘(東より)　5. 土坑 S 33 断面(西より)
6. 同完掘(西より)　7. 土坑 S 34 断面(東より)　8. 同完掘(東より)



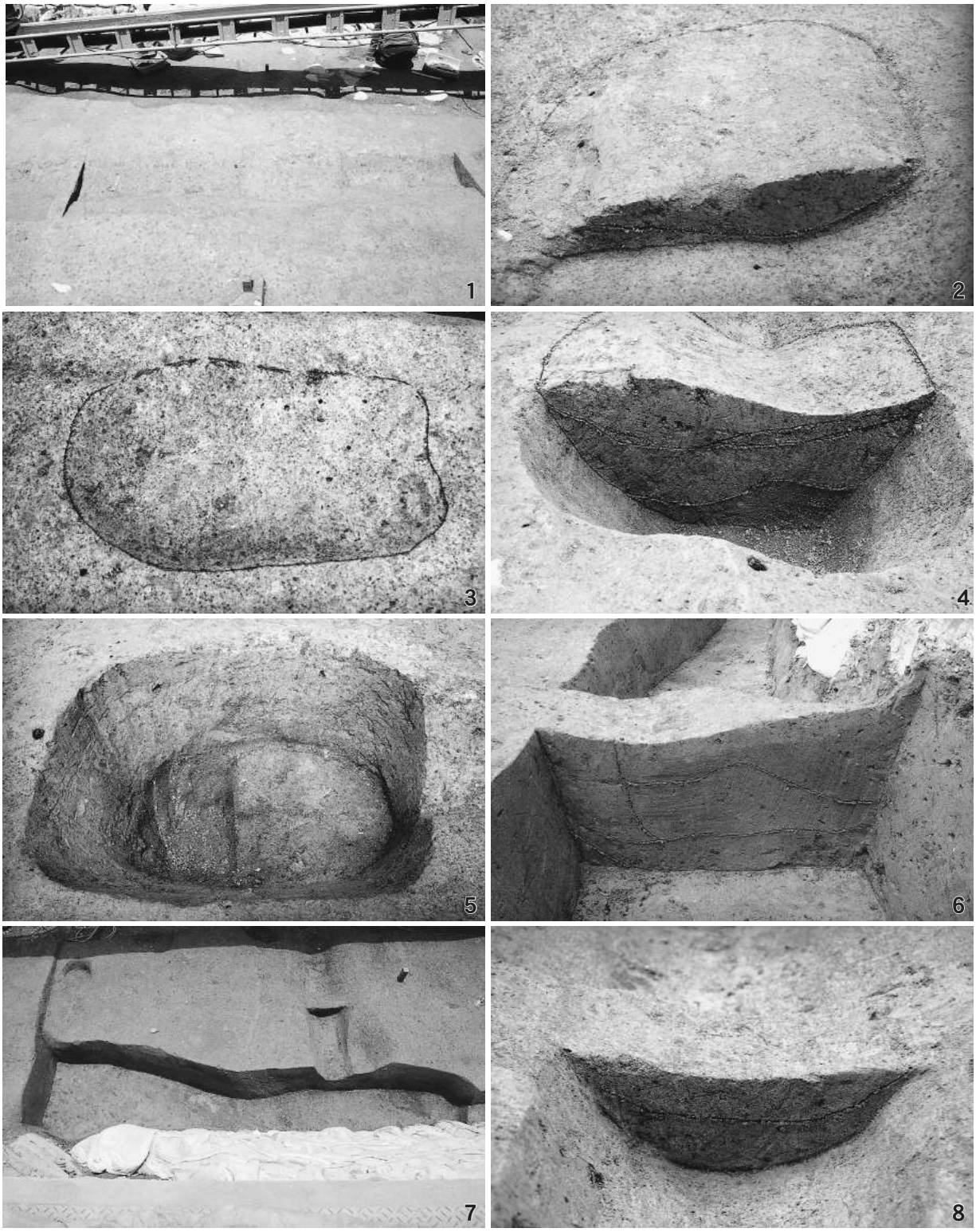
江戸時代第 1 遺構面上半(1)　井戸 S 08
上．遺物出土状況（北より）　下．同（北より）

江戸時代第１遺構面上半(2)　井戸Ｓ 08、曲物埋設遺構Ｓ 09
上．井戸Ｓ 08 完掘（西より）　下．曲物埋設遺構Ｓ 09 完掘（南より）



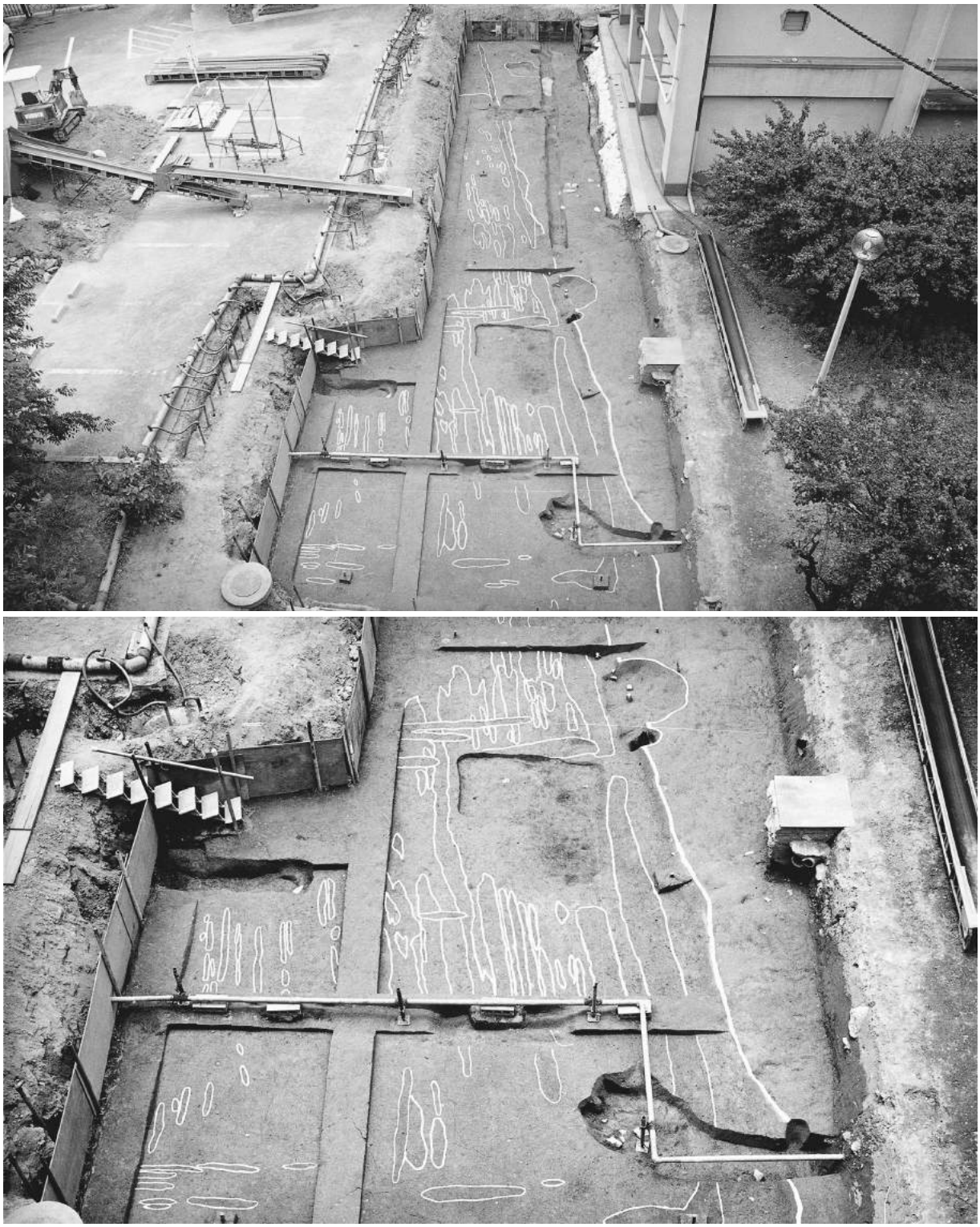
江戸時代第１遺構面上半(3)　井戸Ｓ 08、曲物埋設遺構Ｓ 09、土坑Ｓ 05、溝Ｓ 07、土坑Ｓ 10・Ｓ 11・Ｓ 15

1. 井戸Ｓ 08 断面(南より)　2. 曲物埋設遺構Ｓ 09 断面(南より)
3. 土坑Ｓ 05 断面(南より)　4. 溝Ｓ 07 断面(北より)　5. 同断面(南より)
6. 同完掘(西より)　7. 土坑Ｓ 10 遺物出土状況(北東より)
8. 土坑Ｓ 11・Ｓ 15 断面(北より)

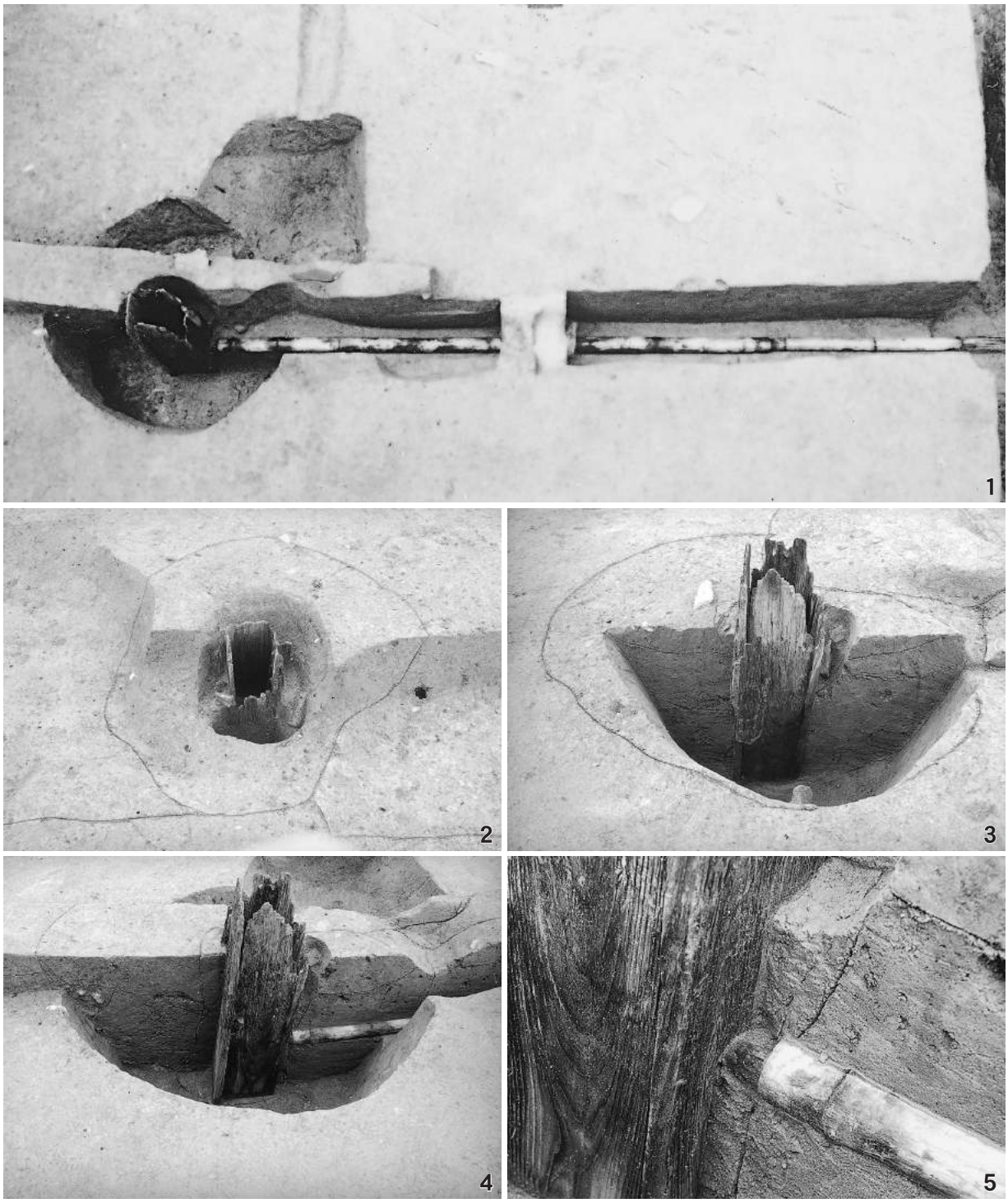


江戸時代第１遺構面上半(4)　溝Ｓ 12、土坑Ｓ 13・Ｓ 14・Ｓ 20・Ｓ 24

1. 溝Ｓ 12(東より)　2. 土坑Ｓ 13 断面(南より)　3. 同完掘(東より)
4. 土坑Ｓ 14 断面(東より)　5. 同完掘(東より)　6. 土坑Ｓ 20 断面(北より)
7. 同完掘(西より)　8. 土坑Ｓ 24 断面(西より)

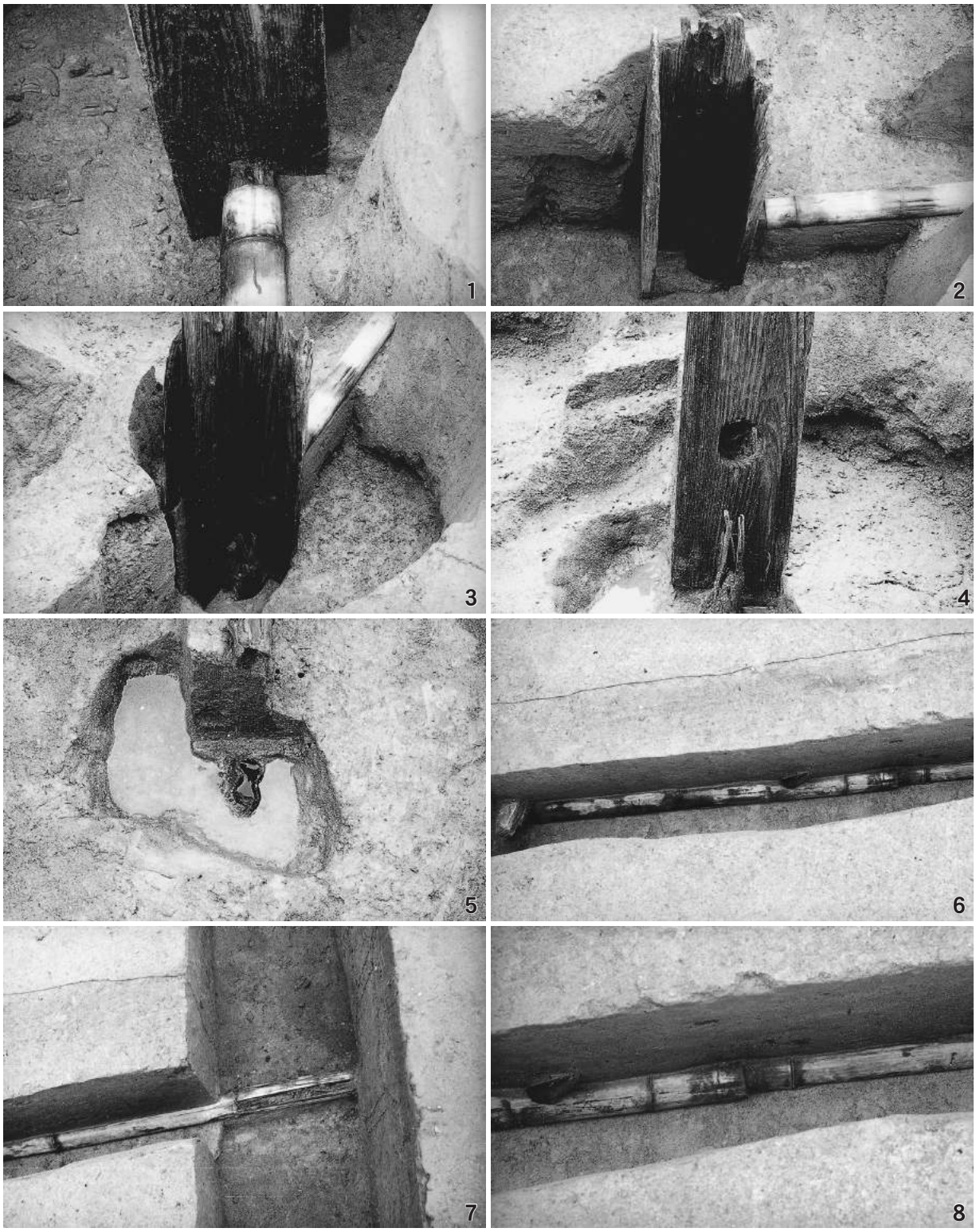


明治時代水田面(1)　水田Ｓ 01
上．下層鋤痕（北より）　下．同北側部分（北より）



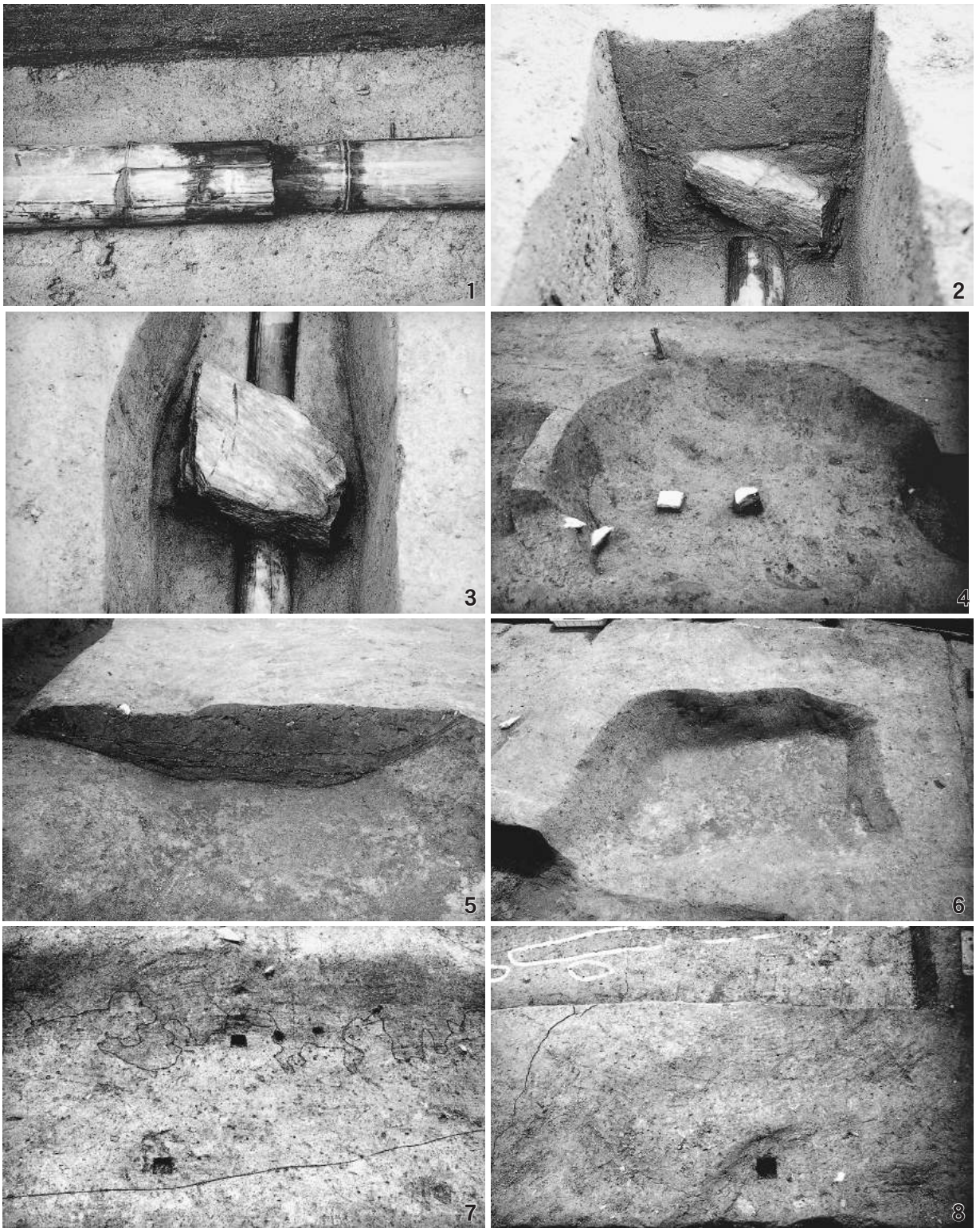
明治時代水田面(2)　揚水施設Ｓ 04・暗渠Ｓ 17

1. 完掘(南より)　2. 揚水施設Ｓ 04 木枠出土状況(東より)
3. 同断面(南より)　4. 揚水施設Ｓ 04・暗渠Ｓ 17 断面(南より)
5. 同接合部分拡大(南より)



明治時代水田面(3)　揚水施設Ｓ 04・暗渠Ｓ 17

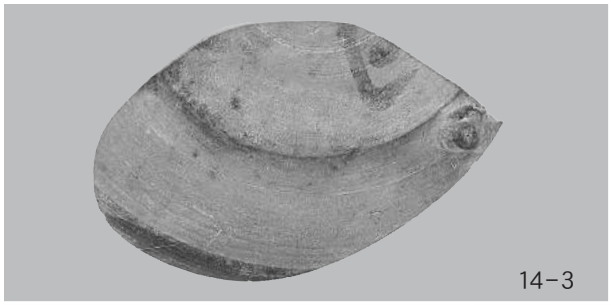
1. 接合状況(南より)　2. 揚水施設Ｓ 04 内部(南より)
3. 同(南西より)　4. 同(西より)　5. 揚水施設Ｓ 04 底部の竹筒(西より)
6･7. 暗渠Ｓ 17 断面(南より)　8. 同継目(南より)

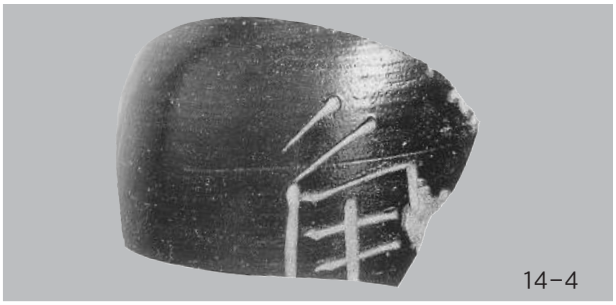


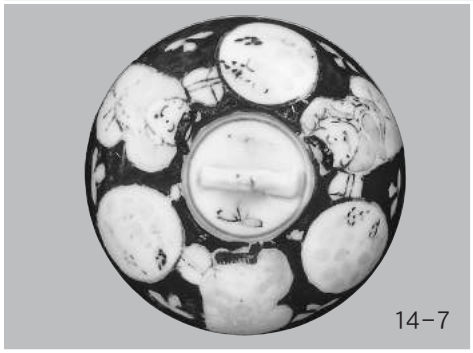
明治時代水田面(4)　暗渠Ｓ 17、土坑Ｓ 03・Ｓ 06、水田Ｓ 01サンプル採集地点

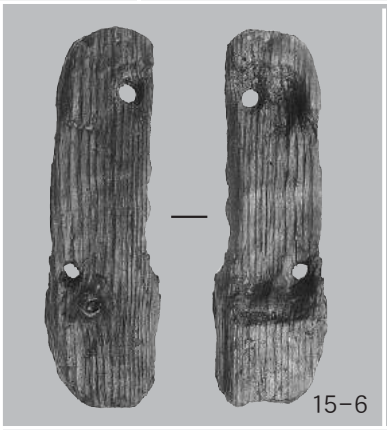
1. 暗渠Ｓ 17 継目(南より)　2. 同断面(東より)　3. 同固定石(東より)　4. 土坑Ｓ 03 完掘(東より)
5. 土坑Ｓ 06 断面(南より)　6. 同完掘(西より)　7･8. 水田Ｓ 01 サンプル採集地点(東より)

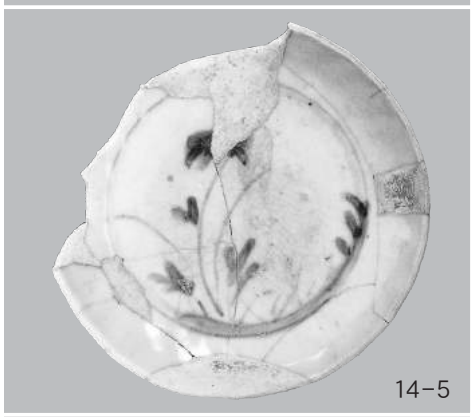
図版第 22

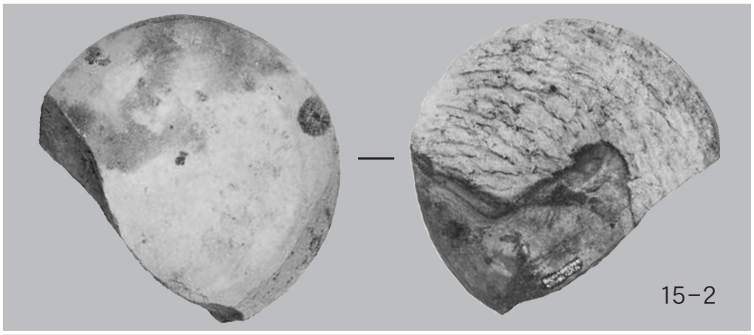


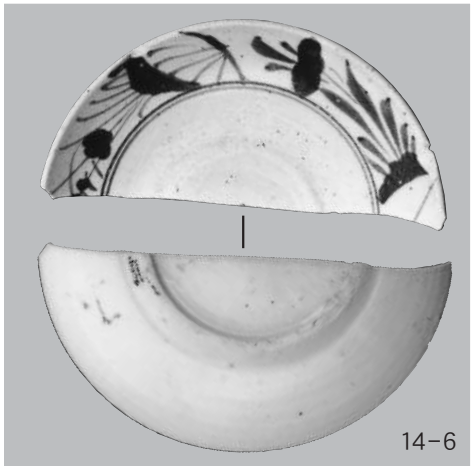


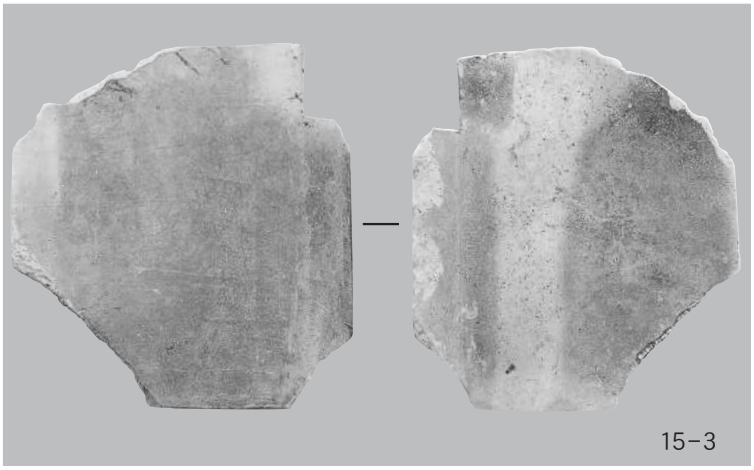




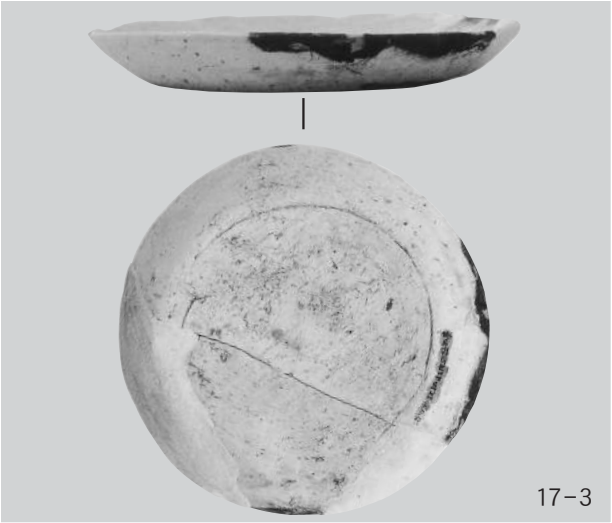


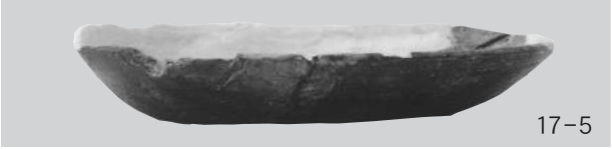


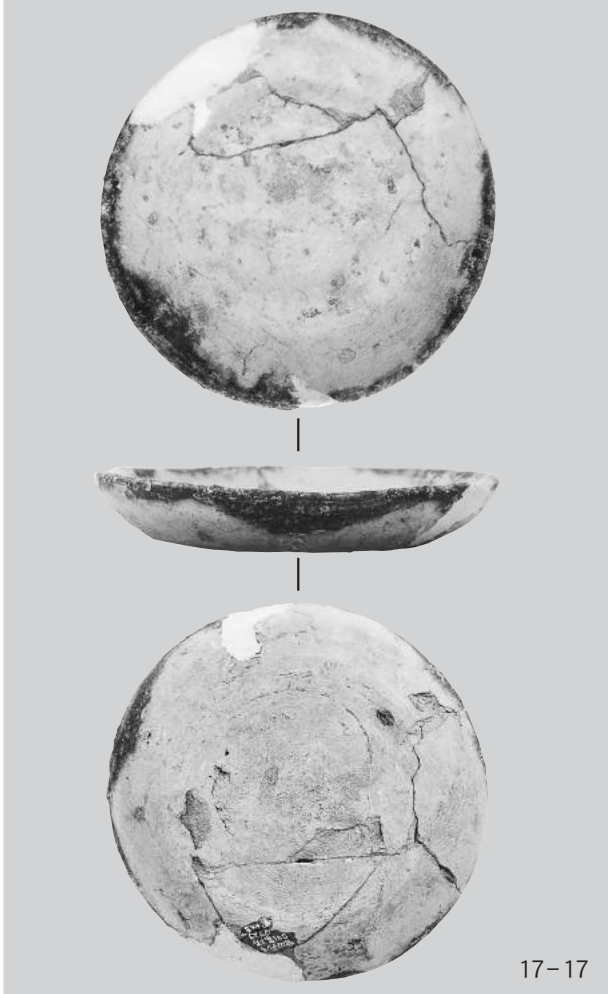




包含層出土遺物

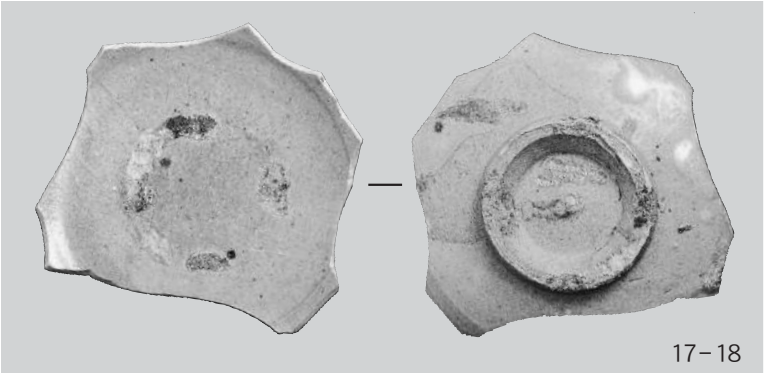


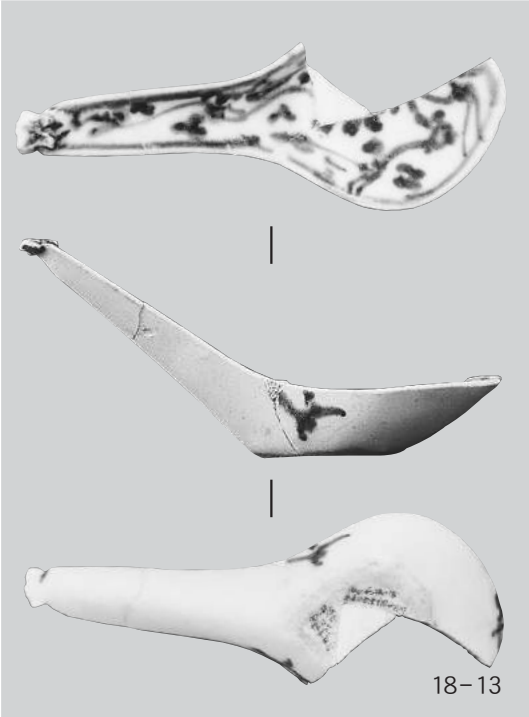


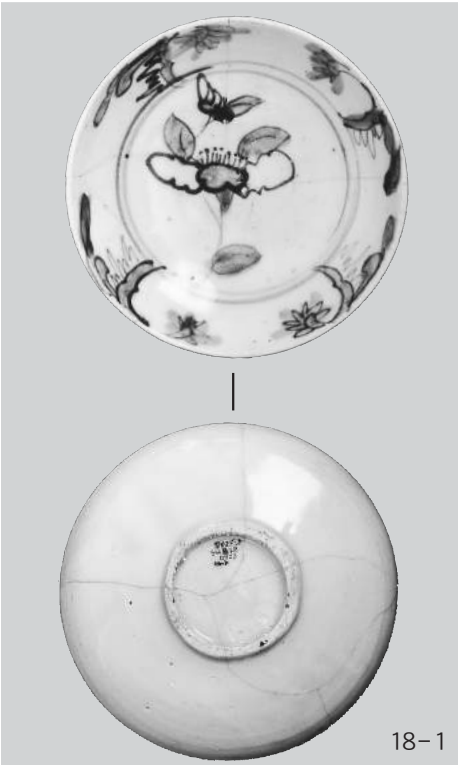


素掘り船入状遺構Ｓ 41 出土遺物(1)

図版第 24



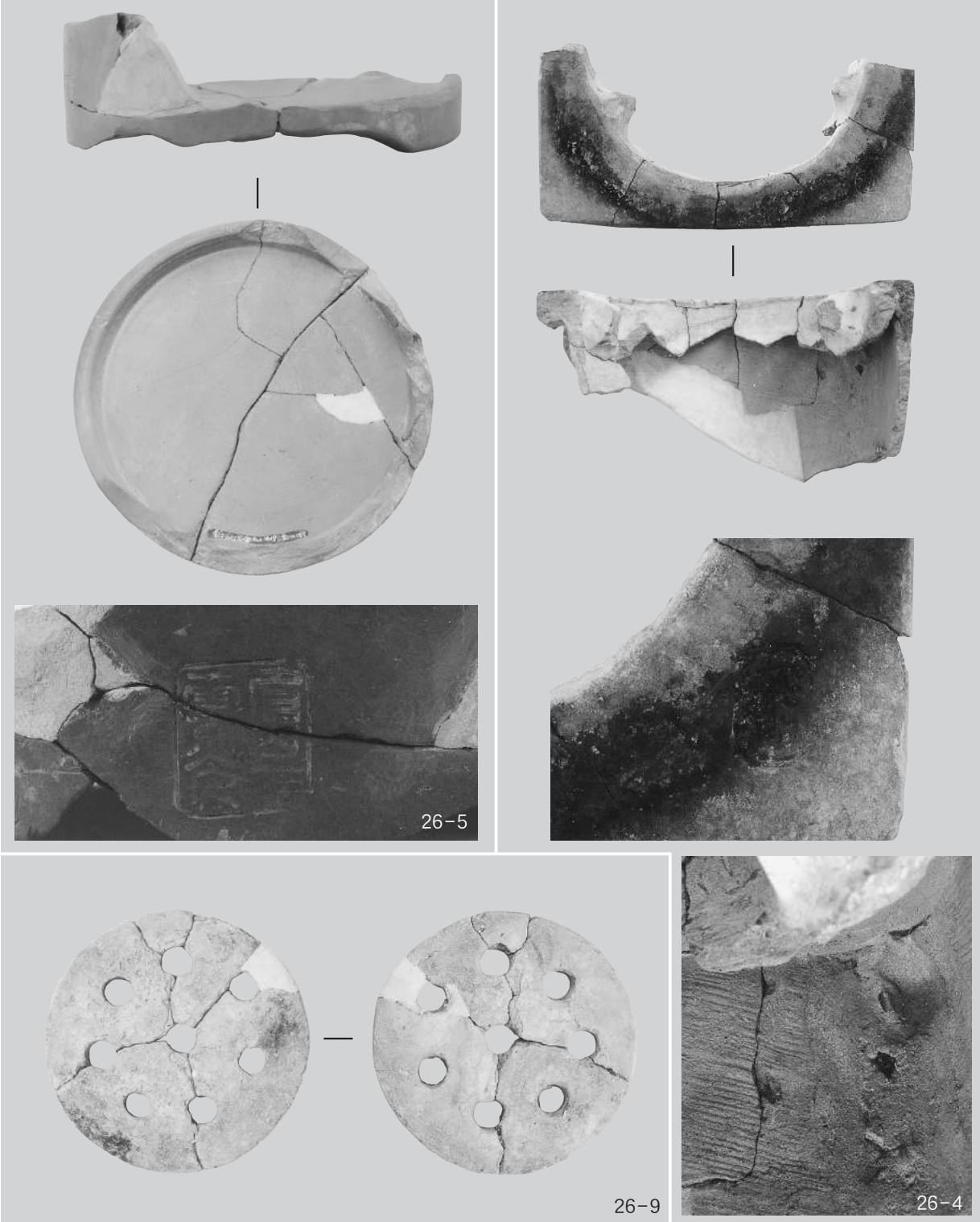




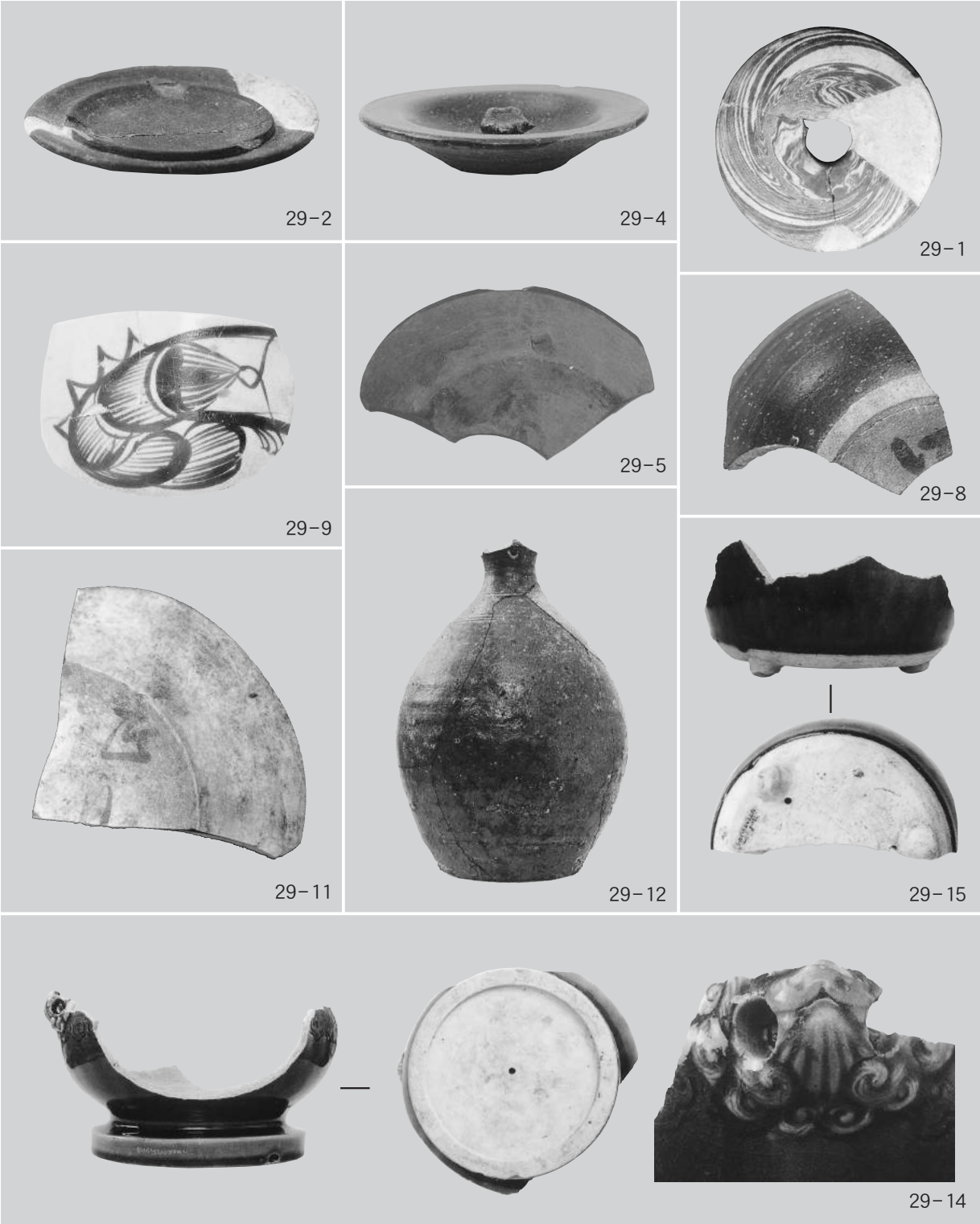
素掘り船入状遺構 S 41 出土遺物(2)

石組み船入状遺構 S 36 出土遺物

図版第 26



土坑 S 16 出土遺物(1)



土坑 S 16 出土遺物(2)

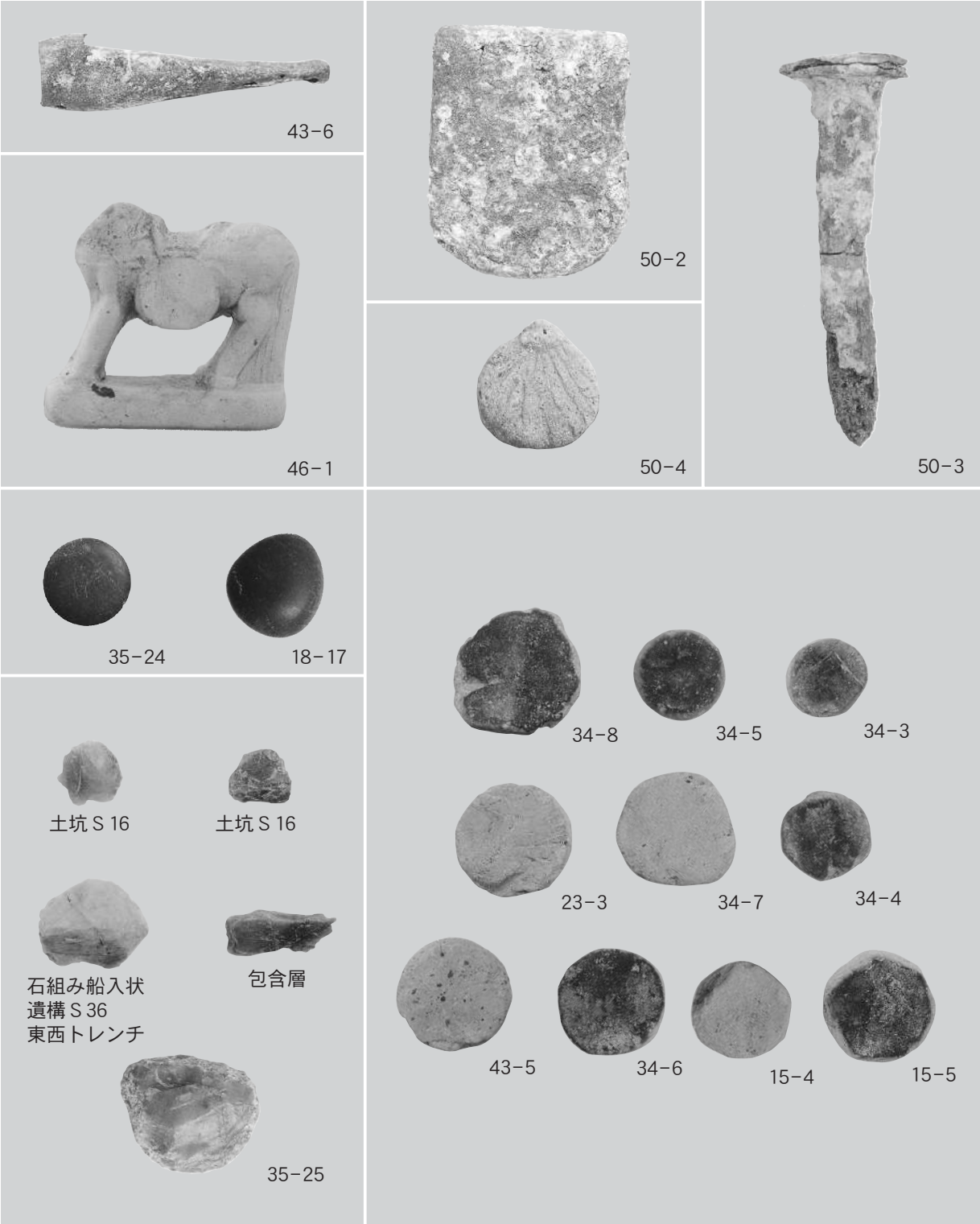
図版第 28

土坑 S 16 出土遺物(3)

土坑 S 16 出土遺物(4)

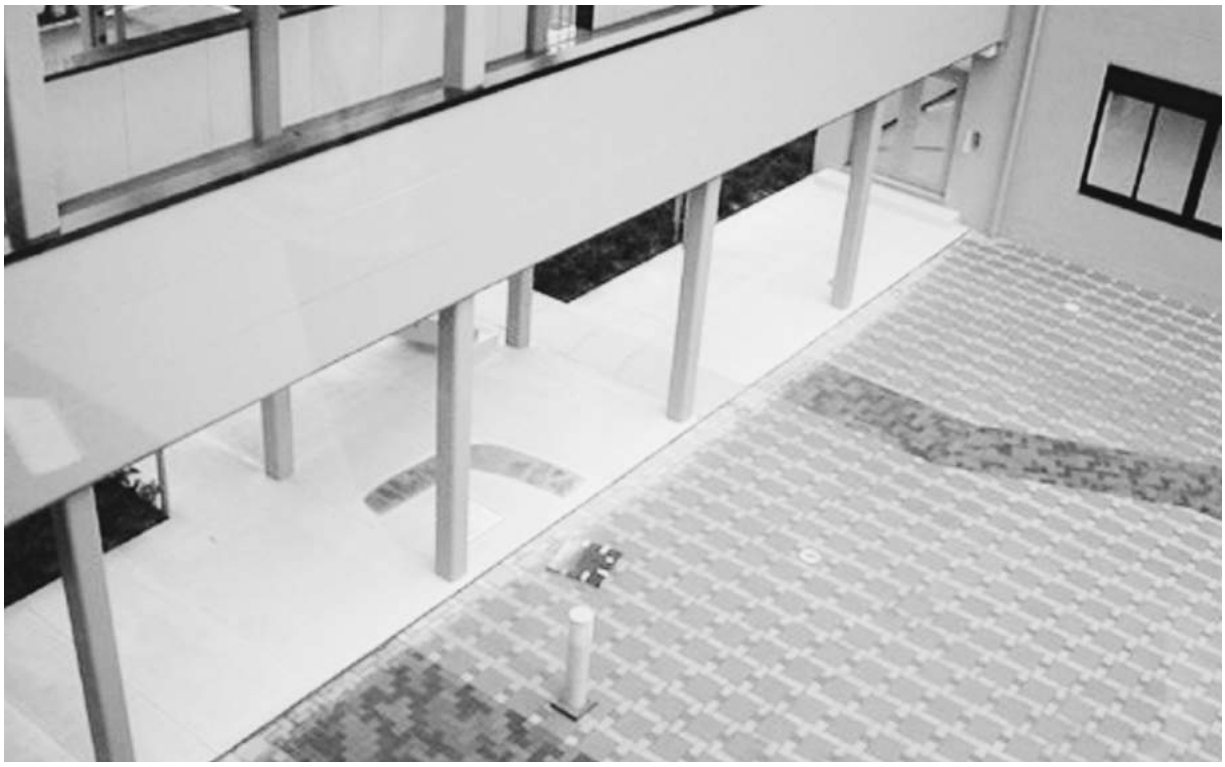
図版第 30

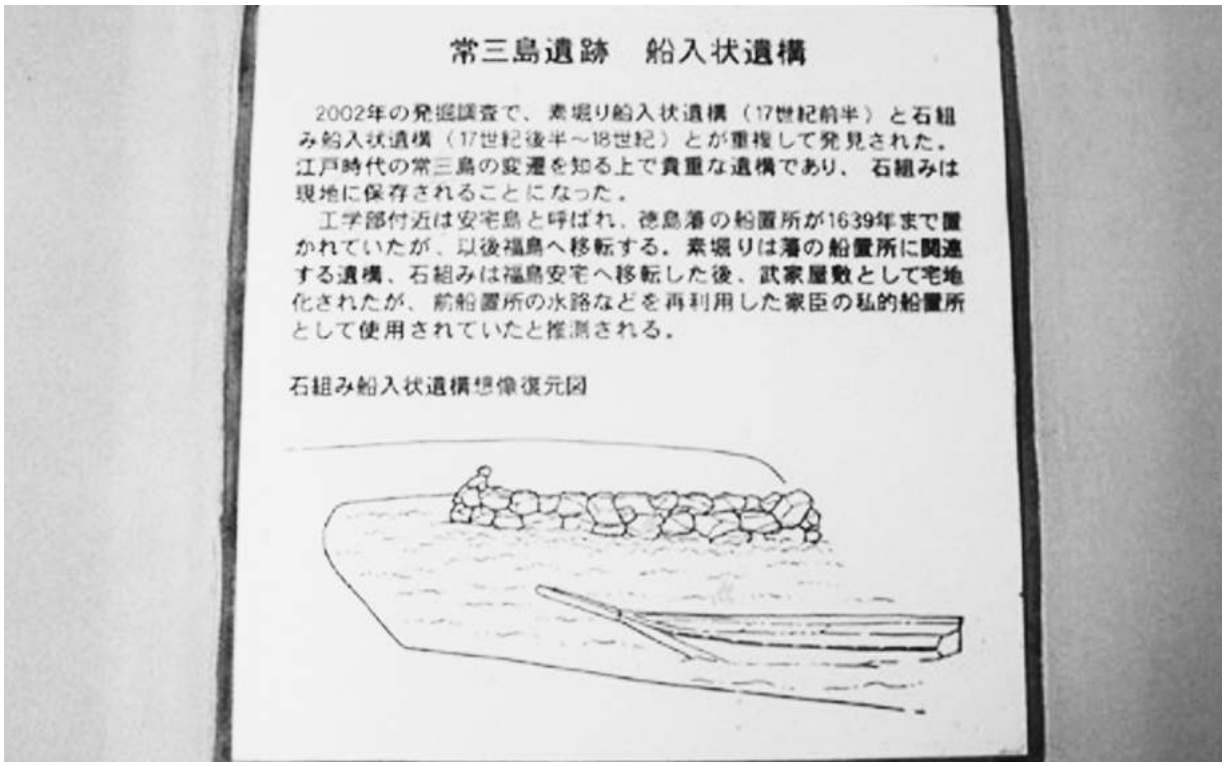
土坑 S 16 出土遺物(5)、溝 S 19 出土遺物、土坑 S 27 出土遺物



井戸 S 08 出土遺物、曲物埋設遺構 S 09 出土遺物、水田 S 01 出土遺物、土坑 S 03 出土遺物、碁石・火打石（無番は未実測）**・加工円盤**

図版第 32





常三島遺跡　船入状遺構

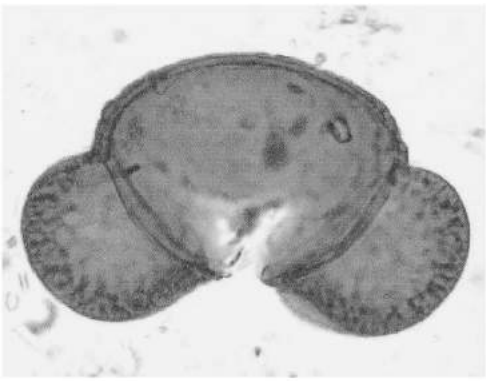
2002年の発掘調査で、素堀り船入状遺構（17世紀前半）と石組み船入状遺構（17世紀後半～18世紀）とが重複して発見された。江戸時代の常三島の変遷を知る上で貴重な遺構であり、石組みは現地に保存されることになった。

工学部付近は安宅島と呼ばれ、徳島藩の船置所が1639年まで置かれていたが、以後福島へ移転する。素堀りは藩の船置所に関連する遺構、石組みは福島安宅へ移転した後、武家屋敷として宅地化されたが、前船置所の水路などを再利用した家臣の私的船置所として使用されていたと推測される。

石組み船入状遺構想像復元図

工学部電気電子棟渡り廊下設置解説板
上．北棟より渡り廊下を望む　下．解説板

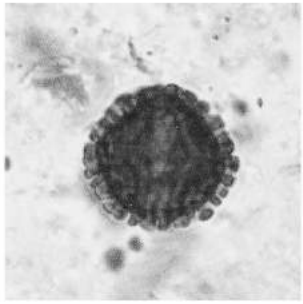
1　マキ属



2　マツ属複維管束亜属

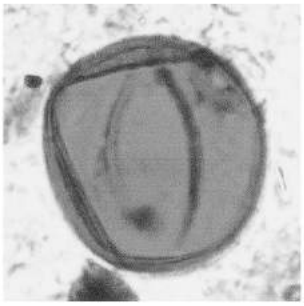
3　スギ

4　コナラ属コナラ亜属

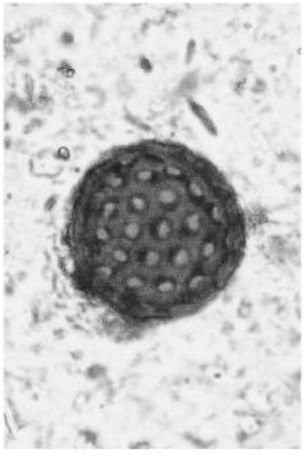


5　モチノキ属

6　マメ科

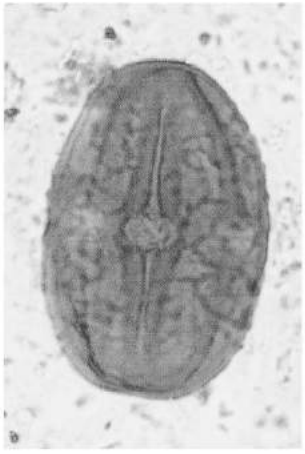


7　イネ属型

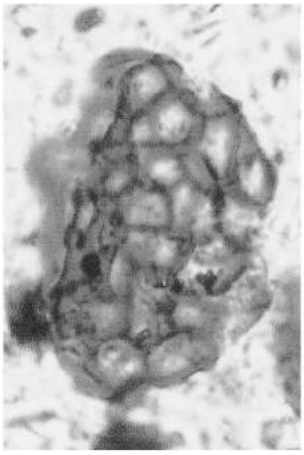


8　アカザ科－ヒユ科

9　アブラナ科

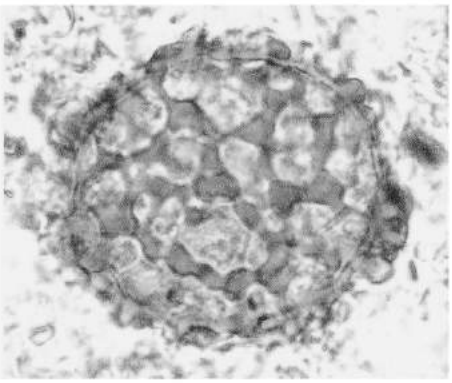


10　ソラマメ

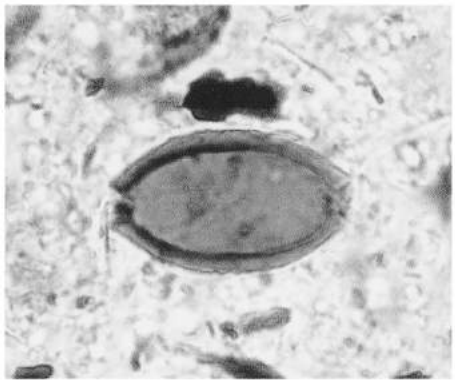


11　ササゲ属

12　ヨモギ属



13　回虫卵



14　鞭虫卵

10 μm

常三島遺跡工学部電気電子棟地点の花粉・寄生虫卵

報告書抄録

ふりがな	じょうさんじまいせき　いち
書名	常三島遺跡１
副書名	工学部電気電子棟地点
巻次	
シリーズ名	徳島大学埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第２巻
編著者名	定森秀夫・根津寿夫・金原正明・金原正子
編集機関	徳島大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒770-8503　徳島市蔵本町２丁目50-1　　TEL　088(633)7236
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じょうさんじまいせき 常三島遺跡	とくしまし みなみじょうさん 徳島市南常三 じまちょうにちょうめ 島町2丁目	36201		34° 04′ 37″	134° 33′ 46″	20020520 ～ 20020805	253㎡	徳島大学工学部実験研究棟改修その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
常三島遺跡	近世城下町	江戸時代	船入状遺構、溝、井戸、曲物埋設遺構、土坑	土師器、陶器、磁器、木器、石製品、金属製品	17世紀前半から中頃の素掘り船入状遺構、17世紀後半から18世紀にかけての石組み船入状遺構を重複して検出。前者は徳島藩の安宅島初期船置所の遺構、後者は宅地化以降の民澤家の私的水運遺構と推測された。
		明治時代	水田、溝、揚水施設、暗渠、土坑	金属製品	

2005年3月31日発行

徳島大学埋蔵文化財調査報告書　第2巻

常三島遺跡1

－工学部電気電子棟地点－

編集　国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
徳島市蔵本町2丁目50－1　(088)633－7236

発行　国立大学法人徳島大学
徳島市新蔵町2丁目24番地　(088)656－7000(代表)

印刷　徳島印刷センター
徳島市問屋町165　(088) 625-0135

常三島遺跡1
—工学部電気電子棟地点—
二〇〇五
国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

徳島大学埋蔵文化財調査報告書　第２巻

常　三　島　遺　跡　1

—工学部電気電子棟地点—

２００５

国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室